
Dies irae × **I S**

ドレイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i e s i r a e x I S

【Nコード】

N 6 5 6 9 Z

【作者名】

ドレイク

【あらすじ】

この話は、IS世界のキャラをDies iraeのキャラ風に人格改変したお話です。一夏が司狼っぽくなり、箒が蓮っぽい人格となって色々と騒動を引き起こします。

第一話

私が剣術に没頭するのは、ひとえに連綿と受け継がれてきた技術を受け継ぐことに至福を感じているからだ。満ち足りていくといつてもいい。

勿論、初めは気乗りしなかった。私は何気ない日常こそが好きだった。その気持ちを言葉にできない子供のころから、ずっと。だからこそ、そんな日常とは対極の方に位置する武道なんて、関わるだけでも嫌だと思っていた。

幼馴染の腐れ縁に言わせれば、私の思想はキチガイ以外の何物でもないらしい。故あって家族と離れ離れになってあいつの家に住むようになってからは、よくそのことで口論になったものだ。

曰く、人生は未知の刺激というスパイスがあつてこそ、そんな腑抜けた人生なんぞ死人のそれと全く変わらない。それに。

「お前は変わらない日常を愛しているんじゃないまの、変わらないままの刹那<輝き>こそを愛してるんだよ」

などと言われたこともあった。中々どうして、人の事を見ている奴だと思つ。その言葉はするりと私の中に入って、違和感なくぴつたりと奥底に嵌まった感じがした。

「お前はありふれた日常の中にも輝きを感じて。だからこそその輝きがいつまでも続いて欲しいと思つているだけで、変化そのものを嫌っているわけじゃないだろ？」

思えば、私は子供のころから美術品を鑑賞することが好きだった。

実家が神社を営んでいる関係上、寺社仏閣の貴重物を見る機会も多くて、そういうときはいつだって時間を忘れて見入っていた物だ。

成程、確かにそう言った物は、いつまでも色褪せぬ刹那<輝き>だろう。当時の人々が、狂おしいまでの情熱をこめて作り上げるからこそ輝きを放ち、そう言った物は後世でも評価され続ける。

そんな自分の気持ちに気付けば、剣術の修練というの、なかなかどうして悪くはなかった。先人達が己の命をかけて築き、連綿と続く命で以って残し続けた刹那、思えば、そのなんと輝いていることか。

その一端に触れるというのは、体力の続く限りいつまでも没頭し続けていたいと思うほどだった。

こうして、周囲からは剣術馬鹿と称される私が出来上がったのだ。開けても暮れても剣の事ばかり考えて、洒落た服で己が身を着飾るよりも、古流剣術の術理を収めるほうに注力する。そんな時代に逆行したかのような武者の自分だが、まあ今の私自身が悪くないと思っているから良しとしておこう。

「それにしても一夏、お前はとことん厄介事が好きだな」
「いい男には厄介事が付き物なんだよ」

そして私をそんな人物に変えた腐れ縁はというと、私と同じ教室で減らず口を叩いている。

言っておくがここは明文化されていない物の女子高みたいな場所で、男であるこいつがいられる場所ではない。

織斑一夏。染め上げた金髪に捲り上げた学生服の袖からは刺青が覗く、見紛うことなきチンピラだ。

そんな奴がここ、IS学園に何故いるかと聞かれれば答えは一つ。

コイツがISを動かしてしまったからだ。

何でも高校受験の会場にあったISを面白全部で触ってみたら動かしてしまった、ということらしい。

「第一お前、女尊男卑にどっぷり染まった奴を嫌っていただろうが」

「ん？ ああまあ……それ差っぴいても面白そうじゃねえか」

「それでお前にとってしてみれば地獄の様なここに来た、と？」

「そうそう、元から選択肢なんてない様なもんだろ？ 要は気持ちの持ちようさ。自発的にここに来たってことなら精神衛生の面でもプラスだろ」

相も変わらずプラス思考だなコイツは。身に降り注ぐ厄介事全てを未知の刺激としてとらえて、面白事に変えている。

正直言つて、コイツの事は馬鹿とは思えない。出会った時から一貫してぶれないその性根は、ここまできたらいつそ見事と言えるのだろうな。

私には決して真似出来ない、そして真似したくない姿勢だと思う。騒動に塗れた日常なんて御免こうむる。

「ちよつと、よろしいかしら？」

ああ、早くも厄介事の足音がすぐ後ろまで来ているようだ。全く、私を巻き込んでくれるなよこの馬鹿。

「聞いておりますの？」

「あれ、オレ？」

「明らかにお前に視線を向けているだろうが、よかったな、早速役得じゃないか」

「うええ、これが？」

「見た目は綺麗じゃないか」

「ばっかお前、よりどりみどりのこの状況、気にするべきは中身だろうが」

「……つまり？」

「こんな見た目からして高飛車そうな女、ちょっと引くわ」

心底嫌そうな表情を見せる一夏。まあ確かに、声をかけてきたこの女性は見た目からしてきらびやかな雰囲気を纏っている、いわゆるお嬢様という奴だろう。

「き……聞いて「ああ、私もちょっと近づきたくないタイプだな」ますのっ!!」

「いや、聞いてない」

「不本意だがこの馬鹿と同じく」

「聞いてますわよね、そんな反応返せるぐらいには耳に入っているでしょうっ!!」

「よし、では聞いてやろう。要件は何だ？」

「何でお前はそう偉そうなんだ」

「だってオレはこの学園で唯一の男子生徒だぞ？ 希少性でいえばオレが最上位にきまつてるだろ」

「馬鹿で最上位の間違いだろうが」

「お前よりはましたよ」

「それはこっちの台詞だこの馬鹿一夏」

「聞いてますのおおおおおおおおおおおおっ!!」

どうやら話しかけてきた人物は一夏のノリについてこれなかったらしい。絶叫を迸らせて肩で息をしている、御愁傷様だといっておく。

私が彼女の立場なら絶対近づきもしないだろう、実に度胸がある。

「一夏、そろそろちゃんと聞いてやれ」

「そうですね、世界唯一のISを動かせる男がどんな人物か見定めて差し上げようかと思いましたが、まさかこんなちゃらんぼらんな男だったとは」

「んなもん頼んでねえよ、小さな親切大きなお世話って知ってるか？」

「んなつ！？」

せつかく会話になったというのに、早速一夏の言葉で顔色を失う少女。まあでも、最初から話を聞いていたところで結果は変わらないような気がするがな。

「まあそう言つてやるな、上から目線でも一応は善意だからな」

「それでもどうせこの後には、「無様なあなたに、この私が教授して差し上げますわ」とかいうんだぜきつと」

「ああ、それはすごく想像できるな」

「だろ？」

「くっ……所詮は男ということですかっ」

そう言い残し、彼女は踵を返した。恐らくは、一夏の想像が凶星だったのだろう。ああ

まで言い当てられては、引き下がるしかなかったらしい。

「やっぱりお前、厄介事に縁があるな」

「楽しそうでいいじゃねえか」

「私は全然楽しくないな。場所は特異でも、平凡な学生生活を送りたかったよ」

私の苦言にも、一夏は悪童そのものの笑みを返すだけ。そんな表

情を見ていれば自然と溜息が流れてしまった。

流れ出た溜息は、すぐに教室内の喧騒に溶けて消えた。周囲からは突き刺さる視線が私にも感じ取れるぐらいに一夏に注がれている。普通の年頃の女性ならば、こんな環境下で出会った唯一の男性に興味を持つのだろうが、そうして現れたのがこないかにもなチンピラでは、興味よりも怯えが先立つのか、こうして遠巻きに見えているだけ。

それをこの馬鹿はわかっているのに、一切省みようとは思っていない。どうせ、女尊男卑などと謳っているくせに外見一つでビビってる奴なんぞ、こちらから願い下げとか思っているんだろう。

それならいつそ、「男のくせに生意気だ」とけんかを吹っかけてくる奴の方が面白いし、相手をするだけの価値がある。そんな戯言を心底思えるような奴だ。（さっきの少女はまあ、からかい甲斐がありそうだったから、ああいう結果になってしまったが）

「さて、クラス代表を決めようと思う」

教壇の上で教師としてみれば若輩ながらも、威厳に満ちた美声が響く。あの馬鹿とは似ても似つかないが、彼女の名前は織斑千冬と言って一夏の姉だ。

性格は一言でいえば謹厳実直。少なくとも公の場所でふざけた言動をすれば、即座に鉄拳制裁が飛んでくる。そんなのが唯一の肉親であるにもかかわらず、あれだけふざけた言動を一貫して続けられる一夏の馬鹿さ加減には、ほとほと頭が下がる。

そしてその馬鹿さ加減を、一夏はまたもや発揮してくれた。このIS学園において公式行事というのはISによる試合がメインだ。クラス代表というのはその名の通り、クラスの威信を背負う物だ。

自薦・他薦は問わない。という千冬さんの声を受けて、真っ先に上がったのは一夏の名前だった。怯えはしてもそれはそれ、やはりクラスどころか学園唯一の男子生徒を、表に引っ張り出さないという発想は無いのだろう。怯えた声で一夏を推挙するクラスメイトが何人かいた。

「納得いきませんわっ!!」

響いた怒声は、先程一夏に声をかけた彼女の物だった。縦ロールで綺麗に整えられた金髪を振り乱し、その白磁の様な顔を赤く染めて、彼女は一夏をクラス代表にする愚を語り始める。

「クラスの威信を背負う代表を、このような軽薄な人物に任命するわけにはまいりません。おまけに、ただISを動かすことができるという素人にそのような大役が務まるとは思えません!!」

全く持つて、実に真つ当な言い分だった。これっぽっちも反論できる材料が無い。

「このセシリア・オルコットのよう、実力ある者になるべきですわ」

胸を張ってそう言った彼女、セシリアに対し一夏の反応は。

「ああ、セシリアって名前だったのか、アンタ」

そう言えばあの時、セシリアは名前すら言わせてもらえなかった

な。というか、私も今ようやくセシリアの名前を知った。

「い……言っに事欠いて、今更私の名前を知ったのですかつ、あなたはっ!!」

「いや、お前自己紹介もしないまま帰っただろ」

「け……」

「け？」

「決闘ですわっ!!」

「もうお前にとやかく言うのは疲れた。勝手にしてろ」

この全自動トラブル製造機め。何で入学初日から決闘騒ぎが起きるんだ。コイツは何かトラブルを誘引する未知の物質をまき散らしているんじゃないだろうか。

「おう、勝手に楽しませてもらうぜ」

激怒したセシリア嬢が発端となって、“クラス代表決定とは何の関係もない”決闘が一週間後に取り決められた。クラスメイトはこの決闘の勝者がクラス代表になると思っていたみたいだが、千冬さんがこの馬鹿に権力と名分を持たせては何をするかわからないと、この決闘の勝者に関わらずセシリア・オルコットがクラス代表になることは決定済みだ。

普通ならばこんな経緯で決闘騒ぎが起こるなんてありえない。聞くところによるとセシリア・オルコットはイギリス代表候補生でおまけに専用機持ち。

対して一夏の馬鹿は今までISの操縦経験がない素人で、専用機の方も本当なら支給される筈だったが、「何か成果を上げたわけで

もないのに、どこかの誰かから施し受けろってか？ はっ、冗談きついで」と、日本政府の担当者の前で啖呵を切り、そこから喧々譁々の議論の末に何も手を加えていない量産機を支給するという事になっている。ガンとして意見を曲げない一夏と、防犯上の理由から是が非でもISを所持してほしい日本政府との、それが妥協点だった。

とりあえず一夏の機体は、明日にでも納入されるらしい。射撃の方を得手としている一夏に合わせて、中距離射撃戦に比重を置いた仏・デュノア社製第二世代型量産機<ラファール・リヴァイブ>をわざわざ日本の倉持技研がライセンス料を支払って持ってきたという。

「しかしお前、勝ち目はあるのか？ 端から負ける覚悟で戦いに臨むほど、お前は殊勝じゃないだろう」

私の問いに、一夏は変わらず悪童の笑みを浮かべてのたまった。

「まあ……なんとかするさ」

小賢しいコイツの事だ、本当に何とかするだろう。倦怠感にも似た呆れがそう身を奔る。こうなればこいつを叩きのめして憂さを晴らしてやると意気込んで、持っていた木刀に力を込めた。

一夏は非法法の手段で入手した黒光りするオートマチック サイレンサー付きのデザートイーグルを構える。中学のころから入り浸っていた不良グループなどの繋がりは未だ残っているようだ。私との勝負には拳銃を持ち出しているこいつは、子供のころはエアガンに始まり、今やデザートイーグルですらなんなく片手打ちできるほどに拳銃を扱いなれている。

しかし、そうしたところでよくもIS学園にまでそんな物を持ちこめるものだと感心する。しかもそんな物を、人気のない校舎裏と

はいえよくも平然と取り出すとは、恐らくはここも監視されている筈だが。

「おいおい、ぼさつとしてんなよ」

素人目にもわかる出鱈目な曲撃ち。乾いた音と共に飛来したプラスチック弾、ノリアクションで放たれたそれを、しかしその攻撃を予測していた私の木刀が弾き飛ばす。

私とコイツの勝負に、開始の合図など在于るわけがない。不意打ちを食らったほうが間抜けということだ。

迫る試合に向けて、実戦の勘を研ぎ澄ませたいと一夏は放課後に申し出た。とはいえこんな勝負など常日頃からやっているの、今更な申し出ではあった。

私が剣術の修練にのめり込むようになってから、一夏は事あるごとに勝負を吹っかけてきた。曰く、お前に先を行かれるなんて我慢ならない、と。

そうして日を追うごとに、年を重ねるごとに繰り返された勝負はエスカレートし続け、今の様な本気の喧嘩染みたものになってしまった。

竹刀ではなく、硬い木刀を遠慮なく振る。プラスチック弾頭とはいえ、実銃をむやみやたらにぶつ放す。傍から見れば殺し合いにしか見えない、そんな異常な光景。

私の斬撃が、アイツの銃撃が、互いの皮膚に切り傷を作り、勝負の果てに武器をとり落とせば、そこから先はただの取っ組み合い。磨いた腕も、重ねた経験、そんな一切を無視しての格闘戦。至る所に走る鈍痛が熱を持って私の脳髓を茹で上げる。

コイツにだけは負けたくない。そんな餓鬼の意地としか言えない熱気に浮かされる頭で、いつも私は思うのだ。

よくもこんな異常を、私の日常＜輝き＞にしてくれたな

そんな物騒な日常に寮の門限ぎりぎりまで没頭し、何故が同室になつてしまつていた寮の自室に、競い合うようにへたり込む。

「あゝくそ、また引き分けか」

「いい加減に負けろ、一夏」

「馬鹿言え、負けるのは筈の方だろ」

精も根も尽き果てて、そのまま眠つてしまいそうになる欲求に抗いながら、それでもやるべき事があつた。

「なあ一夏、お前をぶちのめして日頃のうつぷんを晴らすのは、私だけの特権だ」

「ああオレも、お前に負けるのは嫌だが、他の誰かに負けるのはもっと嫌だね」

それだけ確認できれば十分だった。一夏は反骨心の塊みたいな奴だから、ならばきつと、奇手奇策小細工何でも使つて、必ずどうにかするだろう。

一週間というのは、本当に短い時間だ。あつという間に勝負当日となつて、私はアリーナの管制室で千冬さんと一緒に一夏とセシリア・オルコットの試合を観戦しようとしていた。そのほかにも、ク拉斯の副担任である山田先生も詰めかけている。

「どう見ます？ 織斑先生」

やはり教師といえども、世界唯一の男性操縦者がどのような戦い方をするのか気になる様で、メガネの奥に好奇心を湛えながら問いかける。

「まあ、普通ならばオルコットの勝ちと見るがな……あの愚弟の事だ。どうせ何がしかの小細工をするに決まっている」

その言葉に、私も内心同意する。アイツ<ラファール・リヴァイブ>が届いた後の実機訓練で、何か閃いたのかもものすごく嫌な笑顔を浮かべていた。

あれはきつと、また何か下らない小細工を考えついたに違いない。そんな奴がただ一方的に負けるといことなど、私も千冬さんも想像すらしていない。

その時、試合開始の合図がアリーナ内に鳴り響き、ディスプレイの中に映っていた二機のISも同時に動き出した。

反発する磁石のように、瞬時に距離をとる<ラファール・リヴァイブ>と<ブルー・ティアーズ>。

初手は同時、IS用の中でも最大の口径を誇る大型ハンドガンを両手にそれぞれ持った一夏と、専用の大型レーザーライフル<スターライトMk?>が同時に火を噴く。

交差する鉛玉と閃光は、しかし互いに空を切った。一夏の顔にはいつもと変わらない人を食ったような笑みが、オルコットの顔には一夏の予想外の攻撃に一瞬だけ強張った表情が張り付いていた。

「成程、ただの的ではないようですわねっ」
「はっ、ほざいてろっ」

そのまま空中で三次元機動をこなしつつ、的確な狙撃を行うオルコット。精妙で優雅な機動を行いつつの狙撃は、オルコットの自負に見合った精度で行われている。

幾度もの閃光が一夏へと降り注ぎ追い立てていく。そんな物を喰らっている一夏の方かというと、それでも笑みを絶やさず……いや、あれはより面白がっているな。ともかく、表情だけには苦痛を見せず必死に逃げ回る。

それでも逃げ回ることができているあたり、素人とは思えない操縦だった。しかし、素人とは思えないだけで、間近の比較対象であるオルコットの機動と見比べれば、その差は歴然だ。

「オルコットさんもすごいですけど、織斑君もすごいですね」

確かに、完全にずぶの素人である一夏がここまで持っているのは、普通ならば驚愕以外の何者でもないのだろう。

「こっちで身体状況を見る限りでは、理想的な興奮状態を維持しているみたいですし、初の実戦だって言うのに緊張とか無いんですよか」

その山田先生の言葉に、知らず私と千冬さんの嘲笑が重なった。

「くくく、あいつが緊張？」

「そんなに笑いを堪えることでしたか！？」

「当たり前だろう、あの愚弟が緊張？ あらと思うか篤」

「あり得ません、あいつにそんな可愛げがある筈が無い」

私たちの反応に、山田先生はどう返していいのかわからないようだ。私としては一緒になって笑ってやればいいと思うがな。

そんな会話が流れるときにも、一夏は曲芸の様に出鱈目な、それ

でいて的確な狙いの射撃を連発し、オルコットを牽制している。酷い時となると、視線なセシリアをとらえていないのに、それでも銃弾は<ブルー・ティアーズ>の至近を通過したぐらいだ。

いくらISが操縦者に全方位の視界を与えとはいえ、その適応能力の高さに舌を巻く。

「それにしても織斑君射撃が上手ですね」

まさか常日頃から実銃ぶっ放しまくっているとは、口が裂けても言えなかった。

「ああ、あの愚弟は“なぜか”射撃が上手くてな」

全てを知っている筈の千冬さんが、意味ありげな視線をこちらに向けつつそうこぼした。というか千冬さんは全て知っている。何せ一夏が発端となった騒動に私ともう一人の幼馴染が一緒になって巻き込まれ、最後は千冬さんの強力な拳骨を喰らうのが、少し前までの日常だった。

そのせいで千冬さんは、一夏の悪事など事細かに知っているし、そのたびに虐待一步手前の制裁を喰らわされているが、それである馬鹿が更生するなんて言うことは一切なかった。

…… 本当に反骨心の塊みたいな奴だな、ひねくれ過ぎだろう。

「本当に粘りますわねっ!!」

苛立ち交じりの声と共に、<ブルー・ティアーズ>から四つの飛^{ツト}翔体が分離する。自律行動するそれは、まるで主の命を受け獲物を狙う猟犬の様に一夏を追いたてる。喰らい付くのは牙ではなくビーム砲だ。

「おいおい、そんなのありかよ」

空になった弾倉をグリップから排出し、新たな弾倉をグリップ内部に量子展開しながら、襲いかかる四つの猟犬に対し愚痴を漏らす。

「あら？　ここにきて怖気付かれたのかしら、それとも降参したくなり了吗の？」

「バゝカ、こういうところで勝ってこそ、株が上がるってもんだろ？」

追い立て続けられながらも、その眼に宿る闘志には微塵の揺らぎもない。いやむしろ、今こそが勝負どころだと思ったのか、一夏は追いすぎる四つのビットを無視して、ハンドガンを格納し、両手に手持ち式のシールドを展開する。

「大言壮語した割に、行うことが特攻とは浅はかですわねっ！！」

真正面からくるのならば、ビットを使わずともくスターライト Mk?>による射撃で十分と判断したのか、強力無比な閃光が一夏の手に持つシールドに赤く溶けた弾痕を刻む。

現用火器に対しては圧倒的な防御力を誇る筈のシールドは、たった数発のレーザー照射で爆碎されて用を成さなくなる。

「　　いいや、ここまで近づけば十分だ」

だが、ある程度は距離を詰めることには成功している。そう投擲物が当たるぐらいには、一夏とセシリアの距離は縮まっていた。

それはぱつと見る限りでは、何がしかの爆発物なのかと思わせた。ハンドグレネードか、あるいは音響閃光弾か、それで隙を作ろうという心算だろうか。

「そんな物が奥の手？ 無意味ですわっ」

身を翻し直撃コースから外れ、例え爆発やら閃光やらが飛び出したところで、ISのシールドはそれらを完璧に防ぐだろう。

セシリアの言う通り、一夏の奇策は不発に終わるのだろうか。そんな表情が観客の生徒や山田先生の顔に張り付く中、私と千冬さんは全く別の事を考えていた。

（……………あの缶詰、あの馬鹿まだ持っていたのかっ！？）

そもそもあれは武器でも何でもない缶詰じゃないか。去年あの馬鹿が話の種としていくつか買って惨劇を引き起こした、ある意味劇物の缶詰。最早食用としても期限切れとなつて、完全に生ごみと化した缶詰を、一夏はセシリアの間近で撃ちぬいた。

そう、世界一臭い食べ物として有名な、シユールストレミングの缶詰を、だ。

飛散する内容物、完全に発酵しきつてドロドロの液体と化したそれが、弾丸によって空中にぶちまけられて、最早匂いの毒と称せる様な臭気をばらまいた。

臭気という極小の微粒子に、ISのシールドが自動で反応する筈もなく、オルコットの整った鼻筋に開いた鼻腔が蹂躪される。

オルコットの顔が、予期せぬ刺激に歪み苦悶の表情を浮かべる。

「ぐっ！？ 何なんですのっこれはっ！！」

流石のISでも、極悪な腐臭からは操縦者を守らなかつたらしい。設定すれば防げるだろうが、何処の世界にISへそんな設定をする馬鹿がいるのか、あんな臭いを間近に食らってオルコットの動きが止まる。

「オレの秘策。ということで俺の勝ちだな」

そして、あらかじめそういう設定をしていた馬鹿は、何の影響も受けずにオルコットとの距離を詰め、零距离からのハンドガン全弾発射で<ブルー・ティアーズ>のエネルギーを零にした。

一応は一夏の勝利ということで幕を閉じた決闘の後、オルコットは一夏に鬼の形相で詰め寄った。

「あなたっ、あんな手段で勝つなどと恥は無いのですかっ！！」

「はあ！？ お前本気で言ってるの？ 俺が素人だってわかっていただろ」

「それとこれとは話が別です！！ 私が言いたいのは、素人ならば素人なりに真面目におやりなさいということですよっ！！」

千冬さんや私がいる前で、オルコットは至極真つ当な反論をした。したつもりだったのだろう。少なくとも彼女にとってしてみればそれはその通りだったが。

「お前馬鹿かよ」

「なっ!？」

一夏の反論に、言葉を失った。齟齬が無い理論展開を前にしてすら、未だ私を侮辱するのか、とその表情だけでも明確に読み取れた。

「ああ確かに、オレは素人で、ISの試合って言う点ではあらゆる面でお前に負けるよ。けどな、だからこそ、オレはお前に勝つために持てる物全てを使った。少なくとも、オレは使える手段全部使って戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦った。そこに誓って嘘はねえよ」

そんな一夏の“らしい”言い分に、つい顔がほころんでしまいそうになる。それは私だけでなく、千冬さんも同様だったみたいで、その顔に苦笑を湛えながら二人の間に割って入った。

「そこまでしておけオルコット、確かにこの馬鹿の手段は手放しで褒められるものではないが、それでもお前が最初から全力で臨めば、こんな結果にはならなかっただろう」

「……………それ、は」

「悔しいと思うのなら、それを糧にして増長することの愚かさを学べ。そして今度この馬鹿と一戦交えるときは完膚なきまでに叩きのめしてやるといい」

「ええそうですね、私がこの程度だと、こんな下劣な男に思われたままでは私のプライドに関わります!!」

「その意気だ、オルコット」

気炎を燃やすオルコットを見て、千冬さんは満足げな笑みを見せ、一夏もまた面白そうだと笑顔を見せた。

「やっぱりここは面白そうだなあ、箒」

「ふん、ここでもまたお前の騒動に巻き込まれるかと思うと、頭が痛くてかなわない」

それでもなお、皆につられて笑ってしまうのが、無性に腹が立って仕方がなかった。

第一話（後書き）

<あとがき>

ルートとしては先輩ルート後、一夏は司狼の転生体で箒は蓮の転生体です。箒の方は蓮の成分が薄まっていますが、一夏の方はがっつり色濃く残っているという感じで、そして鈴はバカスミポジション。そして一夏のISが単一能力を発動した場合、間違いなくIS版のマリゲナントチューマー・アポトーシスになるでしょう。

第二話

「 織斑、一夏」

身に染みついた悪臭を更衣室のシャワーで洗い流しながら、私に屈辱を与えた人物の名を呟いた。その呟きはすぐに水の流れる音に掻き消されたが、それでも、その名は胸の奥に宿り続けている。

あの男は最初から気に喰わなかった。髪を染め上げ、タトゥーを入れて、その見た目からして下劣な雰囲気を漂わせていた。

そんな状況だから、他のクラスメイトは彼を怖がって遠巻きに見つめるだけ。唯一の例外と言えば、確か篠ノ之箒という名前のクラスメイトだけ。ならばそう、この私が状況を変えるきっかけになるうと意を決し話しかけてみれば、端から私の話を聞こうともしなかった。

嘲笑うような口調でこちらを煙に巻くだけ、正直言って何故篠ノ之さんはこんな男と親しげにしているのか、まったくもってわからなかった。何一つとして美点が無い男。ただISを動かせたというだけで、名誉あるIS学園の門をくぐった不屈き者。完全に素人だということのならそれ相応の立ち居振る舞いがあるはず。素人だという状況に胡坐をかいてはいけなはずだった。

「でも……あの言葉は」

そんな人物をクラスの代表にさせまいと義務感に駆られ、決闘を挑んだ。そのこと自体に否は無い。

一時の腑抜けた気分であの男を代表に選び、そうしてクラスメイト全員に屈辱が降りかかるなど、決して受け入れることができなかった。

だからそう、自分がどれほどの事を分不相応にも行おうとしてい

るのか教育してやろうと思ひ立ち、あの決闘に臨んだ。

そう、元から試合をしようと、戦おうと思つてすらいなかった。

『 少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ』

不意打ちをされて、腐つた生ごみと化した缶詰を投げつけられて、耐えがたい腐臭を擦り付けられて、でもそれら全ては、私を強敵と認め、自身より格上と認め、それでもなお勝ちをもぎ取ろうと足掻いた結果ではなかったのか。

引き換え、私はどうだったか。驕り高ぶり、あの男を世の中に溢れかえる牙無き腑抜けた雄と同一視し、教育してやると手心を加えた。ビットを使うまでもないと、戦力の温存などという手抜きを行った。

「負けて 当然ですわね」

そう、当然だった。負けて当然だった。私の半分の力を、あの男の全力が打ち破つた。私こそが、あの決闘において不真面目に過ぎたのだ。

降り注ぐシャワーの冷たさが頭の芯を冷やし、私の脳髓に宿つていた驕慢という余分な熱を洗い流していく。代わりに浮きあがってくるのは、なぜこんな自明の理に思い至らなかったのかという悔恨。

悔しかった。

悔しい、悔しいに決まっている。元から私の掌の中にあつた勝利は、

私自身が取りこぼしてしまった。後悔は、後の祭りだからこそその後悔なのだと、理屈ではなく実感で思い知った。

もしも　もしもの話だ。あの決闘において驕ることなく、初手から全力であの男を叩き伏せていれば、今なお心中に渦巻く悔恨など抱えることなく、クラスの威信を背負っていけた筈だった。

そんな未来はもう無いのだ。これからはずっとこの悔恨を抱えて、クラス代表などという物をやり続けなければならない。

「くっ……くっ……ああっ……」

嗚咽が堪え切れずに溢れ出る。伝う涙が、どうしようもなく熱かった。何がイギリス代表候補生だ。何がクラス代表に相応しい人物だ。私は、そんな肩書に全く相応しくなかった。

試合直後はまだあの男に対する怒りがあった。けれど熱は、時間の経過と共に冷めゆくのだ。最早この悔しさの矛先として至当なのは、自分自身だけだった。

悔しい。後悔。悔恨。そんな感情が渦巻いて、降り注ぐ水のように、自分自身も堕ちていく錯覚を味わう。思考も視点も定まらない。底無しの沼にどつぷりと沈んでいくようだった。

「あゝ、邪魔したか？」

そんな状況では、学園の生徒ならばだれでも使えるこのシャワー室に、誰かが入ってくるなど思い至りもしなかった。

「……あの馬鹿はああいう奴だから、仕返しするなら全力でやってくれ」

「え……えっと、その」

「いいよ、別に言葉にしくなくても。公衆の面前であんな真似やられたんだから」

声をかけてきたのは、つい今しがたまで私の心中を埋め尽くしていたあの男　織斑一夏　と唯一親しげにしていたクラスメイト。

「篠ノ之　篤さんでよろしかったかしら」

「そう、あの馬鹿とは腐れ縁の篠ノ之篤だよ」

溜息をつき、自身で発した言葉が真実であるのが心底嫌そうに感じている様な表情で、篠ノ之さんはシャワーの個室を仕切るドアの前に立っている。私はシャワーを止めて、冷え切った体に纏わり付く水滴をバスタオルで拭き取りながら、個室を出て篠ノ之さんと改めて向き合った。

「とりあえずほれ、購買で消臭スプレーをありったけ買ってきたから」

突き出された右手に握られていたビニール袋の中には、確かに消臭スプレーの缶がぎっしり入っていた。もしかしなくともこれは私の為に買いそろえられたものだろう。

「あ、ありがとう」

とりあえずの礼を述べて、篠ノ之さんの手からビニール袋を受け取る。それは、私の為に買ってくれた物。“負けた私の為に”買ってくれた物だ。

きつと篠ノ之さんは、私の事を慮って買ってきてくれたのだろう。あの悪臭はきついからなかなか取れないだろうと、些細な気遣いのもとに行った行為。

「…………ぐすつ…………うつつ…………」

それが、尚更私の心を抉った。突き刺すような敵意なら、憤怒と敵愾心で対抗できる。けれど、優しく溶け込む心尽くしにどう抗えというのだ。自分自身が直視に耐えないほどに、とてつもなく惨めだった。

「それじゃ、私は帰るよ」

膝をつき泣き崩れる私に対し、篠ノ之さんは何も言わず踵を返し、何事もなかったかのように立ち去った。

今の惨めな私に対し、同情も憐れみも何もかけることなく、立ち去ってくれた。グチャグチャに渦巻く感情が心中を満たす中でも、その気遣いだけはありがたいと感じることができた。

シャワー室を出た後に私を出迎えたのは、更衣室のベンチで葉巻を吹かしていた織斑先生だった。小さな灯がともる葉巻の先から立ち上る煙が私の鼻腔をくすぐる。生憎と、葉巻の煙自体は嗅ぎ慣れない物だったので、決していい香りだったとは思えなかったが、それでもあの時の悪臭に比べればいい香りと断言できた。

「大丈夫か？」

「それなりに、頭は冷えています」

正直に言えば、織斑先生がこんなことを言うとは思わず、応えを返す時もそんな心境が表に出ていないかどうか気が気でなかった。

「そうか、似合わんか。私が生徒を氣遣うのが」

訂正。しっかりと私の心境は悟られていたようだ。

「まあ、長いこと洗えばなしだったのは、それなりに効果が出た
ようだなによりだ」

「ええ、いろいろ流せました」

「なら、一つだけ聞こう。」

クラス代表、やれるか？」

織斑先生は、葉巻を携帯灰皿の奥底にねじ込んで火を消し、真正
面から私の瞳を見据え短く問うた。

「
勿論」

逡巡はある。躊躇いもある。あんな無様を晒してもなお、それで
もクラス代表などと虚勢を張るのか、という自虐の気持ちもある。

「やる限りは、真面目にやらせていただきます」

それでも、これは自分に課せられた役目なのだ。それをたった一
度の失敗で、もう恥の上塗りをしたくないからやりたくありません
など、不真面目の極みだろう。

ならばここで逃げるこそが恥だ。そんなことをあの男に知れ
ようものなら、死んだ方がましだ。

故にこみあげてくる諸々一切を飲み込んで、私は精一杯の虚勢を
張った。私は出来る限りの最善を尽くすと、眼前の女傑に対して声
高々に言い切った。

「そうか、なら頑張れよ」

織斑先生はただ、何処となく満足そうな微かな笑みを浮かべて、そう言った。

その日の夜遅く、私は寮の屋上で一人たたずんでいた。流れる夜風が私の頬を優しく撫でていき、あまりにも激動の一日であった今日の疲労を溶かしていく。

「何だ、お前もここにいたのか」

「奇遇だな、オルコット」

ほんと、今日という日はこの二人に縁があるらしい。私の頬を撫でた夜風が、染め上げた金髪と、リボンで纏められた黒髪を撫でていった。

二人の手にはジュースやらスナック菓子が少々多めに入ったビニール袋がある。それを持ってここに来たということは、恐らくそういうことなのだろう。今日は夜風が心地いい上に、雲ひとつない夜空には星の瞬きが映し出されている。シチュエーションとしては最適だろう。

「……私はここで失礼しますわ」

そんな場所に、私が居ていい筈がない。この場所でこれから行われるのは勝者の宴。断じて敗者の居場所ではない。

「おいおい、付き合い悪すぎるだろ」

二人の横を抜け、屋上から降りようとした私の腕を、織斑一夏が掴んで引き留めた。そのまま私を無理矢理座らせ、二人も同じく腰を下ろした。

「このまま私を蹴りものにしようという魂胆ですか？」

「え、そういうプレイが好きなお前？ 俺はただ単に一緒に騒ごうと思ったただだよ」

険のある言葉を吐き出す私に対して、織斑一夏は悪戯つ子の様な笑みを浮かべてジュースの缶を差し出した。正直に言えばすぐ自分の部屋へ帰りたいが、差し出された物を無碍に扱うことも少しばかり罪悪感があった。

だから、私は缶を受け取り、プルタブを上げて飲み口を開けてジュースに口を付けた。大量生産品の安っぽい味が、私の喉を滑り落ちていく。普通のジュースにしては、ちょっとだけ味に違和感があったが、それでも半ば自棄になっている私にとっては一息に飲み干せる程度でしかなかった。

「いい飲みっぷりだぜ、セシリア」

「生憎と、あなたに呼び捨てられるほど私の名前は安くありませんが」

「じゃあお前も俺を好きなように呼べよ」

「では、馬鹿で、ああ、この響きはあなたに実によく似合っておりますわ」

「おいおい、そりゃあねえだろ」

「何言ってる、お前を馬鹿以外の何と呼べばいいんだ？」

「うわひつでえ、こいつら人でなしだわ。せつかく俺様が和やかな雰囲気を出してやろうと思ってるのに、こいつらそれを無視してくれやがりましたよ」

「そうか？ お前を馬鹿と呼ぶのは私たちの精神にこの上ない安堵を与えてくれるぞ」

「というか、あなたを馬鹿以外と呼ぶとその違和感が私たちの精神にこの上ない負担を与えますので」

普通ならば喧嘩を売っているとは思えない様な私の発言にも、織斑一夏は堪えた様子などまるでなく、それどころかこちらに合わせるかのようにさらにおどけた言葉を返してくれた。篠ノ之さんもその流れに乗ってきて、更にふざけた会話の応酬を続けていく。

「チツ、へこんで落ち込んでるセシリアを酒の肴にしようと思っただのによ」

「当てが外れた様で申し訳ございませんわ。まあ所詮、あなたなどその程度ということでしょう」

「所詮は馬鹿だからな、馬鹿しかやらん」

「何言ってやがる。決闘であんなにも華麗な頭脳プレイを見せてやつただろうが」

「すまん、オルコット。見ての通りこいつは救いようが無くてな」

「ええ、そんな物初めからわかり切ってます」

下らない、言葉の応酬。けど、勝者の場所とか敗者の惨めさとか、そんな無為な思考はすっかり抜け落ちていた。

代わりに浮かび上がってくるのは、こんな下らない事を笑いあえることへの喜び。そう、今私は笑っていた。

意識せずに、自然と、心の底から笑えていた。

「ふふっ、あははははっ」

思わず漏れ出た大笑に、二人も笑顔で返してくれた。思えばこん

なに心の底から笑ったのは初めてかもしれない。

「そうそう、酒の席なんだから笑ってりゃあいいんだよ」

「確かに、仏頂面で酒を飲まれるのは勘弁願いたい」

しかし、何故だろう、何かものすごく違和感があるような。この二人と楽しく会話して、おいしいジュースと安っぽいスナック菓子をつまんでいる。学生同士の下らない小ぢんまりとした騒ぎの筈だ。別ににもおかしいところは無い筈。

「……………って酒とはどういうことですかっ!？」

叫ぶと同時、飲み干した空の缶に記載されている製品情報を読んでいく。間違いであってくれとの願いもむなしく、そこにははつきりと酒という一文字と、アルコール度数の表記が印刷されていた。

「どうって？ ジュースなんぞで騒げるはずねえだろ」

「それに缶チューハイなんてジュースと変わらん。そう気にするな」
「そっという問題ですかっ!!」

学校で飲酒を勧めるとは、道理でジュースの味に違和感を感じた筈です。もうすでに私も何本か飲み干した後なので、大声を出すだけで頭がくらくらします。

「そもそも、学園の購買に酒など売っていない筈でしょうっ!!」

仮にも高校であるIS学園で酒など売っている筈はない。それならどうやってこの大量の酒を手に入れたのか、私の問いかけに織斑

一夏はさも当然の様に言い放った。

「ああ？　んなもん姉貴の部屋からかっぱらってきたに決まってるだろ」

姉貴？　織斑一夏の姉とは当然、あの織斑先生の事にきまっている。その織斑先生は学園の寮監も勤めていて、寮内には先生の自室もある。そこに不法侵入し酒を盗んだ？

「正気ですのっ！？」

「スリルがあつて楽しいだろ？」

「自殺行為でしかありませんわっ！！」

神をも恐れぬ所業を誇らしげにすら言い切つて、織斑一夏は胸を張つて笑つていた。馬鹿だ。心底の馬鹿が私の眼前にいる。馬鹿だ馬鹿だと思つていたが、よもやここまで大馬鹿であるとは思つていなかった。

「篠ノ之さんもこの馬鹿を止めてください！！」

「言つて止まるような馬鹿でもないだろう。何かあつたらこの馬鹿が全ての元凶ということにしておけ」

そう言つて篠ノ之さんは缶チューハイを新たに一本飲み干した。飲み干した空の缶を地面において、世界の真実を諭す様にしみじみと呟いた。

「だから言つただろう？　コイツは心底の馬鹿だ、と」

「そうでした、この馬鹿は真正の馬鹿でしたわ」

「こついうときは、酒でも飲んでストレスを発散するに限るぞ。ほらもう一本どうだ？」

「ありがたく頂きますわ」

既に私も、相当アルコールが頭に回っているのだろう。口ではなんだかんだ言いながらも、勧められた酒を勧められるがままに飲んでいく。

「随分とまあ、楽しくやっているじゃないか、ええ？」

その直後、そんな酔いを完膚なきまでに吹き飛ばす、絶対零度の声が響いた。

「……織……斑……先生？」

自分の首がまるで錆びついた機械の様に重く感じられ、錆びついた金属の軋む音すら幻聴として聞こえてきそうなほどに、私はゆっくりと振り返った。

そこにいたのは勿論、能面の様な感情を排した表情に、凍て付く冷気のような怒りの雰囲気を纏った、今の私にとっては死神同然の存在である織斑先生だった。

「ああそうだ、あの愚弟に酒をかすめ取られた織斑先生だぞ」

もう完璧、間違いないなく織斑先生は怒り狂っている。

「こ、これはですねっ、あの馬鹿に騙された結果というか、私は最初酒とは露も知らず」

振り返って元凶である馬鹿を睨みつけようとした　が、そこには飲み散らかされた空き缶と、食い散らかされたスナック菓子のゴミがあるだけ。当の織斑一夏は影も形も存在していなかった。

「　　　　　　っていないっ!？」

見上げてみれば夜空に一つ、星が追加されていた。織斑一夏の駆るくらファール・リヴァイブのスラスターの光という星が。

「それじゃあお休み」

そして篠ノ之さんもまた、懐から取り出したロープを屋上の柵に巻きつけ階下に飛び降りていた。それじゃあ後は頼むといわんばかりの表情を浮かべた篠ノ之さんの顔が、夜の暗闇の中へと落下していく。

つまりは、私を含めた三人の中で、ここにいるのは既に私一人。

織斑千冬という最強最悪の死神を前にして、あの二人は私一人を矢面に立たせてとっとと逃げてくれやがったのだ。

「逃げたあ!？　あの馬鹿二人、私だけ置いて逃げやがりましたのっ!！」

「ああ、もう何もいうな。状況などわかり切っていることだからな、これだけで済ましてやる」

直後、私の頭頂部に鉄鎚の様な衝撃が降り注ぐ。織斑先生の拳骨は、すごく痛かった。

「お前の尊い犠牲は、きつと寝るまでは覚えておくさ」

ISというのは、事その他逃げるのには便利だと、一夏は初めてISというものに嫌悪以外の感情を抱いた。特にあの最強の姉からこゝも逃走を成功させるほどの機動力は惚れ惚れすると、世のIS操縦者が聞けば烈火の如く怒る感想を持っていた。

「で？ オレ、覗き見するのはいいけど、されるのは趣味じゃないんだよ」

夜の暗闇の中、一夏はだれもないはずの方向へと言葉をかけた。何も無く、誰もいない。返答など帰ってくるはずもない場所への問いかけは、しかし。

「あら、勘がいいのね。気配は消していた筈なのに」

暗闇から現れたのは、IS学園の制服を身に纏った一人の女生徒。恐らくは笑みを湛えているであろう口元を扇子で覆い隠しながら、悠然と一夏の方に歩み寄る。その足取りに揺らぎはなく、明確な自負に溢れた物だった。

その性根が、一夏の目には元より豊満な肢体と美麗な容姿を持つその女を、更に輝かせているように見えた。

その姿に、一夏はどこことなく自分と似たようなものを感じ取っていた。これはひょっとすると、結構な当たりなのかもしれないと、自身の口元に笑みを浮かべた。

「こんばんは色女、こんな夜遅くにどうしたよ、デートのお誘いか？」

「そんなところよ、織斑一夏君。今日の戦い見てたらさ、どうしてもあなたとお話ししたくなっちゃった」

「そりゃ結構、俺の周りにや見る目ない奴多かったけどよ、アンタみたいな上玉にそう言われるとはね」

「あら、ついてないのね」

「アンタがオレと付き合ってくれるなら、ついてるに変わるぜ？」

「あら駄目よ、がつつき過ぎは良くないわ」

「そいつは失敬、何せいい女には縁が無くてね、アンタを逃すと一生縁が無い様な気がしてた」

「それにまず、聞くべきことがあるでしょう？」

「ああそうだった、色女さん？ お近づきの印にアンタの名前教えちゃくれないか？」

その一夏の問いかけに、女は満足げな笑みと、微かな寂寥感を滲ませて自身の名前を口にした。

「楯無 更識楯無よ」

女は更識楯無と名乗る、事実その名前は学園のデータベースにも記載されている、彼女の名前としては至極適当な物だ。それでも、一夏にとっては、そうではなかった。

「おいおい、オレはアンタの名前を教えてくれって言ってるんだぜ？」

不快感をあらわにして、一夏は余人が聞けば意味不明な言葉の羅列をのたまった。一夏の耳には、さっきの音の羅列を人の名前として受け入れたくはなかったから。

「流石、 やっぱり君ならそう言ってくれると思ってた」

けれどその意味不明な返答こそは、彼女が望んだものだった。それを聞いたかった。君ならきつとそう答えてくれると願っていたから。彼女はさつきとは違う、一片の曇りもない満足げな笑みを浮かべた。

「テメエが誇れない物が、そいつの名前であつてたまるかよ」

「うん、そうだね。ほんと、君の言うとおりだよ。楯無つてのはね、更識の家が代々当主に継がせている名前なの。うちの家は古くから世の裏側のあれやこれを生業にしてきたからさ、そういうしきたりが残ってるの」

「はっ、馬鹿じゃねえの、“誰かが継げる名前なら、そもそもそんな名前は塵同然だろうが”」

そう、一夏にとって、更識楯無という音の羅列は、とてもではないが人の名前とは認識できなかった。

人の名前とは、そいつ自身が世界に向き合う為の唯一無二の証だと、自分自身がそう強く認識しているからこそ、楯無という音の羅列の裏にあるものに気が付いた。

「昔はほんとの名前があつただけだね、今はもう楯無しか名乗らせてもらえない」

「アンタも災難だな。どうせ古臭い黴の生えた老人どもが、絶やしではならぬ誇りだ、とかぬかしてるんだろ？」

そんな物は、今を真面目に生きている奴にとっては冒涇以外に他ならないと、一夏は嫌悪感をあらわにする。名前を継がすなら、継ぐべきそいつ自身が誇りを持ってその名前を受け継がないと意味が無いだろう。受け継がさせるという行為自体が、その名前を冒涇しているとなぜ気付かないのかと、一夏はここにいない見知らぬ誰か

に怒りを抱いた。

「色男だね、君は」

その感情が、わかりやす過ぎるほど瞭然に漏れ出しているから、高々数分しか会話していない一夏を、彼女は心底気に入った。

「真面目に生きてる」

髪を金に染め、腕にはタトゥーを入れて、言葉の端々からも滲み出る素行の悪さは、決して真面目とは評せないだろう。けれども、彼は織斑一夏として世界に向き合い真面目に生きているのだと、彼女は理解した。

「おうよ、オレは真面目だぜ」

そう言っただけで悪童の笑みを浮かべる一夏に、彼女はせめてこれだけは告げようと意を決した。

「じゃあさ、私の事はエリーって呼んでよ」

もう彼女の真の名前は、記録から抹消され、暗示すら掛けられ、当の彼女自身ですら思い出せない。思い出せるのは、自分の名前は楯無なんかじゃないと、そんな古臭過ぎて腐った音の羅列なんかじゃないという怒りだけ。

「エリー？」

「そう、エリー。昔読んだ漫画の中の、気に入った登場人物の名前」

真実の名前はもう既になく、与えられたのは望まぬ黴の生えた音の羅列。ならば、せめて気に入った音の羅列を己が名前として認識してくれと、彼女は言い切った。

「そうか。まあまあいけるんじゃないのか、エリー」

その響きこそを、彼女に至当だと一夏は笑い。慈しみを込めてその響きを紡ぐ。ままならない現実に腐る奴らが多い世の中、それでも彼女は腐っていない、前を向いている奴だと知ったが故に、響きに乘せた意思は一夏の心の奥底からの物だった。

「他の誰かがいるときは、そうだね……会長とでも呼んでよ」

「OK、エリー」

「それじゃあ、もう夜も遅いし、私はここで退散するね」

そう言ってエリーは踵を返し、再び夜の暗闇の中に消えていく。

「おやすみ、一夏」

「おやすみ、エリー」

交わし合い、刻みあったその名前だけで、今宵の出会いに価値はあったと互いに思いながら。

翌日。

「よくもまあ、この私を捨て駒扱いにしてくれましたわねっ!!」

「ヤッホー一夏、今日も元気そうね」

「……朝も早くから、全開だなお前」

教室に入った一夏を出迎えたのは、鬼の形相で詰め寄るセシリアと、それを面白そうに眺めるエリーの姿だった。

傍らにいた篤が、その光景に心底呆れ果てた表情を見せる中、当の一夏は当然面白そうな表情を湛えている。

「お前だつて飲んでたじゃん。どうだったよ、人生初のただ酒の味は」

「あの子の織斑先生の拳骨の方がよほど記憶に残っておりますっ！」

「おお、ありや効くよな。あれ喰らったら二日酔いなんかしないだろう」

「わああ、セシリアちゃんつてもしかして不良？」

「そんなわけ無いに決まってるでしょう！！　そもそもあなた誰ですかつ！！」

「……もう死ねよ一夏、お願いだから騒ぎを起こすなら私の目の届かないところでやってくれ」

キレルセシリア、それを面白そうにからかう一夏とエリー、その混沌とした光景に頭を抱える篤。他のクラスメイトはその光景についていけず、言葉を失うだけだった。

「あんだ本当に変わらないわね」

そこに割り込む第三者の声に、クラスの耳目が集まった。見れば教室の入り口に活発さを滲ませた小柄な女生徒が立ち尽くしていた。

ツインテールに纏められた髪が微かに揺れ、その瞳には眼前の光景に対しての呆れが滲んでいる。

「何だウリ坊、お前日本に帰ってきてたのかよ」

まあ確かに、小柄で活発そうなその彼女に対して、ウリ坊というあだ名はよく似合っているのかもしれない。だがどこの世界にウリ坊と呼ばれ喜ぶ年頃の乙女がいるというのか。

「誰がウリ坊だこらああああああっ!!」

混沌とした朝の光景に、小柄な少女による全力全霊のドロップキックが追加された。

第二話（後書き）

<あとがき>

会長の設定を生かして、本当に会長をエリーにしちゃったぜ。そして鈴はずっとこんな扱い。

あとシャルロットは当然マリイポジなんだけど、そうすると結構悲惨な目にあうというか、一番えぐい目にあうというか。ラウラのほうは原作そのまんまで出すつもりなんですけどね。……銀髪眼帯ドイツ出身ということから、シュライバー化したラウラを想像しましたが、そんなの書けるわけがねえ。

第三話

あたしが 凰鈴音が あいつらと出会ったのは、小学五年生の時。

「お前中国人なんだろ？」

「だったらリンリンって呼ばうぜ、パンダみたいで似合ってるじゃん」

「うるさい、私パンダなんかじゃないもん！！」

子どもというのは結構異物を排斥したがるものだ。クラスの中で唯一の中国人であつたあたしは、クラスの悪餓鬼どもにとつては格好の獲物、よつてたかられてからかわれ続けた。誰もあたしの訴えに耳を傾けてくれなくて、あたしに出来たのは泣きながら叫び続けることだけ。

「 うわくつせえ、ひんまがつた根性つてこんなに臭いんだな。つつわけで消えろよカス共」

「 見苦しい。お前らうざいから消えてくれ」

そんなとき現れたのがあの二人、一夏と箒だつた。あいつらは出会った時から変わらなくて、厄介事に率先して首を突っ込む一夏に、心底呆れたような顔をしながらも箒がついていく、そんな今と全く変わらない雰囲気を纏つてあいつらはあたしの前に現れた。

「何だよお前ら！！」

「何って、決まってるじゃねえか。お前らうざいから消えろってことだよ」

「こっちは十人以上いるんだぞ、勝てると思ってんのか」

所詮は女の子いじめる様な屑どもだから、臆面もなく数の利を誇示して一夏と箒を恫喝した。けど、あの二人はそんな物一顧だにしないで、むしろそれがどうしたといわんばかりの小馬鹿にした笑みを浮かべた。箒なんか無表情に見せかけた嬉々とした表情で、箒を刀のように構えていたし。

「じゃあ私は武器を使おう、私は女でか弱いからな、骨折っても知らんぞ？」

「なっ！？ お前卑怯だぞ！！」

「うっわ聞きました箒さん？ こいつら寄ってたかって一人の女の子苛めていたのに卑怯なんだとぬかしましたよ？ 心底屑だわこいつら。というかお前それ駄洒落？ 箒が箒構えるなんて寒すぎるぜ うおわっ！？」

「よしわかった、先にお前をばこる」

「……舐めてんじゃねえぞ、この糞があっ！！」

最早いじめっ子どもなど眼中になく、箒の放つ一撃を軽やかによけまくる一夏。そんな二人の様子にいじめっ子どもは我慢ならないといった感じで二人に襲いかかった。

「バーカ、テメエらなんぞいくらいたところで意味ねえよ」

「半分はやれよ、一夏」

「むしろこっちの台詞だったの」

結局、いじめっ子どもはあっけなく一夏と箒に返り討ちにされた。あたしはそれをボーッと見ていただけで、結局何もできなかった。

「……あ、ありがとう」

できたことと言えば、いじめっ子どもが全員叩きのめされてから、助けてくれた二人に礼を言うぐらい。でもこの二人はずっと、素直という言葉から縁の無い奴らだったから。

「別にお前の為じゃねえよ、このカス共が不快だったからぶちのめしただけさ」

「ああ、見苦しい上にずかずかとこっちの視界に映り込んできたからな」

素直じゃないその答えが、とっても重なったものだったから、口ではなんだかんだ言いつつも、この二人はきつとすごく仲がいいんだろうなっと思ったの。転校してきたばかりで友達なんかまだ誰もいなかったから、その時のあたしには二人がすっごく眩しく見えた。

「ねえ、私の名前は凰鈴音。その友達になつてくれない？」

だから、私もその中に混ざれたらいいな、って思ったら、自然とそんな言葉を言えた。

「おういいぜ、特別に友達にしてやろう」

「……好きにしろ、この馬鹿と比べたら誰だってました」

捻くれた返事だったけど、二人はあっさりとあたしを受け入れてくれた。それが、二人との騒がしくも楽しい日々の始まりだった。

そして今日、一年ぶりに再会したその親友たちは。

「ぶふおっ!？」

「ぐはっ!？」

「この馬鹿共が、よくもあんなふざけた真似をしてくれたな」

千冬さんに強烈なアッパーを喰らって、とてつもなく見事な車田落ちを披露してくれた。

いやもう、普通は一年ぶりの感動の再会なんじゃないの？ とか思ったけど一夏の馬鹿は初っ端からあたしの事をウリ坊呼ばわりするし、ついついそんな馬鹿に対してドロップキックをかましてしまし、勿論そんな一撃を一夏の馬鹿がまともに食らうわけ無くて、あっさりと避けて「久しぶりだな、おい」とか言いつつあたしの頭を撫でまわしてくるし、箒も一緒に「久しぶりだな、ウリ坊」とか言って頭撫でまわしてくるし、そりゃ、正直言っただけの頭を撫でってくれるその感触に涙ぐみそうになったけどさ、もうちょっとこう、感動的な再会にならなかったのかしら。

「何をやっているこの馬鹿共、もうチャイムは鳴っているぞ」

そしてそうこうしているうちに千冬さんが登場。しかも元から威圧感たっぷりの人だったけど、なんか当社比120%増しで威圧感増えてたわね。それでその千冬さんは教室内に入ってくるや否や、一夏と箒にアッパーを喰らわせて今に至るというわけ。

ああこれは絶対、一夏と箒がなんかやらかしたなって思ったわよ。よくもまあ、あの千冬さんの逆鱗に触れる行為を懲りずにやれるわね。絶対一夏がやらかした行為に、箒が口ではなんだかんだ言いつつ付き合ってたと思う。見れば、教室内にいた金髪縦ロールの奴も千冬さんの一撃を目の当たりにして頭抑えてる。あれはきつとあの

子も千冬さんの一撃をくらったことあるわね、私も一夏の馬鹿行為に巻き込まれて喰らったことあるけど、すつごく痛いよね。ああダメ、思い出したらあの痛みがぶり返してきそう。

「……………ほんと、何にも変わって無いわね」

そんな、一年前にあたしの元から過ぎ去った日常は、あの楽しい日々は変わらずここにあった。一夏は相変わらず馬鹿だし、箒は自分は馬鹿じゃないと大人ぶってるけど、その実一夏と同レベルの馬鹿だし、二人は何にも変わっていなかった。

「泣くなウリ坊、今生の別れてわけじゃないからよ。向こうで腐ってるんじゃないぞ。俺たちはずっと“ここ”にいるからまた会いに来いよ。その時はまた、一緒に騒ごうや」

一年前のあの時、空港での別れ際、そう言っであたしの頭を撫でてくれた一夏はちゃんと約束を守ってくれていた。そのありふれたけれども大切な光景に、涙が溢れ出そうになるのを堪え、あたしは自分の教室に戻った。

もうちょつと話して居たくはあったけど、少なくともこれから三年間はあの馬鹿たちと一緒にいられるから。それに、これ以上いたらあたしまで千冬さんの一撃喰らいそうだったからね。

「とりあえず、昼休みになったら一緒にご飯食べましょ」

「おうっ」

「ああっ」

そんな何気ないやり取りこそが、あたしが日本に帰ってきたこと

を実感させた。

「とりあえず、酒が無いのが寂しい限りだが、ウリ坊の帰国を祝って乾杯っ!!」

「だーかーらーっ、ウリ坊って呼ぶなあっ!!」

「ともかく、鈴が元気そうで何よりだ」

「う、うん、箒もね、一夏共々変わらず馬鹿で安心したわ」

「……おい、あいつと一緒にするな」

約束通り、あたしたちは昼休みになったら集まって、食堂で再会を改めて祝い合った。学生らしく健全に、アルコールなど一滴も入っていないオレンジジュースでの乾杯を交わし、というか絶対一夏の奴酒があったら酒で乾杯しようとしてたわよね。

「ねえねえ一夏、この可愛らしい子紹介してよ」

「そうですね、あなた達の知り合いにしては至極真面目そうな方ですし」

なんか一夏たちも友達増えてるみたいだけど、……どうしてこう、どういつもこいつも胸に駄肉いっぱい付けてるのよ。そのあまりある肉こっちによこせ。

「おう、コイツは凰鈴音。俺と箒の幼馴染だ。まあ気軽にウリ坊と呼んでやりやあい」

「そう、私は更識楯無、このIS学園の生徒会長よ。ちなみにあだ名はエリーって言うの、よろしくねウリ坊ちゃん」

「私はセシリア・オルコット、一組のクラス代表兼イギリスの代表

候補生ですわ」

それぞれ自己紹介してくれたけど、セシリアって奴はともかく楯無って奴、なんか一夏とおなじ匂いがするわね。早速あたしのことうり坊呼ばわりしてくるし。というかエリーって何なのよ、楯無って名前からどうしてエリーってあだ名が出てくるのかしら。

「ふふつ、気になるって顔してるわね、けど駄目よ、それは私と一夏だけの秘密なんだから」

「べつつにい、気になってなんかいないわよ」

「あらら、可愛い拗ね方しちゃって、ねえ一夏」

「元からこいつはこんな小動物チックだからな。いじられて拗ねてる方が可愛いんだよ」

エリーの肩を引き寄せた一夏は、またそんなことをのたまっている。その様が妙に馴染んでいたから、ちょっとだけむかついた。むう、別に一夏が誰と仲良くなっても構わないけどさ。

「な、オルコット、コイツにはウリ坊ってあだ名がぴったりだろ？」

「クスッ、ええ、確かにそうですわね」

ああもう、箒とセシリアもなんかこっち見てにやけてるし。全員そろって何なのよその生温かい視線はっ。

「あゝっ！！ もう何なのよっ、なんでそんなに微笑ましそうにしてんのよあんなたちはっ！！」

「いや、だって？ お前相変わらず小動物チックで可愛いなって共通認識が構築されただけだろ？」

「まあ、確かにな」

「うんうん、可愛いよ、ウリ坊ちゃん」

「ええ、可愛らしいですわよウリ坊ちゃん」

「うがっっ！！ ウリ坊ウリ坊言っなあっ！！」

ああもうつ、何でこっちは怒り続けてるのにあんたたち微笑みっぱなしなのよ。ああそう、そういう対応するのねあんたたち、じゃああたしの実力って奴を見せつけてやろうじゃない。

「あんたたち、今日の放課後アリーナに集合！！　そこであたしの実力を見せつけてやるわっ！！」

「OK、いいぜ」

「はあ、わかったよ」

「了解」

「ええ、期待しておりますわ」

くそう、ここまであたしが怒ってるのに、結局みんなに張り付いた微笑みは消えることはなかった。

「　　よく来たわね、あんたたち！！」

「当たり前だろ、面白そうだし」

「……お前に恐怖心を抱けって？　無理言っなよ」

「駄目よお、調べたらウリ坊ちゃんって中国の代表候補生なんだって、だから実力は折り紙付きな筈よ」

「プフツ、国家代表ウリ坊って、また可愛らしいですわね」

うん、こいつらほんとに変わってない。加わった面子も加わるべくして加わったような奴だし、遠慮なんていらないよね。

とりあえずあたしは即座に自分の愛機である<甲龍>を展開して、

巨大な青龍刀二本を連結させた専用武器である＜双天牙月＞を、一番あたしの事をウリ坊呼ばわりしてる一夏に振り下ろした。大気を揺るがす唸りを伴った振り下ろしが、一夏がいた地面を大きく砕く。

「おいおい、あぶねえな」

うん、やっぱり一夏のことだから、この程度の不意打ちぐらい避けると思ってた。大きく飛びさがった一夏の体は既に＜ラファール・リヴァイブ＞に包まれてて、その両手にはハンドガンが握られている。

「不意打ちなんて喰らう方が間抜け、なんでしょ？」

「おうおう言ってくれるねえ、それでこそ、だ」

ISに乗っていても変わらない出鱈目な曲撃ち。けれども的確な狙いが付けられた弾丸は、つい先ほどまであたしがいた空間を打ち抜いた。

「お？」

「ふん、アンタのへなちよこ玉なんか当たるもんですかつ！！」

「はっ、吠えてろよ」

「それはこっちの台詞っ！！」

あたしは＜双天牙月＞を手首のモーターを急速回転させて、一夏の銃撃を防ぐ楯とした。同時にそのまま突っ込んで一夏の懐へと飛び込む。そこで＜双天牙月＞を分離させて、二刀流へとスタイルを変更する。

「そらそらそら！！」

未だハンドガンを両手に握りしめる一夏に対し、あたしは両手に持ったく双天牙月>を振り回し、多方向からの連撃を放つ。近接格闘において、銃器と刀剣を持った者、どちらが有利かなんて言うまでもないだろう。

「ほらっ、どうしたのよ一夏!!」

「はっ、ぬかしてろっ!!」

いまだ素人と言って差し支えない一夏に対して、あまりにも遠慮がなさすぎると思われるかもしれない。事実一夏は防戦一方、けれど相手は一夏なのだ、これぐらいでちょうどいい。

「ほら、反撃行くぜえ」

こっちの連撃の隙間を縫って、アイツのハンドガンが火を噴いた。その一撃は的確に、今振り下ろさんとしていた右のく双天牙月>の柄元を狙い撃った。狙い澄ましたタイミングで放たれた銃撃は、こっちの連撃に間隙を作る。その隙に一夏は大きく距離をとり、アイツの得手である中距離戦の間合いとなった。

「すげえな、鈴」

「何よいきなり」

「何って、お前一年前まではISなんて縁が無かつただろ？ それで専用機まで与えられて代表候補生にまで上り詰めたのは純粹にすげえと思ったのさ」

「……う」

あの馬鹿に手放してこつちも褒められると調子が狂う。第一あたしが頑張れたのって、アンタと筈に追い付けるようになっていたって思ってたから。

「だから嬉しいのさ、遣り甲斐がある。越えるべき壁があるってのは幸せなのさ」

「ふ……ふんっ、相も変わらずプラス思考よね、アンタって」

「当たり前だ、一回こっきりしかないオレの人生、何でマイナス思考で生きなきゃいけないんだよ」

一夏はずっと、子供のころから何かに向かって生きていた。勉強だったり喧嘩だったりいろいろ。だから、あの一夏にこう言われると、その、なんか、こそばゆく感じるわ。

「つつわけで、今はお前に挑ませてもらうぜ」

「はっ、上等！！」

そんな問答を終えて、再び動き出すあたしと一夏。けれど失念していた、こんな状況でもう一人の幼馴染が黙っている筈ないってことに、

「ノリノリなのはいいがな、私を忘れるな」

<打鉄>に身を纏った箒が、当然の如く一夏に斬りかかった。だけど一夏が、よりにもよって箒の不意打ちに反応できないはずがない。神速の早撃ちで箒の斬撃に自身の銃撃を当てた。

近接戦用ブレードと、ハンドガンの弾頭が正面衝突を起こし、箒の斬撃を一夏にまで届かせない。

「おう、ワリイワリイ、鈴の奴に夢中になってた」

「……というか私たちも無視しないでくださいまし！！」

「
そうよねえ、特に一夏、君は私を無視しちゃだめでしょ？」

そこに降り注ぐマシンガンとレーザーの雨。同時にセシリアとエリーのISの情報が、私の視界に映し出される。イギリス製第三世代型IS<ブルー・ティアーズ>と、ロシア製第三世代型IS<ミステリアス・レイディ>。

「とりあえず、過日の借りをかえさせていただきます!!」

言うや否や、<ブルー・ティアーズ>から四つのビットが分離し、一夏へと狙いを定める。一夏はそれを、初心者にしてはまあまあの機動で避け続ける。多分あいつは一对多の喧嘩に明け暮れていたから、機動自体は不慣れでも多方向からの攻撃には慣れているんだろう。でないとおあまで避けられる筈がない。

「一度見た奴が早々通じるかよっ!!」

そして一夏の器用さは半端じゃない。襲いかかるレーザーの雨の隙間を縫って、遠く離れるセシリア自身へと銃撃を撃ちこむ。確か情報じゃあ、イギリスのBT兵装は本体との同時使用はできないという欠陥があったはず。それを本能的に察知した一夏の銃撃は、例え牽制程度でもセシリアの攻撃の手を緩めることに成功していた。

そしてそこが、私の攻撃チャンス。

<甲龍>の第三世代兵装、空間圧縮による衝撃波を使用した不可視の砲撃、<龍咆>を起動。セシリアの猛攻を切り抜けた一夏へと

放つ。

「グウツ、なんだ今の？」

それでもその不可視の一撃を、直感だけで直撃を避ける一夏は半端じゃない。かすり傷以上直撃未満と言ったところに抑え込んだのには、正直呆れかえる。

「ひ・み・つよ」

そして別に＜龍咆＞はIS本体の機動に何ら影響を及ぼさないから、私はあいつでも一朝一夕に真似できないほどに磨きぬいた機動を行使しながら、＜龍咆＞を撃ちまくる。

反撃を許さぬ一方的な連射。それでもあたしは手を一切緩めることなく撃ち続ける。だってあいつは一夏だから、どんな状況にあっても諦めるなんてしないだろう。その証拠に、アイツの目には今もなお溢れんばかりの闘志が爛々と輝いている。

「
試してみるか」

砲撃の隙間、そこに放たれる銃撃、けれど銃口から読み取れる弾道予測にあたしの体は重なっていない。目晦ましの乱れ撃ち？　そう判断したあたしの真横で、銃弾が弾かれる音が響いた。

「え？」

そこにいたのは一夏が放ったであろう銃弾を弾き飛ばした筈の姿けれどおかしい、さっきのアイツの銃撃に直撃コースなんて一切な

かった筈、それに何より、どうして真正面から放たれた銃弾が、私の真横から襲いかかるのか。

「さっすが一夏、ほれなおしちゃう」

「気に入ってくれたかよエリー？ オレの大道芸」

「勿論、銃弾のビリヤードなんてお目にかかれるとは思わなかった」

エリーのその言葉で、あたしは一夏の行為の詳細に気がついた。アイツは銃弾同士ぶつけ合わせて、弾道を曲げてあたしの真横から襲いかからせたのだ。

「オレはな、オレにしかできないことをやってみたい。ISとオレ、どちらが欠けてもできないことをやって見せてこそ、オレはISに使われるんじゃないくて、ISを使ってるって証になる」

そんな心底子供の意地みたいなことをのたまう一夏。けれどそれは、真っ当過ぎるほどに正論で、無茶苦茶アイツらしかった。

「だろうな、お前ならそういう馬鹿をやりそうだった」

そして筈は、アイツがそれほどの馬鹿だつてのを、誰よりも深く理解していたからこそ、真っ先にあんな曲芸に対応できた。正直言つて、その仲の良さに嫉妬しそうだった。

「はっ、言ってくれるな、筈！！」

「ぬかせよ一夏！！」

そして再び放たれる銃弾のビリヤード。ISの演算能力と一夏の

積み重ねた経験と出鱈目な技量が成し遂げるそれを、箒は刀一本を頼りに切り払い続ける。

当然そんなに打ち続けていれば、ハンドガンなんてすぐに弾切れになってしまうけど、一夏は即座に新しい弾倉を量子展開して弾幕を途切れさせない。

どうやらISに乗ったとしても、一夏と箒は互いを一番の敵だと認識しているらしい。正直言ってかなりむかついた。浮かれまくっているあいつらを横つつらからひっぱたこう。

<龍咆>は空間圧縮による武器だ。だからまずは圧縮率を最大限にして、一夏の銃弾ビリヤードを無茶苦茶にする。勿論距離があればある程空間の歪みは極小の物になっていくけど、アイツのあの芸当は出鱈目なように見えて、精緻極まる照準があつてこそ、たとえ僅かな歪みでも、アイツのビリヤードを崩すには十分だ。

「うおっ!?!」

そしてそれは同時に、<龍咆>のチャージが最大限に完了しているという事、そのまま不可視の砲撃を、今度は箒に向けて放った。

「ぐうつ!!」

どうよ、今のあたしはあんたたちにとっても脅威なのよ。これからは置いてきぼりにさせないわよ。

「やるじゃねえか、鈴!!」

「中々外道に染まってきたな、お前も」

「うつさいっ!! 誰のせいだ誰のっ!!」

「おい箒、お前のせいだつてよ」

「お前のせいだろうが、一夏」

「二人ともじゃあっ!!」

「……子供の喧嘩と変わりありませんわね、このノリは」

「でも面白そうでしょ？ セシリアちゃん」

「ええ、そうですね、それに私たちが蚊帳の外にすると

はいい度胸だと、思い知らせてあげましょう！！」

「同く感、私達除け者にして盛り上がってくれちゃってさ、こんな
にいい女を袖にするなんて、これは罰が必要よね」

「ええ、とびきり痛いのを差し上げましょう」

それからずっと、アリーナの使用時間ぎりぎりまでISを使った喧嘩にあたしたちは明け暮れた。

「自主的な学習は確かに推奨すべきではあるがな、
限度をわきまえるこの馬鹿共が」

まあそれが白熱しすぎちゃってね。あたしたちが使ったアリーナは数日間使用禁止になっちゃった。そりゃあ確かに地面はクレータ
ーだらけだし、壁は至るところ罅割れてたしね。

「これからは自重しろ。出来んというならばこれからは私がお前らの
相手をしてやる」

そうして千冬さんから全員に拳骨が見舞われて、あたしたちは全
員そろって悶絶しちゃった。

うん、本当に痛いわ、千冬さんの拳骨。

第三話（後書き）

<あとがき>

この一夏、基本的に拳銃だけで戦うのですが、それだと話的に決め手に欠けるというか、インパクトが無いというか、ならどうしようかと頭を捻ったところ、「ジューダスにしてみえはいんじやね?」という電波が舞い降りてきました。そのうちきつと「レスト・イン・ピース」とかい出しそうではあります。

第四話

オレにとって、起点というのはやはりISの登場だったのだろう。姉貴とその親友が作り上げ世に出した規格外の兵器。最強無敵、そんな陳腐な四文字が的確な表現の、いかれたスペックの超兵器。

しかもなぜか女にしか使えないという、わけのわからん欠陥を備えもしていた。別にそのこと自体はどうでもいい。

数がたったの476機しかなくとも、それが世界の戦力バランスを担うことになったのも、それら皆全て別にどうでもいいものだ。確かに、あんな出鱈目な物作ったせいで、俺と箒が離れ離れになりかけたが、それも少し抗った程度で無しにできた。監視対象なんて一か所に固まっていたほうがいいだろ、と姉貴に訴えて、結果、箒は俺達の家に住むようになった。

正直言って、そうしていなければ俺はどうなっていたかわからない。なぜなら、その頃からちよつとずつ、世間という物が変わっていったから。

ISがあるから女は強い。女は偉い。だから男は女より弱い。女より下だ。

そんな考えはちよつとずつ、少しずつ、世の中という奴を侵食していった。おまけにウチの姉貴が、全国ネットどころか全世界レベルで活躍してしまった。もとよりバグキャラじみていた姉貴は、瞬く間に世界から脚光を浴びる存在となった。

もしこれでISが男性にも操縦できる存在ならば、“織斑千冬”が強いのだと至極当たり前の評価となったのだが、結果それは女性優位の狂った思考を助長させる一因となった。

「男が粹がつてんじゃないわよ!!」

「弱い男のくせに」

そんなことをのたまう女性が世に増えて、そういう奴らを見るたびに心底からの吐き気を催した。どうしてそんなことを己の口から吐き出せるのかと、理解に苦しんだ。

相手の欠点を突いて蔑むのはまあ、許容はできなくとも理解はできる。相手の粗を突いて、自分は優越感に浸りたい。下衆だが一応の理屈は通る感情だ。

けど、“コレ”は違うだろう。

自分は女だから、女である時点で男より偉い。そんな物に理屈なんてあるわけない。

ISが使える？ それはISが強くて、実際にISに乗ってる奴が強いと自負するのならわかる。女が強いんじゃない、ISが強いんだ。

つまりは女だから強いんだとのたまう奴らは、相手も、当の自分すら見ていない。筋の通らぬ自己愛によって、自分は強い。自分は偉いと砂上の楼閣で空しい哄笑に浸る。

そんな奴らが、俺にはどうしても人間に見えなかった。己には見えぬ何かを頼りに、あやふやで空っぽな自負に酔う連中。木偶人形。そんな奴らはそう呼ぶのが最適だろう。

そんな奴らを見るたび思うのだ。人間ってのはそうじゃないだろうと。確かに世の流れに流されることもあるだろう、けど、いつかは自分の足で流されずに立てる奴が人間だ。

だから俺は、真面目に生きていない奴を認めない。

けれど、あの織斑千冬の弟という立場は、そういう真面目に生きていない奴らをたくさん引き寄せていった。どいつもこいつも目が曇っている奴らばかり、そんな奴らに辟易していても　　箒だけは違っていた。

周りからは剣術馬鹿だのなんだの揶揄されていても、アイツは自分のやりたいことをやっていた。流されずに自分の足で立っている。そんなアイツが、オレの目には眩しく光り輝いているように見えた。アイツのダチであることが心底誇らしかった。故に、アイツとの勝負は心が躍る。全霊を賭して戦って、それでもなおアイツは俺と拮抗する。アイツがいる限り、オレは前に進み続けると実感できた。

まあそんな事、口が裂けてもアイツには言えないがな。

今日も今日とて、いつものメンバーが集まって行われた、放課後の喧嘩じみた模擬戦が終わり、一夏を除く面々は大浴場で汗を流していた。

「チッ、今日も引き分けか」

湯気立ち上る湯船の中で、箒の苦渋に満ちた呟きが漏れる。その顔と体にはいくつも痣が付いており、今日の模擬戦が一段と激しかったことを如実に表していた。

「……………相変わらずよね、アンタと一夏って」

何せ今日の模擬戦の顛末は互いに武器を破壊され、弾き飛ばされた二人による、ISを使つての殴り合い。量産機とはいえスラストの出力とパワーアシストを乗せての殴り合いは、こうして互いの体に痛々しいほどの痣を残していた。

しかしそれは、一夏と箒にとってはいつもの事。それを一番よく知っている鈴にしてみれば、ああまたいつものオチかという感想しか持てない。ちなみに今日は、互いに渾身の右ストレートによるクロスカウンター、そこからのダブルノックアウトという顛末だ。

「相変わらずということとは……………これまでも？」

「うんそう、箒と一夏って事あるごとに勝負するし、その時は箒が鉄芯入りの木刀で、一夏の馬鹿はどっからか手に入れてきた実物の銃使ってたね」

鈴が平然と言った言葉の内容に、セシリアの整った柳眉が歪む。はつきり言つてそれは勝負という言葉の内容からあまりにもかけ離れたもので、とてもではないが許容できるものではない。

「正気ですの？」

「馬鹿だから正気じゃないんですよ？ 何せ箒ときたら模擬戦用のプラスチック弾頭を平然と木刀で弾き飛ばすもの。はつきり言つて馬鹿よ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うな、ウリ坊」

「いや、私も鈴ちゃんの言葉に同意するわ」

「……………エリーもか」

「私事です、もう一度言いますけど正気ですの？」

「……………ふん」

周囲からの総攻撃に、箒は膝を抱えて口元まで湯船に沈む。口から漏れる空気の泡が、箒の不満を表しているようだった。

「というか、お二人はどうしてあそこまで戦うのですか？」

セシリアの疑問は当然のことだろう。二人のそれは最早模擬戦や喧嘩などという言葉の範疇に収まるものではない。殺し合い、と評していいほどに苛烈で白熱した物だ。

「別に、ただアイツに負けたくないだけだよ」

けれど、箒と一夏の当人同士にしてみれば、その一言だけで説明が付くし納得できる。真実二人の間にあるのはそんな単純化された感情で、その奥底にあるのを説明付けられるのは、この二人をずっとそばで見続けてきた者だけだろう。

「ま、単純に言えばそうだけど、負けないってのは先に立っているってことで、そうすれば片方も必ず追いつがってくる、負けたくないってのはつまり、二人で一緒に先へ進みたいってことの表れなのよ」

そう、鈴はこの二人をずっとそばで見続けてきたのだ。だからわかる、この二人の負けたくないは自分の為でもあるけれど、互いの為でもあるのだ。お前はここで終わる奴じゃないだろう、だから俺／私が先に進んでやるから追い付いてこいよ、そんなあまりに馬鹿らしい思いを、二人は懸命に抱き続けているのだ。

「プツ……ククツ……」

「あはっ、あははははっ！！」

そんな事を聞かされては、セシリアとエリーが笑うのも当然だ。高校生になってまで、そんな子供の様な気持ちを懸命に抱き続けているなんて、なんておかしくて、馬鹿らしくて、そして

素晴らしいだろう。

ああ、ならばあれほど二人の戦いに熱が籠るのも納得できようという物だ。それぐらいの愚かしくも輝く思いでなければ、人はあれだけ懸命になりはしないだろう。

「成程、二人は親友なんだね」

「そうですね、その言葉こそがぴったります」

得心がいったと、そんな表情を浮かべるセシリアとエリー。二人の心中にあるのは、そんな関係を結んでいる二人への賛辞と羨望だ。恋愛感情などという言葉では結べない、苛烈で傷だらけの物ではあるけれど、そんな思いを結び合える存在がいることにかけて値なしの祝福を送りたいとすら思える。

「……………勝手に言ってる」

そして篝の顔が真っ赤に茹だっているのは、きっと湯船の温かさだけではないのだろう。

「そういえば当の一夏さんはどうしているのかしら？」

セシリアが会話に上り続けていた一夏の現状を気に欠ける。学園唯一の男子生徒であるが故に、当然大浴場での入浴許可など下りはない一夏は、模擬戦が終わった後ふらりと姿を消してしまった。

その一夏の行動は、基本的に毎日がそうであり、セシリアは常から彼のそんな行動が気にかかっていた。

「……知るか、そんなこと」

その問いに篤はそっけなく答える。しかしその様子には、何故か欺瞞が含まれている様に気がしていた。しかし、篤の様子からしてそれ以上は答えることはないだろうと、セシリアはあたりを付ける。

「ああ、一つ言ってあげるわセシリア、アイツはね、古臭いのよ」

代わりにその疑問に答えたのは鈴だ。その中に含まれていた古臭いという単語が気に掛かり、セシリアはそれをオウム返しに口にする。

「古臭い？」

「そう、アイツはかつこつけだからね、女の子の前ではカッコ悪いところ見せたがらないのよ。アンタみたいに誰かの目がある所じゃ、見栄張りたがるタイプなの」

一夏は真面目だ。素行とか外見などではなく、物事に対する姿勢が真面目だ。そんな彼が、自らが強くなるのをただ口を開けて阿呆の様に待っているだろうか。

そんなことは、例えば天地がひっくり返ろうともありえない。織斑一夏は座して待つだけの人間ではない。求める物を自らの足で進んで勝ちとりに行く人間だろう。

「成程 見栄張りですわね」

最早セシリアの心情に、一夏への嫌悪感などない。その見栄っ張

りで意地っ張りな人格に、混じりけなしの好感を得られるぐらいには。

「そういうところがいいんじゃない。カッコいいじゃん」

エリーは勿論、一夏のそういうところを知っている。彼のそういうところが心底気に入ったのだから。

アリーナの中で、未だ動く機影があつた。

一夏の駆るくらファール・リヴアイブが、初歩的な機動を幾度も幾度も繰り返している。急加速・急上昇・急下降・急旋回、教本通りの初歩的な機動を、丁寧に丁寧に繰り返し、それをひたすらにやり続けていく。

常の一夏からは想像もつかない、それは地味と言える光景だった。時に制御を誤り、頭の中に描いた機動とかけ離れば、それをアリーナの監視カメラで確認し、客観的な視点からどこにミスがあつたのかを事細かに確認する。

そしてまた失敗した機動を繰り返していく。体力よりも精神力を削っていく、明確な進展も何も無い練習を、一夏は無表情で黙々と繰り返していく。

「…………ふう」

そうしてアリーナの使用時間ぎりぎりまで自主練習を行い、少しでもISという兵器の操縦に習熟していく。

最大速度から地面から一センチの距離での急停止をやれば、時に

は地面と痛烈なキスをし、より鋭角な急旋回を行おうとすれば、間接に鈍痛を走らせる。それらの痛みは一夏にとつての糧であり、決して避けては通れない物だった。

もとより知識面では一般入学でこのIS学園に入ったどの生徒よりも、一夏は劣るだろう。男であるが故に、ISに関しての勉強など全くやったことはない。そんな自分が彼女たちに追い付こうと思ったら、それはもう男だからこそできる痩せ我慢で、必死こいて追い付くしかないだろう。

おまけに量産型とはいえ、自分だけの機体もある。そんな物を押し付けられたとはいえ、それを無為に腐らせるのは、一夏にとって我慢ならないことだった。

全く不満のない人生なんて、女子供の夢物語にしかないだろう。ならばそう、気に入らないことがあってもそれを飲み干して、足掻いて、前に進み続けることが人生だろう。

(…… 飢えや不満なんぞ、人生に付き物だろうが)

だからこそ、普段は悪態ばかりついて居る千冬に対して頭を下げ、アリーナの使用時間を延長してもらい、できる限り自らを追いつ込む。他の誰かはもう通った道だと自分を叱咤し、無様であろうとも練習を黙々と続ける。

それなりとはいえ、素人同然の機動を行い続ける一夏の姿は、確かに無様と言えるだろう。それでも、そうして積み重ねていく修練は、決して一夏を裏切りはしない。必ず一夏の血肉となって、いつか花咲く日もあるはずだ。

それになりより、一夏のその姿は真面目と、そう呼ぶにふ

さわしい姿だった。

常日頃一夏が自負する「真面目に生きている」という言葉に違わぬ姿。

「頑張ってるね、色男」

「　　なんだ、エリーかよ」

最初に出会った時には気付いた自分の隠行に、全く気付かないほど没頭していた一夏。

「ほら、喉渴いてるでしょ？」

「　　……おう、サンキュ」

常日頃叩く軽口も鳴りを潜め、一夏はエリーから投げ渡されたスポーツドリンクをどうにかキャッチする。既に満足に体を動かすだけの体力もないのか、表情だけはどうか平静を保っているものの、そのおぼつかない手つきが一夏の消耗ぶりを如実に表していた。

そういうところを晒してしまったことが一夏の表情を、苦虫を噛み潰したようなものに変え、それをエリーは愛おしそうに見つめている。

「　　チッ」

「拗ねない拗ねない、いいじゃない、そういうところを見られたってさ」

舌うち一つこぼした一夏は、場を誤魔化すかのようにスポーツ

リンクを一気飲みする。ゴクリゴクリと喉仏が動き、過度の練習で失った水分を急速補充する。

「やっぱりさ、こういうところは見られなくなかった？」

「当たり前だろ？ 男はいつの時代もカッコ付けばかりなのさ」

「でもさ、ウリ坊ちゃんや篝ちゃんは気付いているみたいだったわよ」

「それでも気付かないふりしてくれるあたり、アイツ等っていい女だと思うぜ」

「じゃあ私は悪い女かしら」

そう言ってニヤリと笑うエリーの表情は、確かに悪い女の、魔性というべき笑みだった。

それを見て一瞬、一夏の表情に思案の色が浮かぶ。さてどうしたものか、先程までの姿を見られて、このままずるとペースを握られ続けるのはしゃくだと、いつもの様に無駄な負けん気を発揮して、一夏は悪戯を考えている時の様に思考を加速させた。

「そうだよな、人の懐にずかずか上がり込んで、こうなりやお前の奥底も見ないと釣り合い取れないな、 ベッドの中で、とか」

ニヤリと、これまたエリーと同じように性質の悪そうな笑みを浮かべて、一夏はエリーに詰め寄った。

「あら、積極的ね」

「いけないかい？ いい女がいるのに手を出さないってのは、逆に失礼だと思っただがね」

「それじゃあ篝ちゃんは？ ウリ坊ちゃんは？ あの子たちもいい女なんですよ」

「ああ確かにそうだけど、篝でオレの息子おっ勃てる自信ないし、

ウリ坊は色気より可愛さが先に来るだろ、そういうふうには見れねえよ」

「酷い言い方、悪い男ね」

互いにかわす、ともすれば下品ととられかねない言葉の応酬だったが、それでも互いに奥底の心理を理解しているために、決定的にそういう結果にいきつくための色気が不足していた。

「駄目だな」

「駄目ね」

つまりは、三文芝居では雰囲気を作れないということだった。双方共に笑みを消し、疲れたように溜息交じりの否定の言葉を吐き出した。

「今日はもう限界かね、これは」

「そうねえ、ベッドの中で本当に寝た方がいいわよ」

「だよなあ、このまま突入しても絶対勃たねえ。それは男として恥ずかしすぎる」

「アリーナの施錠は私がしておくからさ、今日はもう帰っちゃいなさい」

「あゝあ、つくづくカッコ悪い」

「そうかしら、決めるべき時にカッコよく決めれる奴が、本当に力ツコよくてイイ男だと思うけど」

「前言撤回、やっぱお前イイ女だわ」

「今頃気づいた？」

「いいや、そんなの最初っから気付いてた。……………それじゃあ悪いけど後頼むわ」

「ええ、おやすみ一夏」

「ああ、おやすみ、エリー」

交わす別れの挨拶。同時に一夏の顔がエリーの顔に急接近した。吐息がかかるなんてものではなく、ほんの僅か零になる二人の距離。キスとすらいえない、ほんの僅かの接触をエリーの頬に残し、今度こそ一夏はアリーナから出ていった。

「じゃあ今度こそ

おやすみ、エリー」

三文芝居で気が抜けて完全に無防備になったエリーへの、それは一夏の完全な不意打ちだった。

そういう雰囲気でこういうことをやられても、エリーは決して動揺しないだろう。そんな状況ならば、来ることが分かっているなら、エリーは自分のプライドにかけて無様に動揺なんてしないだろう。

だからこそ、そういった警戒をはぎ取ったところに打ち込まれたこの不意打ちは、エリーの精神を完全に動揺させた。

「.....え？」

そんな呟きですら、発することができたのはアリーナから一夏の姿が消えた後。未だ頬に一夏の唇の感触が残っている様な気がして、エリーは思わず自分の頬を撫でた。

ようやくそこで、自分が一夏にキスされたことを自覚したエリーは、ついでに頬を撫でる自分の掌に熱いものが当たっている感触も自覚した。

「私、キスされちゃった？」

言葉にすれば、一層掌に伝わる温度が上がったような気がした。普段の飄々とした雰囲気からは想像もつかない、恋に疎い一人の少女の姿を晒し、それを自覚してしまう自分に一層エリーは混乱する。

「い……一夏の馬鹿」

誰もいなくなったアリーナで、一人寂しくそう呟くのはあまりにも間抜けだったが、今のエリーはそれぐらいしかできなかった。きつと一夏はこんな自分を想像していたのだろうと思うと、今手元にハンカチがあれば噛みちぎりそうなほどに悔しかった。

「こつちが、年上なんだよ？」

女のプライドとして、年下の男の子にこうまで手玉に取られると、混乱が収まってくれば悔しさが真っ先にこみあげてくる。

「あゝでも、今更どうこうしに行くのもなあ……」

そんなことをすれば余計に手玉に取られる予想しかできない。「何だエリー？ あれぐらいのキスで動揺するなんて結構初心なんだな」とか、「あれぐらいじゃ満足できないってか？ いいぜ、今のお前ならその気になれそうだ」とかのたまう一夏が、エリーの脳内で鮮明に再生される。

「あゝもうつ！！ 一夏の馬鹿っ！！」

一度罅が入った心はそんな想像だけでも揺さぶられ、エリーはその動揺を吹き飛ばす様に今一度、大声で一夏を罵った。

『何だ、可愛いところもあるんじゃないかエリー』

そこにちょうど、アリーナの館内放送から一夏の嗜虐心に満ちた声が響く。恐らく、あのまま帰るふりをしてアリーナの管制室に忍び込み、エリーの痴態をニヤニヤと眺めていたのだろう。

「……………え？」

先ほどキスされた時の様に長い沈黙の後に絞り出した呟きが、再びエリー一人だけがいるアリーナに流れた。

「見てた？」

『勿論』

「…………一夏の馬鹿、乙女のあられもないところ覗き見るなんて」

『お前だって俺のカッコ悪いところ見ただろ？　これでチャラだよ』

「一夏のエッチ」

『思春期の男なんて皆そんなもんだろ？』

「一夏の馬鹿」

『おう、よく言われる』

「一夏の変態」

『うわ、ひっでえ』

ああダメだ、とエリーは痛感した。既にピースは一夏の物、これ以上何をどう言ってもこのピースを崩せそうになかった。

「ふん、さっさと自分の部屋に帰って寝なさいよ」

「おう、お前の可愛い姿も十分堪能したしな、今度こそおやすみエリー」

「……………おやすみ一夏」

その応酬を最後にあっさりと一夏はマイクを切り、今度こそアリーナにはエリー一人となった。

「今度何かあったら、絶対私がペースを握ってやるんだから」

アリーナの中心で気炎を燃やすエリー。まあしかし、その姿も一夏がみれば可愛らしいとしか映らないものであった。

第四話（後書き）

<あとがき>

きつと司狼って本質的には努力家だと思うんですよ。けれど何でもできたし、できてしまったからそんなことすらできなくて、だからこの世界では、女連中に見られないところで努力してるって感じですよ。まあ、そんなの周りにはばれねえんですけど。

第五話

とある日の昼食時の食堂で、いつもの面子が集まってだべっているその時に、エリーがおもむろに一枚の紙を取り出した。

「じゃーん！！　これはいったい何でしょう？」

そう言っ出された紙を、全員が食い入るように見つめる。

簞だけは「別にどうでもいい」みたいな雰囲気を出していたが、それでも気になる様で視線だけはその紙に釘付けだ。そして鈴がそんな簞の様子を目敏く見つけドヤ顔を晒し、常より増して仏頂面になった簞にデコピンを喰らうところまで、実にスムーズな流れを展開する。

「　　　てい」

「ぶぎゃっ！？　何すんのよ！！」

「お前がこつちを見てドヤ顔しているからだろうが」

「アンタが無関心なふりしてチロチロ見てるから仕方が無いじゃないっ！！」

デコピンのせいで赤い斑点ができた額を抑え、憤怒の表情で簞に喰いかかる鈴。

実にくだらなく、微笑ましいやり取りを交わす二人に、他の面子どころかその場にいた他の生徒ですら生温かい視線を二人に、というか鈴に集中して注いでいた。

周りから聞こえる含み笑いに、ようやく鈴も自身が注目の的だと自覚し、そこから赤熱化&暴走のコンボを発動させる。

「うがぁっ！！ アンタのせいだこらぁっ！！」

「お前がハイテンションで暴れてるからだろ？ 流石ウリ坊」
「ウリ坊って言うなっ！！」

涙目で箒に詰め寄る鈴。しかしその光景に悲痛感などなく、何処まで行っても微笑ましさしかなかった。一夏に至っては「後はぐるぐるパンチしたら完璧だな」とか思っている程だ。

「第一あんたらがウリ坊ウリ坊って言いまくるから、クラスの皆にもウリ坊って言われてるのよ。責任取りなさいっ！！」

「皆ウリ坊がぴったりだと感じたからじゃないのか？」

「ちゝがゝうゝのゝっ！！ アンタたちのせいなのっ！！」

そんなやり取りを交わす箒と鈴を尻目に、セシリアが笑いをこらえながら自身の携帯端末から一枚の画像ファイルを展開させる。

「私のルームメイトがウリ坊ちゃんと同じ二組の所属で、ついにて漫画研究部に所属しておりますの」

もう我慢の限界と言わんばかりに震える手で、タッチパネルを操作して展開された画像には、二頭身にデフォルメ化された鈴が、可愛らしいウリ坊の着ぐるみを着込んでいるイラストだった。大きく口を開けたウリ坊の口から、鈴の可愛らしい顔とツインテールがぴよぴよと出ている。

「は……初めて見たとき……もうお腹が張り裂けそうでしたわ…プツ……ククツ」

「あはははっ！！ 最高っ！！ これ描いた人いいセンスしてるわっ！！」

「だな、正しくウリ坊じゃねえか。クククツ」

「ちなみにこれを描いたクラスの応援旗を作ろうという話が、持ち上がっているとかいないとか」

「いやあ、これは作るべきでしょ」

「生徒会で正式に認可してやれよエリー。権力つてのはこういう時に使うもんだ」

「そうよね、権力つてのは的確に正しく使わなきゃね」

「何処が正しくて的確なんじゃああああっ！！」

ようやくセシリアが持ち出した画像に気が付いた鈴が、エリーと一夏のやり取りで更にブチ切れた。

「だいたいどのどいつよ、こんなイラスト描いたのっ！！」

「お前のファンじゃねえの？ 愛されてるって証だろ？」

「こんな愛いらない、絶対いらない。というかこんなイラストの応援旗で応援されたら死ぬるわよっ！！」

「ねえ、セシリアちゃん、この画像コピーさせてちょうだい？ 今日にも画像アップロードサイトに上げるから」

「それには及びませんわ。昨日すでに上げました。喜んでくださいウリ坊ちゃん、すごいアクセス数ですわよ？」

「喜べるかあああああっ！！」

最早放っておいたらどこまでも過熱しそうなほどに鈴はブチ切れていた。

「そっぴやエリーが持てきた紙切れって何だったんだ？」

そしてそんな鈴を華麗にスルーして、箒がエリーの提示した本題に目を向けた。もう惚れ惚れするぐらいのスルーっぷりだ。長年の友達付き合いの成せる職人技であった。

「何元凶がスルーしとんじやこらああああっ!!」

「何って、私たちのせいで話が脱線しただろ？ 話の本筋に戻すのは人として最低限の礼儀だろう」

「ねえ、それなら私は？ 私への礼儀は？」

「さうで、なに書いてあるのかな、つと」

「聞いてんのかあああああっ!!」

「お前さすがにうるさすぎるぞ、公共の場所じゃ節度を守らないといけないだろ？ ん？」

実に平然と、呆れ顔でそんなことをたまう箒に、鈴の額に井桁がいくつも浮かび上がる。

「殴っていい？ ねえ、アンタのその顔本気で殴っていいよね」

「だから落ち着けて、ここはお前だけの場所じゃないんだぞ？」

「うえゝんセシリアゝ、箒がいじめるゝっ!!」

ついにあらゆる面で我慢の限界を迎えたのか、鈴はマジ泣きしながらセシリアの胸に顔をうずめて泣きじゃくる。何処からどう見てもそれは幼い子供のそれであり、泣き継られたセシリアも慈愛の笑みを浮かべて鈴の頭を撫でてあやし始める。

「よしよし、もう大丈夫ですからね鈴ちゃん」

「ひつく…………ぐすつ…………箒の馬鹿あ…………」

「ええ、箒さんが馬鹿なのは初めからわかってるでしょう？」

「…………おいこら、何を言っているんだセシリア」

「可愛さ余ってお友達をここまでいじめるのは馬鹿以外の何物でもないでしょうに」

「ぐつ…………」

鈴をあやしなから、まるで子供の集まりの面倒をみる年上のお姉

さんの様な雰囲気で、セシリアは箒をやり込める。

箒としてもちよつとばかりやり過ぎたかな、と心中で反省らしきものをしていたので、セシリアの物言いに反論もせず黙りこむ。

「鈴さんも箒さんと一夏さんが馬鹿なのは周知のことでしょう？」

「だつたら鈴さんがしつかりしないと」

「うん……わかった……」

ようやく鈴も落ち着いてきたのか、泣きはらした顔をセシリアの豊満な乳房から上げ、自分の腕で残った涙をぬぐい取る。拭い去った後にあるのは、いつものように澁刺とした笑顔。

「ああもう、箒なんか泣かされるなんてどうかしてたわ」

「ええ、そうです。むしろ箒さんを泣かしてしまいなさいな」

「……ふん、お前如きに泣かされるか」

「とか言いつつ、ウリ坊ちゃんが元気になって喜んでるんでしょう箒ちゃん」

「うるさいぞ。黙れエリー」

「きゃー、箒ちゃんのツンデレ最高」

どうやら箒はエリーのからかいには耐えることができても、一夏からのからかいに耐えることはできなかったようだ。何処から取り出した木刀を振りかぶり。

「公共の場所で暴れちゃだめでしょ？」

一夏の頭に振り下ろす直前、横合いから放たれた鈴の言葉に、その動きを止めざるを得なかった。

「……お前が言うか？」

「あたしだから言うのよ」

「うっわ間抜け、さっき自分が言った言葉でやり込められてるよ、カッコワリイ」

「……それでこの紙なんだけどね」

「……ものすごい平然と話を変えますわね、エリー」

「いやあ、だってこのへんで切り変えないと延々とこんな漫才やってそうじゃない？ この三人は」

「オレも入ってんのかよ、エリー」

「もち」

「はあ、それで？ この紙はいつたい何なんです？」

ようやく話の本題を切り出せることに、エリーは満足げな笑みを浮かべて、取り出した紙の内容を口にした。

「これは近々行われる学年別クラスリーグマッチのトーナメント表よ」

そのエリーの言葉にセシリアと鈴の目の色が変わる。何せセシリアは一組のクラス代表。そして鈴は途中入学とはいえその実力の高さから、既に二組のクラス代表になっている。

つまりは二人ともがリーグマッチの出場者であり、目の色を変えるほどに気にするのは当然のことだろう。

「それで？」

「どついう組み合わせになりましたの？」

当然の疑問を口にする二人だが、内心は既に第一試合の組み合わせにある程度の予想を付けている。

「当然、第一試合の組み合わせは一組対二組、セシリアちゃん対ウリ坊ちゃんよ」

何せ互いが専用機持ち、しかも双方共に第三世代型の最新鋭機を専用機としている。基本的にIS学園のこうした試合は生徒の技量の確認もあるが、最も重視されるのはさまざまな組織の諜報合戦だ。目を付けるに値する優秀な操縦者はいるか、あの機体の機能・性能はどれほどのものか、そういった物の探り合い。女尊男卑の世の中にあるうとも生き続けている古狸の化かし合いだ。

ならばそんな状況下で、中国とイギリスの第三世代機同士をぶつけ合わないなど許される筈がない。何せ相手がただの学生且つ量産機だと、満足なデータを得られないかもしれないのだ。そのためにもこの組み合わせでないと困る。でなければ学園当てに「公正な試合の組み合わせを求める」という一文が判を揃えた様に送られる筈だ。

「まっ、順当よね」

「ええ、想定通りですわ」

故に双方共に驚きはない。しかも毎日の模擬戦で互いの手の内は知れ渡っている。勿論奥の手がある可能性はあるが、そんなもので気後れするほど二人の心胆は細くない。

「負けないわよ、セシリアっ!!」

「それはこちらの台詞ですわ。鈴さんっ!!」

だから互いに闘志を燃やし、遠くない未来での奮戦と己が勝利を

誓いあう。それは実に青臭く、実に真つ当な、見る者を心地よくさせる好敵手の関係だ。

まるでそう、どこぞの真面目な悪餓鬼と、男勝りの負けず嫌いを彷彿とさせる様な、輝きすら感じさせるような光景だった。

鈴はこれまで、どこぞの二人の関係を見守りながら、それでもそこには入れなかった。友達だと胸を張って言えたが、ライバルだとはいえなかった。

セシリアにとっても、代表候補生という地位まで上り詰めるための戦いの毎日だったが、しかし、勝たなければいけないとは思っても勝ちたいと思った相手はいなかった。

そんな二人が、一夏と箒の関係に羨望にも似た憧れを抱いてきた二人が手に入れた、心地よい敵手の関係。

「ノリノリだねえ、二人とも。 ねえ一夏？ 箒ちゃん？」

「 チッ」

「 フン」

まるで鏡映しの自分たちを見せられているような感覚に陥った一夏と箒が、照れくさを隠す様にそっぽを向くぐらいには、今のセシリアと鈴は光り輝いていた。

「ほんと、可愛いよね皆」

そんな四人を見つめるエリーの表情には、微かな寂寥感が滲んだ微笑みがうつっていた。

「やっぱり友達って、いいものだよね」

「……まあな」

「当たり前だろ？」

「いまさら何言ってるのよ」

「ええ、ここに来てよかったですわ」

反応は様々、それでも全員が揺ぎ無い肯定を返したのだった。打てば響くと言えるようなその即座の反応は、全員に繋がった絆の証なのだろう。

「ねえ、
賭けをしない？」

全員照れくささからか、少しばかりしんみりとした空気を吹き払うように、エリーが務めて明るくそう言った。

「……賭け？」

流石にそんな言葉を、いくらエリーとはいえ吐くのは予想外だったのか、全員がそろってそう聞き返した。

「そう、賭け。今度のリーグマッチでセシリアちゃんとウリ坊ちゃんのとっちが勝つかの賭け」

「いいのかよエリー、一応お前IS学園の生徒会長だろ？」

「いいわよ、ぶつちやけて言うところこの教師連中もこっそりとやってるしね。まあでも私たちは健全に、ここの食券でも賭けましようか」

「賭けに健全も糞もあるのか？」

「あら、箒ちゃんはやらないの？」

「一応私は空気を読めるほうだと思ってるんだよ」

「相変わらずヒネてんなあ、箒は」

「……っさい」

「やりたいならやりたいって言えばいいんだよ、素直じゃないと人生損するぜ?」

「ああはいはい、わかったよやりたいって言えばいいんだろ? やりたいよ私もっ!!」

一夏の忠言なのか、からかいなのかわからない言葉の前に箒も陥落し、大声で明確に賭けの参加を口にした。

「それで? 二人はどっちに賭ける?」

言質をとったエリーが、一夏と箒にどちらに賭けるのかを聞いてセシリアと鈴は少し緊張した面持ちで、固唾をのんで二人の選択を聞く態勢をとった。

「……………」
「……………」

恐らくは即答するだろうという三人の予想を裏切って、一夏と箒は少しばかりの沈黙の後、賭ける対象を口にした。

「セシリアに食券十枚」

まずは箒がそう答え。

「おいおい箒、同じ方に賭けたら賭けにならないだろ? オレもセシリアに賭けるつもりだったんだぜ?」

つまりは、双方共にセシリアの勝利に賭けたのだ。セシリアとしては、二人は鈴に賭けるだろうなと予想していたので、外れた予想に僅かな驚愕の表情を見せた。

やはり友達として長い付き合いである鈴に、応援の意味も込めて鈴の勝利に賭けるだろう、と。

別に非はないが、それでも少しばかりの後ろめたさを顔に滲ませて、セシリアは鈴の方へと視線を向けた。

「ふふふん」

ドヤ顔だった。それはもう見事なドヤ顔を鈴は晒していた。セシリアですらがその小憎たらしさにデコピンをかましそうになるほど、それは見事なドヤ顔だった。

「鈴……さん……？」

「どしたの？ ウリ坊ちゃん」

そのあまりの豹変ぶりに、セシリアとエリーもちよつと引きながら鈴に疑問の声をかけた。それに対し鈴は嬉しくて嬉しくて仕方が無いといわんばかりに口元はにやけ、体をくねらせながら、事の仔細を語り始めた。

「えゝだつてゝ、箒も一夏も素直じゃないわけよ。そんな二人だから馬鹿正直に「鈴の勝ちに賭ける」とか言えなくて、それで悩んだ拳句にセシリアに賭けたのよゝ、即断即決しがちなこいつらがあれだけ沈黙してたのがその証拠よっ」

そう言い切ったと同時に、鈴の額に二つの指が伸びる。

「
」

その指の持ち主、一夏と箒は無言で中指を折り曲げ、その先端を

親指で抑えた。見紛うことなきデコピンの形だ。

ギリギリと、傍から見てるだけでも全力全霊の力が込められているのがわかる指は、直後、未だご満悦の表情を晒している鈴の額に強烈な音を立てて激突した。

「ふっふん

ふめぎゃっ!？」

まあ、何処からどう見ても鈴に内心を暴露された一夏と箒の照れ隠しでしかなかった。むしろそれ以外にどうやったら見えるんだと言いたくなるほどの、完全無欠の照れ隠しだった。

「アハハハハッ!! おっ、おながが限界ですわっ!!」

「プハハハハッ!! もう最高っ、あなた達最高過ぎるわっ!!」

そんなものを見せられては、セシリアとエリーが何々大笑するのも当然だ。

「何? アンタたち恥ずかし むぎゅ!？」

それを見て調子に乗った鈴の口を、一夏と箒の指がつまんで広げて封じたのだった。

ちなみに翌日、朝のSHRにて生徒会から配布されたプリントがあった。

『学内大会における応援旗の仕様とその規定』

ああそう言えばエリーって生徒会長だったわよね、そうか……あの言葉本気だったんだ……。

「ふっざっけんなああああっ！！ エリーの馬鹿ああああっ！！！」

朝も早くから、一年二組の教室に鈴の絶叫が響き渡ったのだった。

第五話（後書き）

<あとがき>

何というか、話における鈴のヒロイン度がヤバイ。セシリアにまでいじられるって……。

きっと「うがっっ!」と吠える鈴を見てIS学園の生徒たちは次々と陥落しているでしょう。……新ジャンルがポなんてありだろつか。

第六話

遠い。届かない。

私はもう、戻れなくなった。

見えず、聞こえず、匂わず、感じず、あらゆる物が全く無い。

あれから、どれだけの時が過ぎ去ったのか、何も無いから、比較できる物などありはしないから全然わからない。

つまりそれは停滞しているという事。時間というのはどうしたって流れるもので、だからこそ何も無いここの時間は流れていない。

暗い。昏い。ここはまるで水底だ。のしかかる黒は這い出ることを許さず、流れる事無い漆黒は時間が止まっている。

寒い。

だから私は心も止めた。そうすれば私自身も、何かを感じること
は無くなったから。絡み付く漆黒の停滞に、自分自身も委ねた。

それでも、漆黒の更に奥深く、深淵の果ての深遠で私は思う。在
りし日の輝きよもう一度。日の光を一身に浴びたいと。願いなんて、
ただそれだけ

ねえ、お父さん。私は何か悪い事をした

の？ ワタシガイジンノコドモダカラ？

それはそれほど罪深かったのだろうか。生きているなら誰しもが

享受できる輝きすら剥奪されるほどに。

ノイズの様に、その時の光景が浮かび上がる。母さんが死んでから初めて会った、他人の様な父親。そこで差し出された味気ない紅茶を啜ったと同時に途切れた景色と意識。擦り切れた意識が浮かび上がった時は既に、私はここに縛り付けられていた。

あまりに唐突で、何の覚悟も成せないままに放り込まれた地獄。状況を認識してからは、声にならない声で鳴き叫び続けた。

暗いよ。

寒いよ。

誰か、抱きしめて。

それでも、助けは来なかった。だから私は、

諦めたのだ。

遠い。届かない。

俺は再び、戻ってしまった。

止まれず、只管に歩き続ける。自らの足はもう、俺の物ですらなくなつた。見せつけられ、聞かせられ、感じさせられる。俺の意思など欠片も介在しない行進は、正しくからくり仕掛けのそれと同じだ。

最早、かつて進んでいた頃のことは何もかもが思いだせないが、それでも、闘争の只中を、生死をかけた非日常を、誇りを胸に突き進んでいた筈だと、そう確信していた。

だからこそ、その果てにあった停止<死>は忌避すべき事ではなかった。足掻いて、足掻いて、足掻き続けて、その果てに勝ちとつ

た結果だ。

停止<死>は、この世に生きる誰にも降り注ぐもの。ならばこそ、それを忌避し続け、逃れ続け、全霊で回避し続けた先に、力及ばず降り注いだそれにこそ、至高の価値がある。

少なくとも、己はそうして停止したのだと、それだけは断言できる。

俺が憤怒するのは、そうして手に入れた終末を、よりもよって始点に戻すなどという、肥溜に満ちる糞尿より下劣な真似を、誰とも知れぬ者たちにされたということだ。

何故だ。何故俺から終わりを奪った。終わりがあるから始まりがある、などとよく聞く文句だが、ならば、終わったままに動かし続けられる俺はいったいどうすればいいのだ。

至高の結末に戻ることすら許されず、さりとて止まることすらできぬこの身は、進むことしかできないというのであれば、ならば進もう。立ち塞がる全てを滅ぼし尽くし、あの輝かしき結末へと帰りつくために。

故に、万象一切砂へ還れと、我が拳に呪詛を込めた。

俺を止めたくば止めるがいい。怨嗟を込めて刃を振るい、銃火を放て。立ち塞がる怨嗟の壁が、いつか俺を押しつぶすその時まで、この身はからくり仕掛けの戦鬼と化す。

ISは基本的に、女性のみが動かせる。織斑一夏という唯一の例外はあれど、それは今でも不変の事実だ。さて、ならばその上で尚、ISを男性の意のままに動かそうとすればどうするべきか。

実に簡単だ、ISを女性に起動させて、男性はその女性を意のままに操ればいい。女性をISに対するエミュレーターとして一個の部品へと変化せしめ、それを操ろうと考えた男がいた。

その男はそうした成果を求めるあまり、他の企業や国家どころか、とある犯罪組織とまで手を結び、更には妾が生んだ己が娘すら、その外道の所業への供物とした。

自身と血の繋がりのある実の娘の、人間としての尊厳すら認めず、ただ高いIS適性があつたからという理由で、その娘は人ではなくなつた。

そうした下劣畜生の所業の果てに、例え男性であろうとも操れるISは完成した。ハードは作つた。エミュレーターも製作した。ならばソフトウェアにもこだわろうと、更なる人柱をその者たちは求めた。

当時裏の世界で名を馳せていた武道家の、その脳髓を今度はソフトウェアへと作り替え搭載し、その機体は真の完成をみる。

死者の魂をくべて動く醜悪極まるその自動人形の名は、
ゴ
ーレムと言つた。

セシリアの視界に映る照準に<甲龍>が重なり、引き金を引く。銃口の中から迸る閃光が大気を焼きながらゼロタイムで伸びるが、発射タイミングを見切つた鈴は体を右に捻り、灼熱の閃光に機体の表面装甲を焦がしながら、自身の上方に位置するセシリアに向かつ

て突進する。

<甲龍>の非固定部位に搭載されたスラスターが唸りを上げ、同時に振りかぶられた<双天牙月>も唸りを上げる。鈴はそのまま突進してセシリアへ上段からの振り下ろしを放つ。

その直前、鈴はP I Cによる慣性消去とスラスターの推力ベクトル反転によって、最大速力を維持したままの百八十度反転を行った。直後、鈴を阻むように四筋の閃光が空中に光の格子を描く。レーザーライフル発射と同時に切り離れたビットによる牽制。あのまま鈴が突進していれば<甲龍>は光の格子に絡め取られ焦がされていただろう。

「くっ」

「ちいっ」

鈴は突進を阻まれ、セシリアは不意打ちを回避されて悪態をつき、それでもその苛立ちを機体の挙動へおくびにも出さずに戦闘を続行する。

「往きなさいっ、<ブルー・ティアーズ>!!」

セシリアは不意打ちを行わせたビットをそのまま稼働させ、鈴の四方を囲むように動かしていく。同時に幾度もレーザーを斉射し、<ブルー・ティアーズ>の本領とも言える単機による包囲戦を展開する。

「まずっ!? でもっ」

それをやらせては不味いと、鈴は連射モードへと切り替えた衝撃砲をセシリア自身に向けて発射する。これまでの模擬戦において、この戦法の弱点もよく知っている。ビット使用時は本人が案山子も

同然になることを。

「そんな手はそうそう喰らいませんっ!!」

だがしかし、今のセシリアは案山子ではなかった。大きく旋回機動をとって衝撃砲の見えぬ空間圧を回避し、手に持つレーザーライフルを発射しながらビットも動かし、計五本のレーザーが一斉に鈴へと襲いかかる。

「嘘っ!?! どういうことよっ!!」

その特性上、今の攻撃などあり得ないと高をくくっていた鈴は、精緻な照準を付けられたレーザーライフルの一撃はともかくとして微妙に甘いビットのレーザーはなんとか避け切ることに成功していた。損傷としてはシールドを貫通しての右腰部装甲への被弾。即座に被弾し溶解している装甲をパージしながら、鈴は先ほどの攻撃を推察する。

（多分、ビットの制御を完全思考制御と、予め組んだマニュアルの二つを組み合わせて行ってるんだわ。そうして余分のできたリソースで機体本体を制御していると言ったところね）

ならば、ビットの機動精度に着目すれば、セシリア自身の攻撃タイミングを見切れるはずと、ISの全方位視界を利用して、場の動き全体を注視する鈴。現時点ではビットの動きに硬さが残っている。

（ 鋭くなった? ）

そしていま、その動きから硬さがとれ、鋭さが浮かび上がってくる。ならば今こそ好機と、再びセシリアに突撃をしかけようとする

鈴だが、その先にあつたのはしてやったりと、笑みを浮かべるセシリアの姿。

「かかりましたわね」

こうして鈴が自身のとつた手段を見抜くのも想定の内だったのだらう。オートからマニュアルへの、ビットの操作方法の変更をセシリアはフェイントとして利用し、見事に鈴を釣り上げた。

「このままやられるかつ!!」

鈴は咄嗟に＜双天牙月＞を二刀に分離、左手に持つ方の刀身をレーザーライフルの射線上に翳し、楯として利用する。そして右に持つもう一刀を腕部パワーアシストを全開にして投擲。片側だけでも巨大な刃が高速回転しながら、空中に大きな弧を描く。

レーザーライフルから延びる閃光が、左に持つ＜双天牙月＞の刀身を焼く。しかしながらIS用格闘兵装の物理的強度は並外れており、刀身表面に溶解痕を穿つにとどまった。

次いで鈴は衝撃砲を稼働させる。先ほどとは違い威力を重視した最大出力モードでの発射だ。そして弾体として圧縮する空間の座標をあらかじめ最大範囲に設定。一応使用可能範囲に収まる数値だが、そのせいで余計に空間圧縮に時間を割かれる。

確かに威力はあるが、本来ならば高機動戦闘には適さない使用法だが、先んじて投擲した右の＜双天牙月＞、セシリアが余裕すら感じさせる動きで既に回避機動をとっているそれを、圧縮する空間の歪みで無理矢理軌道変更させる。あらかじめセシリアの後背から襲う軌道で投擲したそれを、セシリアは前進を選択して避けている。故に、空間圧縮による＜甲龍＞側への軌道修正は、セシリアの意表を突く。勿論直撃とはいかないが、＜ブルー・ティアーズ＞の左のスラスターに接触した＜双天牙月＞は、機体を破壊できるほどでは

ないが相当の衝撃をセシリアに伝えていた。

「しまった、最初からこれを狙って!？」

そして、セシリアの体勢が崩れる。最大出力での衝撃砲のチャージを終えた、鈴の視線の先で。

解き放たれる空間の歪み。セシリアは少しでもダメージ軽減にと温存していたくブルー・ティアーズ>のミサイルを発射する。白煙を描き飛び出すミサイルが、不可視の衝撃によってひしゃげさせられる。直後ミサイル二基の信管が起動。その爆風は確かにセシリア自身をも襲ったが、同時に不可視の衝撃のダメージを軽減させることにも成功していた。

爆風にあぶられ、同時に距離をとることに成功したセシリアは、即座にビットの制御をマニュアル制御に移行し鈴の牽制を行う。

クラスリーグマッチ、その第一試合である鈴とセシリアの戦いは、正しく一進一退という言葉が似合う伯仲した物だ。

既にこれまで幾度も模擬戦という形で矛を交えた間柄。戦闘を進める上で重要な要素である戦いのくせ、呼吸のタイミングという物を互いに知悉しているため、まるで演武でも見るかのような入れ替わり立ち替わりの攻守の移動。

しかも第と一夏の戦いとは違い、二人ともがISの操縦というものに習熟している。何せともに国家の威信を背負う代表候補生だ。相応の実力が無ければ務まらない。

故にIS戦の手本とはこうだと言わんばかりの攻防を、アリーナの中で繰り広げる。くブルー・ティアーズ>は遠・中距離戦主体の為に鈴を引き離すべく、ビットの多方向攻撃と絡めた狙撃戦を展開し、く甲龍>は接近戦に比重を置いた近・中距離戦用の機体の為、その光の雨をかくぐりながら接近戦を狙いに行く。

引き離したいセシリアと、懷に潜り込みたい鈴の戦いは、双方の実力が拮抗しているために、まるで固定されているように二人の距離は変わらずにいる。

互いの奥の手であった、ビットのマニュアル・オートの混合制御と、空間圧縮による投擲軌道の変化は確かに互いの意表を突いたが、それでも心の奥底に「あいつならばこれ位やるだろう」という思いがあつたのだろう、然程相手への動揺を誘えずにいた。

互いに決め手を欠いた千日手。加熱し白熱する思考の中で、この流れを変える一手を模索し続けながら、二人は戦い続ける。

先にその一手を見つけたのは鈴だった。

(……………あれだっ!!)

光明を見出した鈴はこれまで温存していた腕部高電圧縛鎖くボルトテクチェーンを起動。同時に目的の位置をとれるまでドッグフアイトを繰り広げる。目指す位置はセシリアの上方をとりつつ、ある物とセシリアが一直線になる位置だ。

それを狙って居ると悟られぬように、勤めて表情を制御しながら、セシリアの放つ閃光の豪雨をかくぐり続ける。機体装甲表面にくつもの黒焦げた筋を刻みながらも、とうとう鈴は狙い続けた位置をとることに成功した。

「行けええええっ!!」

咆哮と同時、右腕部装甲が開き、そこから高圧電流を纏ったチェーンが先端部のアンカーに内蔵されたロケットモーターによって音速を突き破りながら飛翔する。

雷撃の蛇となったそれは猛然とセシリアに襲いかかり、絡め取って<ブルー・ティアーズ>を行動不能にしようとする。しかし、この戦いにおいて温存していた武器とはいえ、鈴はこれまでの模擬戦に熱中し既に使用済みの武装であったため、セシリアの動揺はそれほど大きくはなかった。

「甘いすわねっ!!」

あざけるようなセシリアの物言いの横を、空を切った<ボルテックチェーン>が過ぎ去っていく。発射時の互いの位置は鈴がセシリアの上方に位置していたため、<ボルテックチェーン>はそのまま地面に突き刺さる。

「それはどうかしら」

だがしかし、起死回生の一手を避けられた鈴の顔に映るのは、その結果にあまりに不釣り合いな不敵な笑み。ようやくセシリアも、鈴が<ボルテックチェーン>が命中するなど端から期待していないことに気が付いた。

（では一体!? 鈴さんは何を狙って）

極限まで加速セシリアの思考が、鈴が真に狙っている物を推察していく。何だ、何がある。あれを発射したのはただの目晦まし? それとも、避けられることこそを狙っていた?

「しまった!?!」

一秒にも満たぬ思考と停滞。短くともあまりに長い隙の後、ようやくセシリアは鈴の狙いに気がついた。それを示すように<ボルテックチエーン>が高速で巻き取られていく。その先端のアンカーに、先の攻防で投擲した<双天牙月>を絡め取りながら。

「どっせえええい!!」

裂帛の気合と共に、鈴が右腕を力の限り振りぬいた。当然その拳動は<ボルテックチエーン>に伝わり、即席の巨大鎖鎌と化した<双天牙月>がセシリアに襲いかかる。

背後から完全にセシリアの虚を突く形で飛来するその鉄塊は、<ブルー・ティアーズ>の背部に激突しメインスラスターを破壊。同時にシールドエネルギーを大きく削った。

「これで、勝ちだあああつ!!」

そこに、鈴が真の奥の手を放つ。模擬戦では一度も使わず、これが本番での初使用である、真正正銘の奥の手を。

<甲龍>のスラスターが、構造限界ぎりぎりまで推進用のエネルギーを貯め込み、圧縮する。下手をすれば自壊しかねないほどの暴力的なその力を、指向性を持たせた形で爆発させる。つまりは、それだけの力を丸々転用した文字通りの爆発的加速。同時、機体と鈴の体に掛かる凶悪な慣性をP I Cが打ち消した。

<瞬時加速>と呼ばれる、一流同士の試合でも通用する、文句無しの高等技能。

代表候補生といえども、そう易々と行えないそれを、鈴はこ一番の勝負どころで成功させていた。

音速などとは比べ物にならない、ゼロタイムからのマックススピードに乗せて、握りしめ続けていたもう片方の＜双天牙月＞を振りかぶる。

人間大の斬撃砲弾と化した鈴。音を置き去り空を切り裂き、狙うはセシリアただ一点。求める物は勝利のみ。

直後、鈴とセシリアがアリーナ中央で激突した。加熱する試合を、固唾をのんで見守っていた観客も、当の鈴自身もこの一撃での勝利を確信し。

「私の、勝ちですわ」

奥の手を持っていたのは、なにも鈴だけではない。セシリアもまた正真正銘の奥の手を持っていた。

傍目からは判らないものの、セシリアの提言を受けて専用レーザーライフル＜スターライトMk?＞には改良が施されていた。長大な射程と威力を誇る代わりに、その長大な銃身は接近戦においてのとり回しが悪い。それを少しでも解消するために、その長大な銃身に追加装甲の装着及び銃身のフレーム強化を行っていた。

つまりは、そう何度も使えないものの、その銃身を近接格闘戦兵装への楯に改良していたのだ。

「少しばかり、銃剣術の心得がありますので」

それを利用し、＜双天牙月＞の刃筋をその銃身に滑らせるように受け流し、＜瞬時加速＞の勢いのままセシリアの右後方へと流れて

いった鈴へと、<スターライトMK?>の銃身を右肩に担ぐようにして後ろへ向けた。

無論、銃身の改良など最近終えたばかりで、こんな物は一か八かの賭けに過ぎないが、それでもセシリアはその賭けに勝ったのだ。後は、引き金を引き、その勝ちを確実なものにするだけだ。

直後、轟音が鳴り響いた。

「何事ですよ!？」

「いったい何なのよ!？」

無論それは<スターライトMK?>発射によるものではない。全周囲に張り巡らされたアリーナのシールド、ISによる試合の流れ弾を完全にシャットダウンすることできるそれが、轟音を伴って破られたのだ。

たちどころにアリーナ内部はその破壊の余波によって巻き上げられた粉塵に覆われ、それを成した下手人の姿を一時的に覆い隠す。

「相手は 餓鬼か」

その中より、悠然と進みでる機影があった。煙をかき分けるように進みでた“それ”は、静謐な声を伴い、その視線の先にあるセシ

リアと鈴を見据えた。

その機影は、一言でいうなら黒き闘士。曲面装甲で包まれた全身装甲の機体、その頭部は虎を模した兜に包まれ搭乗者の表情を包み隠している。

だが、何よりも異常なのはその空虚さ、元より何も無い機械の無機質さとは違う、在ったからこそ抜け落ちたその空虚さが、何よりもセシリアと鈴の精神を撃ち貫いた。

「だが、だからと言って容赦はせん。ここは闘技場なのだろう。命を賭して鎬を削る場所の筈。覚悟しろ、などと今更な事を言うつもりはない」

握りしめられたその拳へ、明確に、鮮明に、立ち塞がる万象一切を砕き滅ぼす、まさに必殺の意思が込められた。

第六話（後書き）

<あとがき>

うん、なんだろう……自分で書いて言うのもなんだけど、対ゴレム戦ってここまでの無理ゲー感が出る物だっけ？

そして、この状況下で二組のクラスメイトはウリ坊着ぐるみイラストが描かれた応援旗を掲げていると言ったら、シリアス感が瞬間にかき消えるよな。

第七話

漆黒の鉄虎が、大地を踏みしめる。言葉を語らず、ただ、その拳に明確すぎるほどの殺気を纏わせ、鈴とセシリアににじり寄る。

「
砕ける」

同時、その重厚な巨体が背部に内蔵された高出力のスラスターによつて猛然と加速する。破壊、その一点を成すために、鉄虎は進む。

「くっ、私ですの!？」

狙いを定めたのはセシリアと<ブルー・ティアーズ>。例えあと一步のところで勝ちを拾えたとはいえ、背部のスラスターは鈴の奇策によつて全損し、それに伴う様にシールドエネルギーも大きく削られている。

弱者から撃破する。戦場においては至極当たり前の選択。それを一部の揺らぎすらなく選びとり行使する。先の宣言通り相手が女子供だろうと容赦はしない、していない。

故に、手心などあるうはずもない。その拳に込められし物はあらゆるものを砕く必滅の意思。

「
くっ!？」

「セシリアっ!！」

例えそれを知っていなくとも、生物的な本能がセシリアの背筋を凍らせ警鐘を放つ。鈴もまた、自身が狙い定められていなくとも、その拳の剣呑さに気付き、セシリアの援護に回った。

恐怖の一念が表情に張り付き、鈴は二刀に分離させているく双天

牙月>を楯として構え、セシリアは四つのビットを間に割り込ませた。セシリアが満足に動けない以上、防御は必然の選択で、そのために取れる全ての手段を二人は行使した。

例え未知の敵といえども、取れる手段の中で最善を選びとった二人は称賛されてしかるべきだが、そもそも、二人の取れる手段で最善など無かったのだ。

あ、駄目だコレ。

鈴の脳髄に直感が走る。これは駄目だと、防御なんかを選択しては駄目だと。これはそんな小賢しい真似ができる代物ではないと唐突に理解した。

その理解を肯定するように、割り込んだビットが、掲げられたく双天牙月>が、その拳に触れた途端砕け、砂となって形を無くす。万象一切砕け散れと、その拳に宿った呪詛そのままの、完璧なる破壊。

「くっ、ああああああああっ!!」

眼前に迫る拳、そこから逃れるために鈴はセシリアを引っ掴むと、後先考えない瞬時加速を行使。そのままアリーナの内壁に高速で激突した。

「……助かりましたわ」

痛みをこらえながらセシリアは立ち上がり、無茶を行使した鈴に礼を言う。高速で壁に激突した？ そんな物は些細なことだ。“アレ”の直撃を喰らうよりかはるかにましだと実感した故に。

「……どういたしまして、って言うところなのかしらね」

「私は、ああはなりたくありませんもの」

「それについては同意しておくわ」

二人の視線の先には、二人に回避された必滅の拳がその勢いのままアリーナの内壁に激突した光景が映し出されていた。

アリーナの内壁は、核シエルターすら比較になら無い装甲の厚みと強度を持っている。常軌を逸したその防御力、観客を守るシールド発生装置の防御壁も兼ねているからこそ、その強度に関しては間違いなく世界最高峰だと言える代物だ。

その内壁が今、二人の目の前で大きく抉られ砂となって砕け散った。それを成したのは甲鉄に包まれた握り拳。はつきり言って、あり得ないと言えた。しかし今、それは現実となっている。どうしようもなく明確に。

砂となった内壁の欠片が、風に乗って二人を包んだ。

「何なのだ、あれはっ!？」

管制室内部に千冬の静かな怒声が響く。無論先の一撃は千冬たちも目にしており、その剣呑な脅威に対しさしもの千冬も驚愕の表情を見せていた。

「ともかく、すぐさま学園内のISを応援として差し向ける。それとアリーナのシールド及び隔壁の解除はまだかっ!!」

「駄目ですっ！！ 今三年が中心となつて進めていますが、それでもまだしばらくかかると報告がつ！！」

「最大限急がせる。それと日本のIS部隊にも応援を要請しろ。あれは只者じゃないっ！！」

矢継ぎ早に指示を出す千冬、そこにあの鉄虎の解析にあたっていた真耶が驚愕の声を上げる。

「織斑先生っ、あの正体不明機の解析終わりましたっ！！」

「それで、あの芸当はいつたいどういうからくりだ？」

「それが」

言い淀む麻耶、しかし、今この状況にそんな余裕は一切ない。それは真耶も痛烈に理解しているので、驚愕を飲み込んで言葉を続けた。

「
今の一撃において、局所的なグラビトン・フォトン・ウィークボソン・グルーオンの消失を確認しました」

管制室内の空気が凍った。真耶が先ほど発言した単語は基本相互作用における物質を構成する力の媒介となる素粒子だ。それが消失した。つまりは、何も形を保てないということだ。

「間違い、無いのだな」

「ええ、事実上、あの一撃を防御するなんてことは不可能です。例えシールドを展開したところで、電磁相互作用によるエネルギーの固定ですから、フォトン消失させられてしまえば意味がありません」

千冬の頬に冷や汗が伝う。一撃必殺などという、そんな荒唐無稽な出鱈目が今現実存在していることが、何よりも千冬の背筋を凍らせた。

「くっ……観客の避難誘導を急げ!!」

出来ることと言えばそれぐらい。あの一撃の理屈がわかったところで、言えるのは決して喰らうなということだけなのだから。

「
織斑先生っ!!」

そして事態は、その程度では収まらない。この日ほど、千冬は現実を呪ったことはなかった。

鉄虎の打ち込んだ一撃は内壁の一部を砂に変え、結果、観客席の崩落という事態を引き起こした。

アリーナのシールドは、複数の発生装置が観客席の下側、内壁を取り囲むように配置されている。それが先の一撃で砂に変わった。無論それは複数あるうちの一基で、すぐさま他のシールド発生装置がその穴を埋めはしたが、事実としてシールドに穴が開いたのだ。

「うわあ、最悪」

「
おっと」

「おい箒、人の肩踏み台にするな。お前の女王様プレイなんて想像すらしたくねえ」

「何言ってる。それぐらいやれよ。私だけ生身だぞ」

つまりは、たまたまその崩落に巻き込まれてアリーナの中に落ちてきた、エリー・箒・一夏の三人が、この戦いの場に現れてしまったのだ。

一夏とエリーはすぐさまISを展開し、唯一生身である箒を受け止める。そしてすぐさまげんなりとした表情を見せ、鉄虎と相対する。

「エリー、あれどうするよ」

「そもそもどうにかできるのかしら、あれ」

「まあな、……おい！！　ウリ坊にセシリア、怪我は無いのか？」

「まあ、なんとか」

「私の方は、もう砲台ぐらいしかできませんが」

「つつわけだ黒甲冑。俺らも参戦させてもらっぜ？」

その一夏の言葉に、鉄虎はゆるぎなく答える。まるでそんなことになど困惑も驚愕もしないと、己にそんな機能は無いと言わんばかりの静謐さだった。

「委細、構わん」

向かってくるなら砕くだけ。砂と消えたいのなら好きに挑めと、IS二機という増援を齒牙にもかけず言い放った。

「はっ、そうかよ」

そうばやいた一夏の顔には、隠しきれぬ侮蔑の念が現れていた。認めない。お前なんて決して認めるものか、オレの目の前でそんな様を晒してくれるんじゃない、と。

「ああ、その思いは、至極当然のことだろうな」

「ぬかせよ、リビングゲッド、死体のままでうるちよろ動きやがって、
目障りだ」

抜き打ち一発。瞬時に構えたハンドガンで正確に鉄虎に額を狙い撃つ。

「認められないというのであれば、止めてみせろ。

俺は死にたいのだ。死んでやるのではなくてな」

「……チッ」

しかしそれも、鉄虎の握りしめた拳の前に霧散する。弾頭を構成する全ての力がかき消され、素粒子レベルの砂へと還元された。

だが、そんな事象よりも一夏をいら立たせたのは、その拳では無くその言葉。甘んじて受ける死などに意味は無く、足掻いた末の死こそが価値を持つと言い切ったその言葉は、つまるところ懸命に生きることへの肯定だ。

その気持ちを、一夏は痛いほどに理解できていた。それ故に、眼前の鉄虎の様にどうしようもない苛立ちを募らせる。

「落ち着きなさいよ一夏」

加熱する一夏を宥める様に、エリーが手に持つ機関砲内蔵のランズで弾幕を張る。計四門の銃口から吐き出される弾幕は、威力・連射性能ともに並外れたものだが、それでもあの拳の前では何の意味も持たない。

「……………ISというより動く要塞ね」

おまけに装甲強度そのものも、あの重厚な見た目通りの性能を誇っているらしい。拳を避けて着弾してもかすり傷一つ負っていない。

「だな、IS用のハンドガンつつても人間用の対物狙撃銃並みの威力はあるんだぜ。それで傷一つつかないってバグキャラすぎるだろ」

無論、一夏もエリーの援護をただ見ているわけではない。ハンドガンの連射による銃弾のビリヤード、特異な機能など何も無い、技量による全方位銃撃。そんな神業ですら、あの鉄虎には何の痛痒も与えていない。

「
温い」

そんな呟きと同時に、要塞が動き出した。必滅の拳が万象一切を分解しながら突き進む。防御など許さない、回避しか逃れる術は無い。その一撃を前に、さしもの一夏とエリーも顔を青くしながら逃げの一手を打つ。

「糞つたれがあっ!!」

地を蹴りスラスターの推力による側転を披露し、天地逆の状態でも一夏の銃撃の狙いは正確だ。装甲が厚いのならば、狙うは関節の隙間。まずはあの剣呑極まる拳を封じるためにひじ関節の隙間を狙い撃つ。

「甘い」

それでも、そんな小細工を鉄虎は難なく見通し、僅かに腕を引き戻す。それだけで針の穴を通した銃撃はその装甲に弾かれた。

「小細工が、効くと思ったのか」

そして、鉄虎は虚空に拳を振りぬく。傍から見れば何の効果も及ばさない無駄内にしか見えぬそれは、だがしかし、確実に自身へ迫る攻撃を打ち碎いていた。

「効いてくれたって、いいんじゃない？」

エリーの駆るIS、〈ミステリアス・レイディ〉の主武装とも言える、水分子を配合したナノマシンによって意のままに操作し、時には爆弾として機能する特殊武装〈クリア・パッション〉が先の一撃によって、そのナノマシンを破壊され完全に水へと戻されていた。

「言った筈だ。死んではやらないと」

故に、小細工程度でとれる命ではないと、鉄虎は厳かに、そして静かに吼えた。

「それならっ、これでどう？」

あの拳が相互干渉における四つの力を消去するというのなら、そもそも物質など介在していない〈龍咆〉は、あの拳ではかき消せないと判断した鈴が、一夏とエリーが交戦している間にチャージして置いた〈龍咆〉を放つ。

見えざる砲弾が鉄虎に向けて襲いかかり。

「それがどうした」

いともあっさりとその奇襲を避け切った鉄虎が、侮蔑交じりの言葉を吐き出す。俺がこの拳頼りの木偶の坊だと思っているのか、と

言葉にならぬ叫びを周囲に振りまいた。

「それでも、やらないよりましでしょう!」

「ならばやるがいい」

「ああ、やらせてもらうぜえっ!」

「同感!! セシリアちゃんは箒ちゃんを守ってね」

「……わかりましたわ」

それでも負けるものと吠えた鈴を筆頭に、一夏とエリーも屈することなく鉄虎に襲いかかる。

「箒さんは下がって」

そんな中、武器と推進機器の殆どを失ったセシリアが、退避も許されない状況中、唯一生身で立ち尽くす箒の守護に就く。あの鉄虎相手には心もとなさすぎるが、それでも今の箒を守るぐらいはやって見せようと意気込むセシリア。

「だ」

「……箒さん？」

しかしそこで、心ここにあらずと言った感じの箒の様子に気がついた。その視線はしっかりと鉄虎を見据えるものの、まるであれとは違う他の誰かを見ている様な、そんな感じた。

「君は、誰だ」

時同じくして、一夏もまた不可思議な状況に陥っていた。変わら

ず剣呑な拳を振るい続ける鉄虎から逃げ続けながら、一縷の望みをかけて銃撃を加え続ける。飛来する必滅の拳は、正確に自身に迫る攻撃を無に帰し、少しでも手を緩めればその矛先がこちらに向かう。

それでも、それでもだ。

今もまた、真正面に見据える鉄虎に対し、上方から襲いかかる銃弾の雨を発射。それを無造作に掲げた必滅の拳が無に帰す様を睨みつけながら、一夏は吠えた。

「
 テメエ、無いのかよ」

一夏と箒、二人の叫びが重なった。

「
 君は、いったい誰なんだっ!!」
「
 ふざけてんのか、端からこつちを殺す気なんぞ
 ねえんだろっがっ!!」

その叫びに、場にいる全ての者たちが凍結した。箒と一夏の理解不能な叫びに、エリーも、鈴も、セシリアも、相対している筈の鉄虎ですら。

「成程、節穴ではないようだ」

いや、むしろ良く見抜いたという様な、感心の体を見せて鉄虎は動きを止めた。

ああ、確かに己は万象一切砂に還れと殺気を込めている。だがそれは、己にとつての常態。だからこそ、今の鉄虎は殺気を込めていない。

さっきとは、殺す意思とは、立ち塞がる物を明確な敵手として認識し、その上でその物の命を砂に帰すと決める事、少なくとも鉄虎にしてみればそういうことだ。

吹けば飛ぶような儂きものを、どうしてわざわざ殺そうと思えるのか。

そして、同時に思う。ようやく、この小うるさい餓鬼の叫びから解放されると。当人は諦め沈黙しているつもりなのだろうが、鉄虎の奥底でこの餓鬼は今なお叫び続けている。

寒い。

寂しい。

誰か、抱きしめて。

ああ、この身を作った愚者共の誰もが気付かぬこの叫びに、ようやく気付いてくれるものが現れたのかと、鉄虎は認識した。

俺は止まっている。誰かに動かされ続けているから、だからこそ止まりたいと願う。それは間違いなく亡者の思考。死者の祈りだ。

翻ってこいつは、未だ生を諦めきれぬ、停止していない者の思考。生者の祈りだ。

その矛盾。動く亡者の只中に生者が蠢く、相反する矛盾。

そんなものを抱えていては、動きづらいことこの上ないと鉄虎は思う。故に、こんな物は放り捨てたいと常から願っていた。

ならば、即座にこんな茶番劇は終わらせようと、鉄虎はその全力の一端を見せた。

直後、鉄虎の姿が消えた。否、違う。そう見えるほどに素早く動いただけだ。いかに剣呑な能力を備えていようと、基本的にその機体はISだ。

つまりは、他のISが共通してできることを行っても、それは当然のことなのだ。今まで一夏たちが生き伸びていたのは、鉄虎をどうにか懷に潜り込ませなかったためだ。

「
遅い」

瞬時加速。セシリアとの試合において鈴が使ったその高等技能を、鉄虎は難なく使用した。機能では無く技能故に、その行使は問題なく行われ、今まで不動の距離であった鉄虎と一夏の距離が瞬く間に零になる。

「なっ!？」

驚愕の声を断ちきって、必滅の拳が一夏に振るわれる。砂に還る<ラファール・リヴァイブ>の胸部装甲、そのまま一夏の体まで砂に還るその刹那、鉄虎はその拳の機能を停止させる。

ただの鋼鉄で形作られた剛券は、強かに一夏を殴り飛ばし、その意識を断ちきつた。

「一夏っ！！」

「大丈夫よ、バイタルには問題ないわ」

悲痛な声で吹き飛ばされた一夏を見やる鈴と、それでも自分を抑えて冷静に勤めるエリー。そんな二人を、一夏を撃破した鉄虎が無感情に見つめ、突撃を開始する。

「こんのおおっ！！ 止まれえっ！！」

「これは、駄目かな」

半ば半狂乱になりながらも、それでもあきらめずに<龍咆>を撃ち続ける鈴と、表情にこの状況への諦めを滲ませたエリーが機関砲を撃ち続ける。何せ一夏を加えた三人でようやく足止めできていたのだ。頭数が一人減れば制圧力も低くなるという物。

「安心しろ」

そんな呟きを伴って、再び瞬時加速を発動させた鉄虎が二人の懷に潜り込む。

「壁にもならんものをわざわざ壊すほど、俺は酔狂ではない」

鉄虎の拳が、先の光景の焼き直しの様に、鈴とエリーの意識を断ちきる。吹き飛ばされアリーナの内壁に張り付けにされた<甲龍>と<ミステリアス・レイディ>を一顧だにせず、鉄虎は第へと歩み

寄る。

「箒さんはやらせ

きゃあっ!？」

満身創痍の体で、それでもなお箒を守ろうと立ち塞がったセシリアを、無造作な腕の一振りで弾き飛ばし、ついに鉄虎は箒の眼前へとたどり着いた。

「聞こえているのだな、お前は」

その言葉の意味を、箒は正確に理解していた。アリーナに入ってから、ずっと耳に鳴り響く声。ありふれた、何の変哲もないことを求め続けるその声が、耳にこびりついて離れない。

「ああ、聞こえている」

それを無視することはできなかった。ありふれた何の変哲もない日常を望んでやまないその意思是、箒にとっては絶対に無視できないものだ。

箒は、大切に思っているからなくしたいと思い。その声の主は、無くしてしまったから取り戻したいと叫んでいるのだから。

「ならば、お前が進めてく生かして>やれ。
ユレータユニットのノイズ増大。排除する」

エミ

同時、鉄虎の胸部装甲が開き、中に封入されていた特殊容器を排出する。それを箒に向かって放り投げた。本来ならば、それは鉄虎には許可されていない行動だ。

だが、己が矜持のために、これ以上彼女を使うことは我慢できなかった。故に、開発した者たちからはバグとしかとらえられない矜持の発露にて、彼女を己が体から解放したのだ。

「エミュレータユニットの排除により、間もなく機能停止すると判断。自動帰還プログラム起動」

ただそれだけを呟いて、鉄虎は急上昇し空の彼方に消え去った。

「完璧に、見逃されたな」

そう呟く筈の手の中の容器には、機械部品を組み込まれた誰かの脳髓が、衝撃を伝えぬように容器内に充填された液体の中に浮かんでいた。

第七話（後書き）

<あとがき>

うん、どうしてもこの面子があのでゴーレムに勝つ光景が思い浮かばなかった。故にこんな結果です。主人公たちに勝つゴーレムって、この話ぐらい？

そして筈はカレンデバイスならぬシャルロットデバイスを手に入れました。

第八話

「あゝあ、カッコワリイ」

夜の校舎の屋上に、紫煙が漂っていた。一夏の沈鬱な気持ちを吐き出す様に、ふわりふわりと漂っている。

先日あの戦い。あれはつまるところ戦いでも何でもなかった。あの乱入者は一夏たちを敵とすら認識していなかった。敵と認識できるほどの脅威ではなかったから、手心を加えて見逃した。

「完敗、だな」

その二文字以外、今の一夏を表せる言葉はない。筭との勝負は引き分けばかり、筭を巻き込んで一緒に他のチンピラと喧嘩した時は勝ちばかりだった。

つまりは、この敗北こそが織斑一夏という男の人生の中で、最初にして明確な敗北。

「……………これが、負けか」

正直に言つて、無茶苦茶気分が悪い。負けという物がこれほどまでに気分を悪くさせるものだったとは。こんな物をずっと味わって居たのではない。

ああ、だから、だからこそ世の中にいる誰もが勝ちを、勝利を目指して頑張るのだ。敗北を撥ね退け、心地よさを得るために。

「明日から、もっと頑張るとするか」

だから、今はこの沈鬱な気持ちを煙に乗せて全部吐き出そう。負けた、敗北したのは確かだが、ならばあとは勝利するだけではないか。敗北の水底に落ちたのなら、勝利へと上り詰めるだけ。やることは決まっている。迷う要素なんてどこにあるというのか。

決意を固めて煙草を吹かす一夏の顔には、確かに悔しさが混じってはいたが、それでも、その口元には笑みが浮かんでいた。

「落ち込んではいない様ですわね」

そんな一夏の背後から、鈴の鳴る様な声が響く。まるでいつかの焼き直し。違うところを上げるとするならば、それは配役が全く逆ということだろうか。

「当たり前だろ？ 昨日と今日で、もう十二分に落ち込んでたからな」

「残念。せつかくあなたの落ち込んでいる様子を見て笑ってやろうと思いましたのに」

苦笑を洩らし、肩をすくめるセシリアの背後から、新たに二人の人影が加わった。夜の影から豊満な肢体とツインテールが浮かび上がる。

「なんだ？ エリーにウリ坊も来てたのかよ」

「何だって……ずいぶん言い草じゃない」

「ほんとほんと、余裕が無い男の子は嫌われるわよ？」

「そうですね、あなたにはそんなしおらしい様子は似合いませんわ」

「同感、アンタ馬鹿なんだから、馬鹿面晒して笑ってる方が似合ってる」

字面だけ見れば暴言としかとらえられない言葉だが、その裏にあるものは判りやす過ぎるほどに明白で、一夏の口元にもついつい苦笑が張り付いた。

「ひつでえ奴ら」

「アンタに染まったのよ」

「朱に交われれば、ということでしょうか」

誰もが素直じゃないから「落ち込むな」「元氣を出せ」みたいな言葉一つ言いだせない。それでも、言葉ではなく心。セシリアの、鈴の、エリーの心が一夏を元気づけていた。

「ほんとにひつでえ奴らだな、落ち込む暇一つありやしねえ」

そう漏らした一夏に、鈴がやれやれと言った表情で、唯一この場にはいない箒からの伝言を伝えた。

「一夏、箒からの伝言よ。落ち込むなんてそんな殊勝な事、お前には似合わない。気持ちが悪いからそんな真似晒すな、ってね」

「はっ、そうかよ」

そっけない返事。打が鈴の目にはその一言こそが一夏の闘志を燃え上がらせているのに気がついた。直接ではなく伝言であったとしても、やはり箒からの叱咤に腑抜けた様を晒すのは、一夏にとっては最大限に我慢ならないことのようなのだ。

「ほんと、こいつらって馬鹿なんだから」

そう漏らした鈴の表情には寂寥感が浮かぶ。この二人にとって、やはり互いこそが一番特別で、一番心を占めているのだろう。

「そうよねえ、ここにこんなにイイ女が勢ぞろいしてるのに一夏ったら、箒ちゃんにぞっこんすぎるもの」

「癪けど同意するわエリー。こいつらお互いにぞっこんすぎるし」
「あらあら、お二人とも嫉妬ですか？」

「うつさい黙れ」

「まあ、女として気になる男の一番になりたいっていうのは否定しないわよ？」

「ふふっ、可愛らしいですわねお二人とも。 とくにウリ坊

ちゃんか」

「うがっっ！！ 頭撫でんなあっ！！」

「えゝ、だってこのささくれ立った気持ち癒すにはこれが一番なのよ」

「そうそう、お前の頭撫でんのすっごく気持ちいいんだよ」

「アンタもしれっとあたしの頭撫でんじやないわよっ！！」

「はぁ……癒されますわ」

気付けば鈴の頭は一夏も含めた三人がかりで撫でくり回され、整えられていた髪型がすぐにもみくちやにされた。そうして撫でられ続けるのと同時に鈴の、頬も完熟したトマトのように真っ赤になっていく。

「いい加減にせんか貴様らあああっ！！」

咆哮と同時に、その囲みから抜け出した鈴がここに来る時に持ち込んだビニール袋をまさぐる。そこから取り出されたのは一本の缶。ぶっちゃけて言えば缶チューハイだった。

「もう飲む。あんたを元気づけるために持ってきた奴だけどあたしが飲む」

完全に座った目つきで缶を開け、有無を言わず一気飲みしていく鈴。

「ああもつつ！！ 飲まなきゃやってられるかあっ！！」

まあ、もちろん他の面子がそのままというのはありえない。腰をおろして一気飲みを続ける鈴の傍らに腰を下ろし、次々に残りの酒に手を付けていく。

「勿論オレも飲む」

「私もよ」

「私もですわ」

「ふん、この不良集団」

「何言ってるウリ坊、お前もだろうが」

「アンタに毒されたのよ、責任取りなさいよね」

「悪い……オレ、貧乳は趣味じゃない」

「何そんな阿呆なこと心底申し訳なさそうに言ってるのよおおおおっ！！」

「あゝ、やっぱり私たちこうじゃないとねえ」

「ええ、私も随分毒されたみたいですよ」

つい先ほどまで一夏が抱えていたしんみりとした空気など瞬く間

に吹き飛んで、心底騒がしい空気が流れる。一夏が鈴をからかつて、鈴がそれにブチ切れて、エリーとセシリアがそれを楽しそうに眺めている。

「
　　」
　　「 箒はどこに行ったんだ? 」

その宴の最中、不意に一夏が呟いた。いつもつるむ面子の中、唯一いないメンバー。箒の居所を気に駆けるが、大方の予想はついていた。

リーグマツチにおいて襲撃を行った正体不明機、それが自身の胸部から排出し箒に委ねた、人の脳髓が内包されたユニット。あの機体の発言から、学園側でもあのユニットの機能に大方のあたりを付けていた。その下劣非道極まる目的故に、襲撃事件以上の機密レベルで情報管制が敷かれ、今は学園地下の機密ブロックに保管されている。

「…………お姫様のところよ」

「ですが、もうあの方は何の反応も見せない、脳死状態に近いと聞きました」

無論、人道と倫理を侵さない範囲であのユニットの調査を行っている。ISに、機械的に、物理的に接続されていたために、ある意味で調査そのものは楽に行えた。

その結果は、全くの無反応。接続端子を通じて、人間が外界から刺激を受けた際に神経線維に流す電気信号を模した信号を送っても、あの脳髓は何の反応も見せずに、脳波はフラットのままだった。

そのため、学園側は既にこの脳髓が脳死状態にあると判断していた。機械的に脳細胞だけが生かされた人間の残骸。その行いに学園

教師全員が憤慨を漏らし、そんな行為の贄にされた名も知らぬ彼女を悼んだ。

さりとて軽々しく廃棄処分出来るほどの代物ではない。何せ外道の行いとはいえ男性でもISに乗れるかもしれない証拠なのだ。今はまだ、学園の底深くに秘しておくしかできなかった。

そうして保管されたあのユニットは、今なお起動させたままであり、想像に絶する無残を行われた彼女の、ある意味墓標の様な存在になっている。襲撃事件が発生し、その後処理に忙殺されている筈の教師たちですら、激務の合間を縫ってそのユニットの前で、思いの弔いを捧げていた。

一夏たちも、それは同じ思いであつたので、教師たちの許可をもらってそのユニットに弔いを捧げていた。すんなりと許可がもらえたのも、少しでも彼女の魂が癒されるのなら、と思つた学園側の気持ちの表れなのかもしれない。

「そうか……また、あそこにいるのか」

宴で得た笑みを消して、苦虫をかみつぶした表情を見せる一夏。鈴もエリーもセシリアも、あの行為には憤慨を隠せない。

「アイツは、諦めてねえんだろうな」

そう、そんな中、筈だけが彼女が生きていると、言葉にはしなくともユニットを見つめる視線に込めていた。五体を奪われ、脳死に至つた彼女を、それでもまだ生きていると。

「……でもっ！！あの状態よ？」

「流石に脳死判定と診断されている以上、あの方は“死んで”いる

のでしょう」

「そうね…… 箒ちゃんのあれは、思い込みとしか言えないと思う」

口々に否定的な言葉を漏らす三人。箒にはその言葉をすでに伝えているものの、それでも箒は「それは無理だな」と答えるばかり、正直に言ってその箒の姿を、三人は痛々しいとすら思っていた。

「……だよな、オレもあの子はもう死んでいると思うぜ」

一夏にしても、そのこと自体に異論をはさむ気はない。しかし。

「けどよ

オレと箒は違うんだ」

しっかりとした確信を込めて、一夏は言葉を続けた。

「どんなに近くにいてもオレとアイツは他人で、だからこそ視点が違う。見ている物が違うんだ。だから、オレに見えていない物がアイツに見えて、聞こえていたって不思議じゃないだろ」

それは、今更言葉にしくても当たり前すぎる、不変の事実。

「それにアイツ、幻でラリってしまう様な素直な性質じゃねえだろ。捻くれ者だしよ」

誇らしげにそうのたまう一夏。あまりにも自分の事を棚上げにしたその物言いに、三人はそろって苦笑し「お前が言うな」と唱和し

たのだった。

私の目の前に、醜悪な機械に繋がれた脳髓が浮かぶ。

「あの黒甲冑に、進めてく生かしてくやれって言われたけど、どうすればいいんだろうな」

力無い呟きが私の口から漏れる。ああ言われはして、名前も顔も知らぬ君をこうして保護、したのだろうか。これは単に、縛り付ける場所を変えたのではないかという思いがよぎる。

「君は、今も泣いているんだな」

耳を澄ませば、今も君の泣き声が聞こえる。寂しいよ。寒いよ。誰か、抱きしめて、と。

「皆は、君はもう死んでいるって言っけど」

もうこれは死体だ。だからせめてこの子を悼もう。私たちだけでも、この子の魂が安らいでくれることを祈ろう。揃ってみんながそう言っで、でも。

「こんなのじゃ、そんなの受け入れられないよな」

泣いている子を放って、素知らぬふりを決め込んで、それで日常に戻れたと？

「ふざけるな」

何で、何でそんな重苦しい物を背負わなきゃならない。私の日常にそんな物が混じる余分なんて無いんだよ。

「だから、絶対いつか、君をそこから救い出して見せる」

偽善と独善に満ちた、私の宣誓。誰かの死を背負いたくないから、誰かの悲鳴を背負いたくないから、今の日常が崩れてほしくないから誓う、不実の言葉。

それでも、妥協と諦めを抱えて、満足できるほど私の日常は安くないんだ。そんな妥協できる、諦めきれないものに、価値なんてないと思うから。

例えば子供の我儘、現実を知らぬ餓鬼の言葉と言われようと、無くしたくない、穢したくないと強く思うのは、私の心の根幹で、揺ぎ無く根付いている思い。

「今は、こうすることしかできないけれど」

だから、今の私にできるのはこれくらい。脳髓を満たしたユニットに手を回し、自己満足かもしれないけれど、少しでも君の寒さが和らぐようにと、抱きしめた。

暗い。昏い。水底は、今も変わらずにある。
私も、今も変わらず、ずっとここにいます。

「ほ　う　き　？」

それでも、今感じているこの気持ちは、何なのだろうか。

ああ、なんだか、すごく懐かしいな。何だっただろう、この気持ち
ちは。

すごく、安心できて。すごく、安らげるこの気持ちは。

「抱きしめてくれているのは、あなた？」

ああそうだ、暖かい、だ。ここはずっと寒いけれど、今、誰かが
私を抱きしめてくれていると、何も感じない中でも、そう理解でき
た。

これがたとえ幻だったとしても、それでも、今私は寒さを感じて
いない。

「だから、絶対いつか、君をそこから救い出して
見せる」

それも、幻聴なのかもしれないけれど、待っているから、私、あ
なたが来てくれるのを。

私は、今ようやく、この水底の中で、希望という物を感じることができた。

「だから、いつか会おうね、ほつき」

うん、だから今は眠ろう、いつかきつと、ほつきに会えると思うから。

「
素晴らしい」

ああ、何という輝きだろうか。ここまで弄ばれ、嬲られ、人間としての尊厳を地に落とされ、想像を絶する地獄に叩き落とされてもお、君は美しい。

その心が、その思いが、世に存在するどんな宝石よりも美しいと断言できる。自身をこんな境遇に追いやった下劣な父親を憎みもせず、何も無い無色の地獄に突き落とされてもなお、その心は壊れずにある。

「掛け値なしに称賛しよう。君のその心は、その思いは、ああ、なんて美しい」

我が妹と同じように、ありふれた日常こそを希い、そして恋焦がれる。そんな状況にあってもなお、その願いく輝き>は色を失っていない。

「ならば、ああならば、報いなければいけないだろう。君はその輝きで、私を魅せてくれた。ならば、それに見合う報酬ぐらい用意せねばいけないだろうな」

それに、我が妹もそれを願っているだろう。ああ、確かに我が妹の器は大きいとは言えない。しかし、深いのだ。その中にある、日常を、輝きを、決して取りこぼさないように、と。

「君はもう、その中に入っているのだよ。故に誓おう、私と我が妹とで救い出して見せよう、宝石よ」

悲劇のあとだからこそ、その後に相応しいのは問答無用のハッピーエンド。ご都合主義の神様<デウスエクスマキナ>を持ち出してでも、流した涙に相応な輝きを見ないことには、おさまりがつかないだろう。

「幸いにして、私はどうやら世間一般では大天災などと呼ばれているようでね、からくり仕掛けの神様を気取るぐらい造作もないことなのだよ」

友人からは「お前はあまり出しゃばるな、何もかもが無茶苦茶になる」と言われたこの身だが、こんな時ぐらいは全霊で挑んでも構わないだろう。

「何せ、人助けなのだからね」

第八話（後書き）

<あとがき>

水銀の口調って難しいと痛感しました。うん、あんなウザさを良く書き切れると、原作にはほとほと感心しました。そしてこの話における束さんは、うざいけどいい人。いい人だけどうざいを目標にしています。故に今回の決意も善意百パーセントです。

第九話

「何？ この武器の山」

アリーナにうずたかく積まれたコンテナの山。その中にあるのはISの各種武装。送り主は世界各国のIS関連企業であり、しかもそれ全てがただ一人の人物に向けて贈られたものである。

「何って？ オレが使うに決まってるだろ。流石に武装が大口径ハンドガンだけつつうのは火力不足だと思ってよ、世界各国の企業あてにオレが武装を探してるって情報を流したら、一日でこの通りだよ」

そう答える一夏の表情には、先の一戦で無様な敗北を晒したことへの悔しさが滲んでいる。無論それは落ち込むものではなく、その屈辱をばねにして闘志に変える悔しさだった。

「それにしてもいろんな武器があるわねえ」

「えーと？ IS用のクレイモア爆弾に、液体窒素を封入した凍結弾頭、熱伝振動式スパイクを取り付けた特殊チェーンアンカー、真つ当な武器も多いけど、際物の武器も多いな」

「一夏さんにはそれがぴったりでしょくに、……………馬鹿らしい小細工が得意な方ですから」

「ああ、あのシュールストレミングの缶詰を使ったんだっけ？ セシリアとの試合で」

「まあ、世の中にはこんな馬鹿もいるのだと得難い教訓も得られたので、いい体験ではありましたわ」

そんな一夏がここにある多種多様な武器を使って、どんな小細工をしかけるのか、場にいた全員が恐れと興味を混ぜ合わせた表情を見せていた。

「おう、また負けるのは嫌だからな。精々小細工を考えるさ」

そう言った一夏の笑みには、それはもういやらしい笑みが浮かんでいた。

「……………ほんと楽しそうにしてるわね」

「絶対また馬鹿なこと考えてるんだろ」

「しかも一夏の使う機体って拡張領域の多い<ラファール・リヴァイブ>だからね、それだけで取れる戦術の幅が多いもの」

「そこにこの際物武装の数々が加わるわけですか……………」

そこに鈴が、ひとつ重要なことを口にする。いくら際物の武装を使うとはいえ、そういう物をいきなり実戦に使うわけにもいかないだろう。仲間内の模擬戦で事前のテストを行うのは必然。

「ねえ、誰がその際物武装のテスト役になるの？」

そして、そういったテストをするのであれば、対象は一人に絞り込むべきだろう。まずは一対一で使用し、実際の使用感覚を掴んでいく。それは実に当たり前のことであり、実に筋の通った考え方だ。

「セシリア、お願いね」

「エリー、あなたこそが適任ですわよ」

「やっぱりここは一夏と一番長く戦ってきた箒ちゃんの出番よね」

「一夏にちよつかいかけられるのはウリ坊だと、ずっと昔から決まってるんだ」

実に息のあった押し付け合いだった。まともな武器、まともな使用方法、まともな使用者であれば、四人にも否はない。しかしながら、眼前で不敵な笑みを浮かべる一夏にはそのどれもが当てはまらない。

四人の間に電流が走り、誰が一夏の生贄になるかをなすりつけ合う。ここで全員で逃げるといふ発想が無い当たり、結構なお人よしだろう。

そんな四人の足元に転がりこむ、黒光りする円筒形の物体。

「……へ!?」

瞬間、轟音と閃光がまき散らされる。ISのハイパーセンサーですらその轟音と閃光に対し処理能力を飽和させ、一時的に視界と聴覚を封じられる。

「へえ、流石だな。ISにも効くフラッシュグレネードは」

感心の体でそう呟く一夏。押し付け合いに夢中になっていたところによる完璧な不意打ち、こういう物のテストをするならこういう状況はまさにうってつけで、つまりは押し付け合うどころか、早速皆が実験台にさせられたのだ。

「何やっとなじゃあああっ!」

「不意打ちにきまってんだろ。っーかそれ以外にどう見えんだよ」

「ああそうだな、不意打ちだな。というわけで斬る」

真っ先に復帰したのは、常日頃から一夏の奇行に巻き込まれ続けていた鈴と箒だ。＜双天牙月＞と日本刀型のブレードが一夏を挟みこむように襲いかかる。即座にその二つの刃の鏝元を狙い撃った一夏のハンドガンが、斬撃の速度を鈍らせ脱出に成功する。

どうにか脱出に成功した一夏は、次いで先のフラッシュグレネードに酷似した形状に円筒の物体を放り投げる。ただし吐き出したのは炸薬によって加速されたベアリング弾。金属球のシャワーが牽制となつて、追撃を狙おうとしていたエリーとセシリアの機先を削ぐ。

「相変わらず無駄に器用ですわねっ！！ 今日はずあなたの顔面にミサイルとレーザーをぶち込んで差し上げますっ！！」

「私もちよつと鶏冠に來たかなあ」

「おお、怖い怖い」

そして視線を完璧にセシリアとエリーに向けつつ、右腕に装着したヒートスパイクチェーンを鈴に発射する。いくらISが全方位視界を得ているとはいえ、そうまで完全に視線と連動させない攻撃に、鈴の反応が一瞬遅れヒートスパイクチェーンに機体を絡め取られる。ある意味一夏らしい器用な攻撃によって鈴は振り回され、セシリアとエリーに突撃させられる。

「ごめん遊ばせ、ウリ坊ちゃん」

「ごめんねえ、ウリ坊ちゃん」

まあ、そんなことで鈴に遠慮する優しさはこの場にいる誰もが失っている。＜ブルー・ティアーズ＞のミサイルと＜ミステリアス・レイディ＞のランス内蔵四連装機関砲が火を噴き、どでかいモーニングスターと化した鈴を撃ち落とす。

「ぜんっぜんっ気持ちがこもってなああああいつ!!」

「うわぁ、ひでえ。全然容赦ないなお前ら」

完全に自分の所業を棚上げした一夏の声に向かって、その戯けた口を塞ぐように三人からの攻撃が飛来する。

「「お前が言うなっ!!」」

「だってオレあんな形だけの謝罪なんてしないぜ?」

まあ確かに、先の不意打ちや日常の奇行について、一夏が謝ることなんてまずない。その点でいえば、その言葉は嘘を言っていないだろう。

「皆、今日の模擬戦は一夏対皆、という形がいいと思うんだ。

ぶっちゃけリンチしてばころう」

「賛成ですわ」

「うゝん、今日ばかりは箒ちゃんに同意するわ」

「異論? あるわけないでしょ。むしろ断る理由なんてある筈ないじゃない」

箒の意見に一切反論は起こらなかった。箒のブレードが、鈴の<双天牙月>が、セシリアの<スターライトMk?>が、エリーの<ランス<蒼流旋>が、そろって一夏に狙いを定める。

「うわぁ、きつついなあ」

そうばやく一夏の顔には、それでも期待の色が浮かぶ。これ位やってこそ身になるという思いがあるのだろう。

そして始まる一方的な蹂躞劇

ということにはならなかった。

何せ器用さと悪知恵にかけては突出している一夏である。四人の予想通り数々の奇手奇策を使用して、さんざん四人を手こずらせたのだった。

翌日の朝、教室の中には昨日の模擬戦の痛みで顔をしかめ、机に突っ伏している一夏の姿があった。無論そんな一夏の様子に同情の眼差しを向ける者はいない。箒もセシリアも氷のように冷たい視線で一夏を見下していた。

「あゝいてえ、おまえらほんとに遠慮ねえのな」

「お前が手こずらせてくれたからな。昨日だけであれから、ガドリング、ハンドミサイルユニット、パイルバンカー、ショットガン、試作レーザーライフル、大型グレネードキャノン、焼夷榴弾、拳銃の果てに戦艦の主砲を転用した超大型キャノン砲まで持ち出すし」

「じゃあねえだろ、ある奴をまずは使ってみなきゃ」

「しかもそれが奇想天外な使用方法で使われるのですから、たまったものではありませんでしたわ。焼夷榴弾と液体窒素弾頭で水蒸気爆発を起こすわ、発射したミサイルをチェーンで絡め取って無理矢理軌道変更するわ、非常にあなたらしい戦いでしたわ」

「褒めてくれてありがとう」

「ええ、あなたらしいお馬鹿な戦い方でしたわ」

とはいっても、皆が手こずったのは何も奇手奇策のせいばかりではない。入学してからこれまで、ほぼ毎日の様に行われている模擬戦（しかも相手は代表候補生二人に国家代表一人、おまけに三人ともが専用機持ち）、それに加え自主練習も欠かさず行っている。

元から器用で要領のいい一夏だ。今では代表候補生の目から見ても

も一夏の技量はそれなりと言えるものになってきている。勿論第もだ。

しかも天性の煽り上手で他人のリズムを崩すのが抜群にうまい。昔からの幼馴染である鈴ですらいいように言葉であしらわれている現状、他の面子もいい様にリズムを崩されっぱなしだ。

統括すれば、無茶苦茶嫌らしい戦いぶりなのだ、一夏の戦いは。少なくとも最初は一夏対皆の戦いが、まずは貧乳ネタで怒りの矛先が捻じ曲げられた鈴が一夏の側に付き、過日のキスをネタにからかわれたエリーが顔を真っ赤にさせて、言葉攻めで戦闘不能になるくらいには。

「あの時のウリ坊は本気で怖かったぞ」

「ええ、執拗に胸を切り落とそうと突撃を掛けてきましたものね」

「ああ、あれ最高だったな。『その胸よこせ！』ってマジ叫びだったし」

「というかエリーに何を囁いてましたの？ あの後からずっとぼうつとしてましたし」

「別に、大したことは言っていないぜ。あの時の可愛いエリーがもう一度見たいなあって言っただけ」

「「あの時？」」

「それは秘密」

興味心から事の真相を聞き出そうとした二人だったが、それも教室室内で新たに響く声に止められた。

「口を閉じる。今からは授業時間だ」

その言葉の通り、開始のチャイムに僅かのずれも無く教室に入ってきた千冬の、普通の声量だが威厳たっぷりの言葉によって、教室内の喧騒がピタリとやんだ。

その様子を見渡し、少しばかり満足げな感情を目元に乗せた千冬は、一瞬教室の入り口に目をやった後に言葉を発した。

「今日から転校生が一人、このクラスにやってくる。入ってこいボーデヴィツヒ」

教室内の面々が、その言葉に興味心身な視線で入り口を注視する。教室の扉が引かれ、件の人物が入室した。体格は小柄と言っている。刃の輝きを想起させる銀色の髪を腰あたりまで伸ばし、左目は眼帯で覆っている。身に纏う雰囲気は他の生徒と一線を画すほどに硬く、とげとげしいものだ。その銀の髪と相まって、まるでナイフの様だと評せる人物だった。

「自己紹介をしろ、ボーデヴィツヒ」

「了解しました、教官」

「……もうお前の教官ではない。お前は学生で私は教師だからな。呼ぶなら織斑先生と呼べ」

「了解しました。織斑先生」

やや疲れたような表情を見せる千冬。その横を件の転校生　ボーデヴィツヒ　が進みでて、自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

非常に簡潔で、無味乾燥な自己紹介をだ。明らかにそれは他の生徒に対する無関心の表れで、字面だけは自己紹介の体を成していたものの、その言葉は全く自己紹介ではなかった。

「あの……ボーデヴィツヒさん。それだけですか？」
「以上です」

見かねた真耶が言葉を書けるも、ラウラの返答はその気遣いをバツサリ切って捨てる物だった。

直後、教室内を見渡したラウラの視線が一点で止まる。クラス唯一の男子制服の着用者、織斑一夏へと、そのままラウラは一夏の座る席の前にまで歩み寄り、おもむろに腕を振り上げた。

「
貴様がっ」

そのまま勢いよく振り下ろされる腕。無論一夏がそのまま平手打ちを喰らうなどという可愛げがある筈も無く、上体を逸らしてその一撃を避ける。

「……………おいおい、オレ何かしたか？ アンタに」
「認めない。私はお前が教官の弟だなどと認めないっ」

口調は静かでも、はちきれんばかりの怒りを滲ませるラウラに対し、一夏の胸中に去来するのは「ああ、またか」という、嘲りと諦めが混じった物だった。

「……………なるほど、なるほどねえ、お前もそういう類か木偶人形。気持ちが悪いくらいから寄ってくんな」

一夏が吐き出した言葉には、たつぷりの嘲笑と侮蔑が乗っていた。

ふざけた口調でも、いや、だからこそ一夏がラウラを心底そう認識していることが分かる言葉だった。

「貴様あつー！」

激昂するラウラ。一夏の言葉を額面どおり受け取り、且つ自身にとって許せない存在からの言葉は、瞬く間にその顔を朱に染めた。

「教官の栄光を汚した存在がよくもっー！」

対して一夏の表情は冷たい無表情だ。先のラウラの自己紹介と同じく、ラウラに対して何の期待も関心も寄せていない。その一夏の無感情な瞳がラウラを射抜く。

「じゃあお前、どういう存在ならば認められるんだ？」

「な……に……」

「否定をするってことは言い換えれば、認めるための指針がなきゃいけないはずだろ？ だからお前、どういう存在だったら認められるんだよ」

そう嘯きながらも、そんなものの在りはしないと一夏は思っている。これはただの子供の癪癪じみた感情的なものだ。理由？ そんなものは「とにかくこいつが気に入らない」の一言にきまっている。

ともかく先に否定ありきだから、後付けの理屈すら在りはしない。勿論、そう思うに至った背景はあるだろうが、そこで思考停止している馬鹿の言い分だ。これまでの一夏の人生で幾度となく出会った十把一絡げの小物。少なくとも一夏は、現時点のラウラをそう認識していた。

「もう一度言っぜ。寄ってくんない気持ちが悪い。腐って見えるんだ

よお前は」

出会って数分もたっていないにもかかわらず、一夏とラウラの関係は修復不可能なほどに拗れ、一触即発の空気が流れる。

「やはり貴様は……ここでつぶす」

「はっ、やって見せろや」

いまさら言うことではないかもしれないが、今の時間帯はHRの時間である。

「よくもまあ、そこまでべらべらと、

いい度胸だ

糞餓鬼ども」

つまりは、怒れる千冬大明神の目の前で、喧嘩一步手前の空気を展開していたのだ。

千冬の声で停止した二人の頭に、千冬の腕が伸びてその頭を鷲掴みにする。そしてそのまま二人の頭の距離を強制的に零にした。密着する顔と顔、こう書くとどこことなくロマンチックな響きがあるが、先に密着したのは口ではなく額。ゴチン、と盛大な音を鳴らして強制的な頭突きをさせられたラウラと一夏はそろって涙目だ。

「くうっ!?!」

「ぐおっ!?!」

「まあよかろう。糞餓鬼どもの矯正も教師の仕事の内だ」

そう言いながら、千冬はそのまま二人の頭を鷲掴みしながら持ち上げられる。片手だけで人が持ち上がる光景、小柄なラウラはとも

かく、それなりに鍛えられた一夏の体は相応の体重があり、しかも同時に二人を持ち上げている光景にクラスにいる全員が言葉を無くす。

「頭を冷やしてこいっ!!」

二人を持ち上げたまま、千冬は教室の窓の近くに行く。そしてそのまま二人を
窓の外へと放り投げた。

「へっ!?!」

アイアンクローの激痛から解放されたと思ったら、何の足場も無い空中に放り出され、共に間抜けな表情を晒す。まあ、こんなことをされれば誰だって状況の変化に追いつかないだろう。

「………落ちたあああっ!?!」

「馬鹿者、落したんだ」

その表情のまま見えなくなった二人を認識してようやく、クラスにいる全員が驚愕の叫びを発し、千冬がそれを的外れな言葉で訂正する。

「いやいや、何を平然としてるんですか織斑先生っ!!」

「ぎゃあぎゃあやかましいから黙らせてただけでしょう。何か問題でも?」

真耶を泡を繰って千冬の行為を非難するが、千冬態度はどこ吹く風と言った感じで平然としていた。

「大ありですよっ!!」

「何も無いでしょうが、あの二人は専用機持ちだぞ」

「……………あつ」

真耶がそのことによりやく思い至ったと同時に、窓の外から二人が戻ってきた。一夏はくラファール・リヴァイブ>、ラウラは漆黒のISを纏い、精神的に消耗したのか妙に疲れた表情を見せていた。

「……………こんの糞姉貴」

「貴様……………まだ言うか……………」

「専用機があるからって窓の外から人放り落とす奴なんて糞姉貴で十分だろうが」

「…………………………」

流石のラウラも、千冬の行為には少々物申したい気分なのか、一夏の言葉に沈黙しか返さなかった。

「何やってる、さつさと席に戻らんか」

そんな千冬の言葉に二人ができたのは、言葉通りにさつさと席に戻るだけだった。

「では今からISを使つての実技訓練を行うつ!!」

千冬のよく通る声がアリーナに響き、一組と二組の生徒が集結していた。今日からはISを使った本格的な実技訓練ということもあり、一様に緊張した面持ちを見せていた。……………少なからず例外もい

たが。

「実技訓練、ねえ」

「まあ、私たちは既にやりまくっているからな」

「私とウリ坊ちゃんは専用機持ちですから今さらですし」

「一夏と箒も一般生徒なら教えられるぐらいには技量が上がっているしね」

確かに毎日の様に模擬戦を行っている一夏たちにとっては今更な話だろう。それを見越してか千冬が更に言葉を続ける。

「ではまず、専用機持ちに戦闘を実演してもらおうか、余裕もあるみたいだしな」

「どの組み合わせでやるのですか織斑先生？」

「まあ慌てるな、相手がもうすぐやってくる」

その言葉に全員が疑問符を浮かべ、同時にアリーナの中央に件の対戦相手がやってきた。

「準備は万端か、山田先生」

「はい、OKですよ」

一夏と同じくデユノア社製の<ラファール・リヴァイブ>に身を包んだ真耶が、アサルトライフルを構えて闘志を滾らせる。普段の頼りなさげな様子とは違うその様子に、場にいた物が全員面食らった表情を見せる。

「ふむ、そうすると相手は誰にすべきか……織斑！！　ボーデヴィツヒ！！　お前らが揉んでもらえ」

その選択に誰よりも速く不快感を示したのは、指名された当人たちだった。しかし二人ともに二対一という、傍から見れば舐められている様な条件を突きつけられたことに不快感を示しているのではない。仮にもIS学園の教師である。それぐらいを鼻歌交じりに成せる技量はあるだろうと思っている。

不快感を示しているのはその人選。互いに「コイツとは慣れ合いたくない」という思いが、その顔にありありと浮かんでいた。

とはいえそれは千冬の思惑通りである。この二対一の戦闘実演は連携がとれない者たちがどれほど脆いかを鮮明に示すものであり、見るに耐える戦闘を行えるほどの技量の持ち主で、連携が取れない組み合わせが一夏とラウラしかなかったためだ。

ラウラ以外の三人は日夜模擬戦を繰り返しているし、その様子は千冬もある程度目を通してしている。連携をとる上で重要な呼吸の合わせ方などいまさら言うまでも無くできている。

そうなると二人組のうちラウラが真っ先に上がるので、ラウラと一番連携が取れない組み合わせとして一夏が選ばれた。

「マジかよ」

「命令とあれば、否はありません」

「ならばさっさとISを展開して空に上げれっ!!」

千冬の劇に促され、一夏とラウラは不承不承といった感じでISを展開し、空へと急速上昇する。

「足を引っ張るなよ、織斑一夏」

「はっ、知るか」

「あの、そろそろいいですか?」

気弱な声とは裏腹に、真耶は即座にアサルトライフル二挺を展開し銃撃を二人に加える。その射線は二人が散開するのを防ぐような

位置取りで行われ、思う様な回避機動をとらせないための物だ。

「うっわ容赦ねえなあ真耶っち」

「真耶っちでなんですか!？」

「ふん」

相も変わらずふざけた口調のままにシールドを展開し、弾幕を力任せに突破するいくらアサルトライフルの弾幕といっても、IS戦においては牽制が主目的の兵装である。威力的に決め手が欠けるために、こういった力づくの突破は乱暴なようできて実に堅実だ。

「お前せこいな」

「合理的と言え」

そしてラウラはというと、そんな一夏を楯にして悠々と弾幕を抜けていた。そして間合いをとりなおした後、真耶から流れを引き戻すために自機のIS>シュヴァルツエア・レーゲン>に搭載されているワイヤーブレードを射出、真耶の<ラファール・リヴァイブ>を囲むように展開する。

その挙動は実に滑らかで、実に六本のワイヤーブレードがそれぞれ生きた蛇の様に真耶へと襲いかかる。

おまけに、それに合わせる様に一夏がお得意の銃弾ビリヤードで、更に真耶が回避できるための隙間を奪っていく。

「流石ですねっ!! でもっ」

無論その程度で落とせるほど真耶は間抜けではない。自機の進行方向を塞ぐようにして展開するワイヤーブレードに対しハンドグレネードを投擲。その爆風でワイヤーブレードの動きを一瞬鈍らせる。そこに対し瞬時加速を発動。あっさりと遠距離戦の間合いへと引

き離し、即座にスナイパーライフルを展開。速度と精度を兼ね備えた照準の狙撃で、一夏とラウラを寄せ付けない。

「くっ！？ ならばこちらもっ」

ラウラは自機に搭載されているレールカノンで撃ち合いを選択する。電磁加速された団体が真耶の至近を駆け抜けるが、これだけの狙撃戦を展開しておきながら真耶の機動に翳りは無く、射線を見切った最低限の移動でレールカノンを避け切る。

「ちいつ、狙撃はそれほど得意じゃないんだよな」

ぼやく一夏。故に選択した手段はハンドミサイルユニットを展開しての飽和攻撃。向こうの対処能力を超える攻撃を叩きこむことだった。表面のカバーが外れ、その中から多数のマイクロミサイルが白煙を噴出させながら真耶に襲いかかる。

「予想外に連携が取れてますね。いえ、これは単に互いを頼りにしてないだけですか」

つまりは一夏とラウラの両名ともに、手持ちの札の中での最善手を選び取り、結果連携が取れているように見えているだけだ。ラウラは自身の持つ遠距離砲撃戦能力で、一夏はそういうスキルが無いために武装頼りの飽和攻撃。とはいえそれは悪手ではない。方向性の違う二種類の攻撃は結果的に対応の難度を上げていた。

「ですが、そんなものではやられません！！」

スナイパーライフルを収納し、即座にアサルトライフルを展開する。秒に満たない間に行われた武装の切り替えは高速切替くラビッ

ト・スイッチ>と呼ばれる高等技能であり、それを見た一夏の瞳に感心の色が浮かぶ。

「へえ、あそこまで速くできるのか」

そうしている間にも、断続的に弾丸を吐き出すアサルトライフルが一夏の撃ったミサイルを撃ち落とし、ラウラの放ったレールカノンの砲撃は真耶自身の精妙な機動によってすべて避け切られていた。射撃を行いながらも手放すことの無い機動の制御は、まさに教師としての手本に相応しいものだ。その基本的ながらも高レベルの動きを見て、ラウラは射撃戦では埒が明かないと判断。ミサイルの爆炎に紛れて接近を掛ける。

それは一夏も同じ判断　というよりも一夏自身が近・中距離戦を得手としているためだろう。今度はラウラを楯にするような位置取りで真耶に接近を仕掛ける。そして自身が一番得手としている武装であるハンドガンを両手に展開する。

「レスト・イン・ピース　なんてな」

茶目つ気を滲ませながらも一夏はそのままハンドガンを連射する。ラウラの背後で火を噴く二挺の銃口。狙い定めるはラウラ越しに位置する真耶。しかしてその弾丸はラウラに当たることは無く真耶に襲いかかる。あらぬ方向に打ちだされた幾多の銃弾は、空中で弾丸同士衝突し、半数はあらぬ方向に飛んで行き、もう半数は真耶に狙いを定める。

完全な死角からの不意打ち。常道と常識を彼方に置き去りにしたその魔弾。

「　　すごいですねえ、織斑君」

しかしその魔弾は、更なる魔弾に迎撃された。真耶の放つアサルトライフルの弾丸が、一夏の放つ魔弾を迎撃、更にはその矛先をラウラに向けることに成功していた。

「なっ！？ くっっ」

「……嘘だろ？」

「嘘じゃないです。マジですよ織斑君。君のこれちょっと真似したかったんですねえ」

流石にこんな常識外れを常識外れで迎撃されれば、ラウラも反応すらできずに銃撃をともに食らってしまう。救いといえば二度の反射を繰り返し、威力がかなり削られていたことだろうか。

それでも突撃の足が鈍り、隙を晒してしまう。そこでラウラはワイヤーブレードを射出。

「 テメエ！！」

「ふん、役立たずを有効活用してやるだけだ」

ただしその射出先は眼前の麻耶ではなく、後方にいる一夏のクラファール・リヴァイブ。ワイヤーで完全に絡め取られた一夏を、ラウラは真耶の上を抜ける様にして加速する。

「きゃあっ！！」

「ぐおっ！！ 悪いね真耶っち」

絡め取られた一夏がそのまま真耶に対してぶつけられ、それを見たラウラはそのまま真耶も絡め取ろうとする。

「そうはさせません!!」

それより先に真耶の腕がワイヤーブレードを纏めて鷲掴み、絡めて縛ろうとしたラウラを逆に引つ張りこむ。しかしそれでもラウラに起こったのは僅かな体勢のずれ。だがその僅かな隙に真耶はラウラに対して銃撃を放つ。しかもその狙った先は<シュヴァルツェア・レーゲン>のレールカノンの砲口だ。

「しまった!？」

大口径故に大きく穴のあいたそこに放り込まれた弾丸は、レールカノンに大きな爆発を起こし、その爆風でラウラの体が大きく揺さぶられる。

「お返しですボーデヴィツヒさん!!」

「オレは物かつ!？」

そこに真耶が未だワイヤーブレードに絡め取られている一夏をぶつけ、二人諸共に吹き飛ばす。

「二人ともこれから要精進ですよ」

そんな言葉と共に真耶が放り投げたグレネードの大爆発が、一夏とラウラを揃って戦闘不能にしたのだった。

第九話（後書き）

<あとがき>

いやあ、マツキーの人氣も高いけど、ニートの人氣も高いなあ。

そっぴやマツキーはいつ再登場させようかな。今度はマジで殺す氣満々になるけどね。

第十話

IS学園の生徒会室で私は私専属の使用人でもある布仏虚から、あの正体不明機に関する現時点での調査報告を受けていた。

「あの脳髓が収められたユニットに関しては、そもそも分解調査すらできない現状ですので殆ど何もわかっておりませんが、それでもわかっている接続端末の形状からしてフランスのデュノア社製の物が多く使われています。しかし、そのいずれもがデュノア社がライセンス契約を結んで世界各国に流出させている物ですから、追及の手掛かりとはなりませんね」

虚の理知的な輝きを持つ瞳が、メガネのレンズの奥で疲れた様な色を滲ませる。

「脳髓の身元に関しても、何もわかっていないのよね？」

「ええ、脳細胞が一欠けらでも採取できればDNA鑑定ぐらいはできるのですが、教師側からの猛反発が起こってますね」

「使用目的から鑑みて、わかっているのは女性ぐらいか……」

「確か、篠ノ之箒さん……でしたか、あの方だけは彼女が未だ生きているとおっしゃられているんですね」

「そうみたいね。あの時の会話記録を見る限り、あの正体不明機もだからこそ箒ちゃんにあのユニットを託したみたいだし。箒ちゃんがあの子から鮮明に話を聞き出せれば調査も進むとは思っわ」

純粹にあの子を救おうと思っている箒ちゃんに対し、打算的な自分の思考が惨めに感じるが、それでもこれは自分の役目だと言いつける。まあ、箒ちゃんも、自分のこの意思は単なる打算と言っていたけど。自分の目の前で泣かれっぱなしが嫌だから、のどが

打算なのかしら。ものすつごく青臭い感情だと思っけど。

「フフッ」

「どうされました？ お嬢様」

「やっぱり後輩って可愛いものだなあ、とか思っちゃったの」

「可愛い後輩ですか？」

あの子を毎日の様に見舞いに行っている篝ちゃんに、どうしてそこまでするのか尋ねた時の事を思い出して、微かに笑みが漏れた。口では自虐するような言い方だったけど、本人はあれで隠し通したつもりなのかしら。

ウリ坊ちゃんが篝ちゃんの事、カッコ付けたがりの馬鹿、大人ぶってる癖に感情第一で動く奴って言うていたわね。

「それで？ このユニットの情報はIS委員会に上げてはいるのよね」

「ええ、存在を秘匿することは即時可決されたのですが、その後の処遇については紛糾している様です」

「一応国際的な中立を謳ってはいるけどねえ、所詮は各国から派遣された委員によるパワーゲームでしかないし」

「ええ、ですがその中でも欧州の各国家の反応がぎこちないという報告が」

「欧州の？」

「はい、具体的にいえば欧州防衛計画イグニッション・プランの主要参加国の反応が」

「……………それって勿論フランスも入っているわよね」

「お嬢様はあれが、国家レベルでの計画の元に作られた、と？」

ISは女性しか動かせない。この不文律を崩そうとするにはそこいらの非合法組織には荷が勝ちすぎる。国家レベルの財力・技術力

が無ければ難しいだろう。何せ中枢であるISコアが未だ解析不可能な現代のオーパーツだ。

「そう考えるほうが、筋は通ると思う」

「ではあの機体はフランス政府が？」

「でもねえ、このスキヤンダルは大きすぎる。万が一露見すれば確実に政権がひっくり返るわよ」

そう、もしこの一件にどこかの国家が一枚かんでいたとして、こんなハイリスク・ハイリターンの方法をとるだろうか。こんな博打的な手段を選択するほど、今はどこの国家も軍事的に逼迫していないはずだ。

となると、国家レベルの関与だとしても、国家全体では動いていない？ 現場レベルでの暴走？ けどあの正体不明機を見る限り、相応の結果は残しているのは間違いない。非合法研究とはいえどこの国もそのデータを欲しがるはずだ。

「もしかして、対応が決まっていけないのかもしれないわね」

「……先ほど言った国が、ですか？」

「うんそう、この一件に対して、切り捨てるか、それとも抱え込むか……」

「確かに、今現在どの国でもISの登場による女尊男卑問題の対応に苦慮していますからね。それを解決できるかもしれないとなると、どの国も喉から手が出るほどに欲しい筈です」

IS学園はIS委員会と同じく国際的な中立機関ではある。けれども、委員会と同じくそんな建前是有名無実と化している現状、委員会からあのユニットの引き渡し等の要求があれば、こちらに断るための法的根拠はない。

「更識楯無としては、無用な反抗なんてするべきではないとわかってるんだけどね」

漏れ出た言葉は、実に今更なことだった。更識家がこのIS学園に私を送り込み、裏から色々と手をまわしている理由は、学園で巻き起こる諸々の厄介事の累を日本に及ばせないため。

ならば、あのユニットに関しては不干渉が一番だ。たとえあの子が更に辱められることになるうとも、安定を保つための犠牲だと言い切って、氷の仮面を張り付けてそのたまうべきだ。

「わかってる。わかってるんだけどなあ……」

素筋を伸ばし、胸の内の淀んだ物を吐き出すようにそんな言葉を吐き出した。更識楯無としては、確かにそうだ。

けれども、篝ちゃんや、一夏や、ウリ坊ちゃんや、セシリアちゃんの友達である私はどうなんだろうか。

「エリーとしては、いやだなあ」

「ふふっ、エリーですか？ 確かお嬢様が昔好きだった漫画のキャラクターでしたね」

ああ、そういや虚はそのこと知っていたわね。しまった、失敗だったわ。虚の目の前でそんなこと言うなんて。

ああ、なんか私に向ける視線がすごく微笑ましい、というか生温かい気がする。言葉にしくても「大人ぶっていてもまだまだ可愛らしいですね、お嬢様」って視線で言っているわ。

「いいじゃない、楯無って響きよりもエリーって響きの方が好きなんだから」

「いいと思いますよ私は、友達にあだ名で呼ばれるのは至極健全なことだと思います」

そんな生温かい空気の中、私たちは仕事をこなしていく。あのユニットに関するただけでなく、襲撃事件に対する後始末や、それでこつちが混乱してるだろうと甘い期待を抱いて、ちょっかいを掛けてくる連中への対処とか、やるべき事は数多くある。

「
よおエリー、差し入れ持って来たぜ」

そんな中、至極自然に、まるで自分の部屋に入るみたいな気軽さで客がやってきた。その手には瓶とコップが握られている。その瓶はどこからどう見ても酒瓶で、そんなものを平然とこの学園内に持ち込む人物など一人しかいない。

「……ワイン？」

「おう、安酒だけだな。あれやこれやの厄介事がたまってるだろうから、せめてのも心配りって奴だよ」

「ほんと、一夏ってまめよね」

「あつたりまえだろ、オレはどこぞの捻くれ者とは違うのさ」

「ふふっ、まあいいわ、ありがたく頂戴する」

「あの……お二人とも？」

「何？」

「どうしてそう平然と飲酒の事を話し合ってるんですか。お二人ともまだ学生ですよ!!」

私と一夏のノリに虚が堪え切れずに声を荒げる。他の皆だと最早突っ込みすらないから新鮮な感じだ。うん、私相当に毒されてるなあ、一夏に。

「お？ アンタも一緒に飲むかい？」

「あ、それ私も気になるわねえ、虚が酒飲むとどれだけ乱れるのか気になるし」

「わかるわかる、酒飲んで内面さらけ出させるのって面白いんだよな」

「というわけで今日は虚も飲む事、これは更識家当主としての命令よ」

「職権乱用過ぎますお嬢様っ！！」

「職権は乱用してこそでしょ？」

「違いますっ！！」

「じゃあオレもう一つコップを持ってくるわ」

「頼むわねえ、一夏」

「OK任せとけ、ついでにつまみも持ってくるさ」

一夏との馬鹿なノリの会話。でも、だからこそ私の内の溜まった鬱屈とした物を払い落してくれる様な感じがしていた。そういや私って、こんな馬鹿なノリに付き合ってくれる友達って一夏が初めてかもしれない。

更識家って黴臭いとはいえ権威だけはあるし、身近にいたのってそういうことをまず念頭に置いている人ばかりだったし、虚はあくまで主と使用人というスタンスを崩そうとしないし。

あの日、一夏に接触したのは、何かに付け耳目を集める存在になった一夏を護衛するには親しくなっておいた方がいって打算が先だったけど、この人ならありのままの自分を見してくれる、なんて考えがあつたのかもしれない。

うわ……何それ、まるで恋する乙女の思考じゃない。甘ったるすぎて吐き気がしそう。ああでも、考えるまでも無く私の行動ってそれよね！！

「どうしたんですか？ 急に頭を抱えて……」

「何でもないわ、ほんとに何でも無いから」

「ああ、もしかして一夏君のことが気になるんですか？ 御嬢様があそこまで異性の方と親しくされるのは初めてのことですし」

「何言ってるのよ虚、アイツとはただの友達」

「ええ、初めての“ただの”友達ですね」

虚のこっちの内心を見透かすような言葉、絶対わかってて言うてるわよね、この子は。

「虚、今日は絶対飲みなさいよ」

「お断りします」

「当主命令よ」

「主の間違った意見には諫言が必要だと、一使用人として心得ておりますので」

「付き合い悪いなあもつ」

一夏が再び生徒会室に足を踏み入れたのは、虚が今日の分の仕事を終わらせて帰った後だった。去り際に「後はお二人でごゆっくり」と小声で呟いたのを、私の耳は聞き逃さなかった。

「へえ、それであのお嬢さんはいないわけか」

「うん、気を使われちゃった」

「それじゃあ、御厚意に甘えるとしますかね」

そう言つて一夏はにやりと笑い、私の対面に座つてワインのコルク栓を抜く。葡萄の香りが私の鼻腔をくすぐり、紫色の液体がワイングラスに注がれる。

「それで？ 今日は何に対して乾杯するの」

「さてね、何にしようか」

一夏からワインが注がれたグラスを受け取り、乾杯の名目を二人揃つて考える。

「そうだな、あの子の未来に幸あれ、つてのは？」

「あの子……ああ、あの子、ね」

「不満か？」

「まあ、いいんじゃない」

本当に、一夏つたら篝ちゃんのことを一番なんだから。あのユニット あの子の事を気に掛けるのも、篝ちゃんがこだわっているからでしょうに。二人の間にあるのが恋心なんかじゃないってのはわかるけどさ。やっぱりこう、なんか納得いかない。

「 やっぱやめた」

「へ！？」

「今日この時、お前と二人っきりで過ごせることに感謝をこめて、つていうのは？」

何よもう、こっち見てにやにやしちゃってさ。そのわかってるつて言つ感じの表情が気に喰わないわね。

「……どういふ風の吹き回しよ、いきなり意見を変えて」

「別に、ただ俺は鈍感でも間抜けでもないんだよ。目の前で可愛い女に拘ねられりゃあ、意見の一つも変えるよ」

「一夏つて、言葉だけはうまいよね」

「おいおい、オレは嘘なんかつかないつて」

「どうだか、嘘はつかなくても調子のいいことは言いまくるくせに」

そういう甘い言葉を囁けば、すぐに機嫌を直すとか思われるのは癪だし、そう簡単に許してやらないんだから。

「まあとりあえず、乾杯だけでもしようぜ？ 酒持ったまま言い争うつてのは間抜けすぎる」

「……………同感、乾杯だけでもしようか」

互いに苦笑を交わし、ワイングラスを軽くぶつけ合う。チン、と甲高い音がなつて、グラスの中の水面が揺らめいた。

グラスに口を付けて、ワインの香りと味が私の喉を潤した。そうして暫し無言のままワインを飲み交わし、どんどんアルコールが私の体中を駆け巡っていく。

「いい飲みっぷりだな、エリー」

「一夏もね」

「何だよ、まだ拘ねてんのか？ そんな顔も可愛いけどさ、やつぱり笑顔が一番だぜ」

「ふんだ、私は一夏に都合のいい女じゃないわよ」だ」

そう言つて私は更にワインを煽る。もつと酒精が回るようにと、自分のペースを少々無視した飲みっぷりだ。だって、そうしないと、ばれるじゃない。

私の方が年上なのにさ、一夏にはずっとペースを握られっぱなし

だ。しょうも無いプライドだけど、それでも一夏におろおろさせられるんじゃないくて、おろおろさせたいのに。

一夏には可愛い女、じゃなくてイイ女って思われない。私は一夏の付属品でも無くて、一夏も私の付属品じゃない、そういう関係になりたいから。

「なあ、エリー」

「なあに？」

「オレを使え。オレもお前を使うから」

そんな益体も無い思考にとらわれている時、一夏は唐突にそう切り出した。

「どういう……意味かしら」

「何、簡単なことだよ。あの子がこれから何の干渉も受けないとは、端からオレも思っちゃいない。あれだけでかい厄ネタだ、阿呆どもが使い様によっちゃ金の卵になると思っても不思議じゃない。もしくは証拠隠滅の為にあの子を破壊しようって動きもあるかもな」

違うかい？ と表情で訴える一夏。確かに、その程度の事は当事者ならば推測できる事柄だ。特に一夏はこう見えて頭の回転は速い方だから、思い至るのは当たり前か。

「それで？ 何が言いたいわけ」

「この一件 どこまで絡んでる。オレの勘じゃあ、相当大きなところまで絡んでるとみたね」

私はその問いに何も答えられず、ワインを飲み干しつつ沈黙を続けた。

「沈黙は、肯定と受け取ってもいいのか？」

「……………好きにすれば？」

「ククツ、OKそうさせてもらおう。それでここからが本題だが、本当に学園側はあの子を守るのか？」

酒がまわっていてもなお、一夏はその問いを真剣な面持ちで言い切った。その疑問は、この段階まで思い至ったのならば当然のことだろう。何せついさっきまで私自身もその懸念を抱いていたのだから。

「……………守れない、でしょうね」

自らの不甲斐無さを認めるその一言を、私はどうにか胸の奥底から絞り出した。これがもし国家レベルの陰謀ならば、IS学園に、生徒会に、更識家に、私に、あの子を守る力はない。

余計な波風を立てないために、あの子を引き渡すなりなんなりして手打ちにしかねないだろう。しかも虚の報告によれば複数国家にまたがったの陰謀の恐れすらある。そんな状況下であの子を守るなんて、そんな楽観的な言葉なんて言えはしなかった。

「だろうな」

「そういう一夏ならできるって言いたいわけ？」

「馬鹿言え、できるわけねえだろ」

「……………よかった、一夏がそんなこと言う馬鹿じゃなくなってる」

「阿呆ぬかせ、それは馬鹿じゃなくなってる間抜けって言うんだよ」

ならば一夏がこの話を切り出した理由は何だろう。一夏は意味無くこんなことを言う筈がない。私にも無理、一夏にも無理、じゃあ。

「
だからさ、お前がオレを使え。オレもお前を使
う」

それは、私と一夏が力を合わせれば、それを成し遂げられるとい
うことに他ならない。

「お前の方は、いざというとき動けない可能性が高い。かといって
オレの方はそのいざって時がわからない可能性が高い」

「そりゃあそうだけど、それじゃあ一夏が」

「オレの肩書忘れたのかよエリー。オレは世界で唯一のIS男性操
縦者だぜ？」

一夏が口にしたその可能性。それはつまり、一夏という現場レベ
ルでの独断で、あの子に対する干渉を撥ね退けて、学園側は素知ら
ぬ顔をしておけという事。そしてその暴走に対する支援と、事が終
わった後に一夏の肩書を利用してなるべく丸く収めるように交渉し
てほしいってことだ。

「つまり一夏をいい様に使え、ってことかしら？」

「バーカちげえよ、オレもお前も互いにいい様に使うってこと。つ
まりは共犯者ってところだ」

そう言うてにやりと笑う。それは何というか実に様になっていた。
例えて言うなら悪党の笑みだ。悪巧みしていると言った方がいいだ
ろう。

「共犯者、か」

「気に喰わないかい？」

「いいえ、気に入ったわ。そうね、私たちには恋人なんて言う甘い響きじゃなくて、そんな苦い響きの方がいいかもね」

「じゃあ、もう一度乾杯するかい？」

「何にかしら？」

「決まってるんだろ？」

そして空のグラスに再びワインを注ぎいれる。ワイン入りのグラスを眼前に掲げ、私たちはもう一度言葉を揃えて乾杯した。

「俺たちの」

「私たちの」

再び甲高い音色を鳴り響かせるワイングラス。

「」
「悪巧みの成功を願って、乾杯っ」

年頃の甘ったるい関係じゃない、少しばかりの後ろ暗さがある関係。うん、私たちにはこういうのがぴったりのかもしれないわね。

視界いっぱいに広がるのは、まるで黄金の様に輝いている黄昏の砂浜。

「」
「うう、は」

耳に響くのは、寄せては返す漣の音だけ。穏やかで、安らぎを感じるその風景に、私はしばしの間見とれていた。

「綺麗、だな」

そう、ここは綺麗だ。いつまでも輝きを失わない、宝石の輝きのよう。そうだ、ここは時間が止まっている。誰かが感じた刹那の残滓。切り取られた一瞬だ。

そんな中を私は歩き続ける。踏みしめる砂の音と、私の素足を撫でる波の音だけが響く中、私は当ても無く歩き続ける。

視界に映るのは静止しているようで、ずっと変わらない。変化が無い。時間が止まっている。

「……………ラ……………ララ……………」

だからきつと、この世界にいるのは、この世界の主なのだろう。視線の先には波打ち際と戯れながら鼻歌を歌う、白のワンピースに身を纏った私と同年代の少女の姿。くるくると軽やかに回る体に合わせて、彼女の黄褐色の髪がふわりと舞った。

その姿に、見覚えは無い。完全完璧に初対面だ。でも、誰かなんて思う筈がなかった。だから抱く気持ちには、たとえこの瞬間が儚く消える夢だとしても、彼女が笑っているそのことへの喜びだけ。

「初めましてでいいのかな」

「うん、そうだね。初めまして」

彼女は鼻歌を歌うのをやめて、私へと振り返り屈託のない微笑みを見せてくれる。この黄昏にぴったりな、全てを包み込むような暖

かな笑顔。

「会いたかったよ、ほうき」

たどたどしく、私の名前を呼ぶ彼女。言い慣れないのか少しだけイントネーションがおかしかったけど、それがなんだか微笑ましく感じられた。

「ああ、私もだ。えーと……」

そうだった。今の今まで気付かなかったけど、私は救おうとしていた彼女の名前を知らないのだ。

「君の名前、教えてほしいな」

「シャルロット、シャルロット・ブルイユだよ」

今この時初めて知ったその名前を、私は胸の奥深くに刻みつける。始まりは利己的で、打算的でも、私が彼女を救おうとするこの思いは決してあやふやなものじゃないと信じているから、誓いの言葉を改めて彼女に伝える。

「いつか、夢の中じゃなく、現実で君と会っよ」

「うん、楽しみにしてるね」

心底その言葉通りなのだとわかるシャルロットの微笑み。現実ではそんなことすらできない彼女だから、今のこの微笑みを忘れぬように私の心に刻みつける。

「なあ、何かしたいことはあるか？」

「ふえ？」

「だから、何かしたい事。こんな所じゃできる事なんて限られてるだろうけど」

今は無力に過ぎるから、せめて彼女の心を救える何かをしたくなつた。ほんと、今の私って言葉だけだな。心の底に宿る自虐の思いを覆い隠して、できるだけ私は微笑んで彼女の願い事を待った。

「えつとね、じゃあいつしよに座ろ？」

「はい！？」

「だから一緒に座って」

「そんなんでいいのか？」

「それだからいいのっ」

あまりに予想外だけど、そんな簡単なことを断る理由は無いから、私は砂浜に座り込んだ。その横にシャルロットも座り込んで、私の肩に頭を乗せる様にもたれかかる。

そのままずっと、シャルロットは穏やかな表情で私にもたれかかり、黄昏に輝く水面を見つめ続けていた。

「温かいね、ほっきの体」

「そうか？」

「うん、暖かくて、寒さなんか感じないよ？」

「……そうか、それは良かったな」

そんなありふれたことすら、今のシャルロットには望めない物だと、改めて思い知らされる。それでも、今この時だけは、シャルロットが穏やかな気持ちになれているのなら、私がしかめっ面を晒してシャルロットの気持ちに影を差すわけにはいかなかった。

「この風景はね、私が昔お母さんと一緒に遊んだ風景なの」

「思い出の風景ってことか」

「そう、お母さんと一緒に砂浜で遊んで、空がこんなになるまでいっぱい遊んでた」

ああ、やっぱりこれはシャルロットが今も抱き続けている、刹那の輝き。過ぎ去ってしまった宝石なんだ。

手の中から失ってしまったて、もう追いつけなくなってしまった物。今の彼女には、そこへと行くための足すらないのだから。

「……もう一度」

ああそうか、今の彼女には、こんな境遇に追いやった誰かへの恨みなんてものは無いんだ。ただずっと、失ってしまった輝きに恋焦がれているだけだ。この透き通った表情を見れば、そんなことは容易に察せられた。

「……ここで遊びたいなあ」

日常への回帰、それだけがシャルロット・ブルイユの望みなら、それを成し遂げることこそが、彼女を救うということだろう。

「遊べばいい」

だから思わず、そう呟いた。

「え!？」

そんなことすら望めずにいる誰かを、やっぱり放っておける筈がない。やっぱり彼女を救わなきゃ、私も日常に戻れない。誰かを見殺しにしている様な、言いようのない感触を抱えたままじゃ、私も

笑えない。

「いつかきつと、私が“ここ”に連れて行ってやる」

こんな儚い刹那の幻じゃ無く。幻想でも何でもない現実へと、彼女を連れだして見せる。

「ふふっ、楽しみに待ってるね、ほつき」

「ああ、その時は多分馬鹿の一夏や、ウリ坊や、エリーや、セシリアやらが集まってくるから、今の様に静かにはいかないだろうけど」

「ほつきの友達？」

私が言葉にした名前に、シャルロットはあどけない疑問の表情を浮かべる。

「ああ、全員私の友達さ」

「えへへっ、楽しみが増えちゃった」

「そうか、なら頑張らないとな」

「楽しみにしてるよほつき、
これならあそこにも耐えられる」

今のここは、結局のところ夢の中なんだろう。

「そうだよ、ほつきが目覚めちゃえば消えちゃう場所なんだ、ここは」

「本当に、夢の中なのか、ここは」

ああ確かに、この風景は夢の中の幻だからこそその美しさなのだろう。大事に抱えていたシャルロットの思い出だからこそ、輝きを失わない風景。

「だから、抱きしめてよほうき。夢から覚めても、暖かさを失わないように、抱きしめて」

その時初めて、シャルロットの表情に翳りの色が混じった。

「そのぐらい、お安い御用だ」

「ありがと、ほうき」

「言っただろ？ お安い御用だつて。」

寒くないか？」

「うん、暖かいよ」

私はそうして、夢から覚めるまでの間ずっと、シャルロットの体を引き寄せて抱きしめ続けた。

その間ずっと、シャルロットの表情が安らかだったのは、きっと幻ではないと信じたかった。

第十話（後書き）

<あとがき>

やっぱりうちの一夏と楯無はこんな関係が一番しっくりくるな。

甘酸っぱい関係より、一緒に悪巧みしてる方が似合う。

そして篤さんがヒロイン度零過ぎる。まあ、前世の関係上仕方が無いと言えばそうなんだが。

第十一話

自室の中、鏡に映る自分の顔を見つめる。その中で異彩を放つ金色に染まった左の瞳。

生来のも物ではない、自身の性能強化のために施された施術。越界の瞳くヴォーダン・オージェ>と呼ばれる疑似ハイパーセンサー。眼球内に投与されたナノマシンが感覚器官を生成し、それを脳神経と直結することによって反射能力の増大を図る仕組みだ。

兵器として作られ生み出され、その性能を更に強化するために行われた進化の証にして、失敗作の烙印。制御が効かなくなったこの瞳を眼帯で隠し、いつ廃棄処分されるのかと怯えていた日々が、脳裏によぎる。

『さて、どうなるかねあの検体』

『まあ、取れるだけのデータをとって廃棄処分が妥当だろうな』

『そうそう表沙汰にもできんな、あれは』

『……まったく、こここのところの俺の残業は無駄ってか？』

『ばやくなよ、次ので上手くやりやあいってただけだ』

実験室のガラス越しに、私を品評する白衣の研究者たちの声がマイク越しに響く。最早、諦めの感情でしか私を見ていない声。

嫌だった。これまで私の同類が、同じく軍で生み出されていった名前も無い誰かが消えていった。

それはいい。その者たちは、性能が低かったから、失敗作だから消されていったのだ。兵器として生み出された以上、失敗作を保存しておく道理などどこにもない。だから、この目が、金色に輝くこの劣化の証が、自分の瞳だというのが受け入れられない。

「 　　いつの世も、頭だけの馬鹿はいる物だな」

教官の第一声は、そんな言葉だった。失敗作である私への非難ではなく、私を作った研究者たちへの非難。

織斑千冬、ISの操縦に關しての第一人者。とある事情によつてドイツ軍のIS部隊の教官に迎え入れられた、最強の操縦者。自身が手塩にかけるべき人材を探し求め、ドイツ軍の各基地を回っていた彼女は、あるうことが失敗作である私に目を掛けてくれた。

「……………しかし、私は」

「何だ？　失敗作だから私の教えを受ける資格が無いとでもぬかすつもりか？」

「そう……………です……………」

どう足掻いたところで、最早この瞳<烙印>は消せないのだ。だから、最悪の苦痛であっても、私にはそう述べるしかなかった。

「 　　この馬鹿がつ！！」

そんな私に教官は、とてつもない威力を誇るその拳を私の頭に振り下ろした。痛かった。すごく痛かった。はつきり言つて私のこれまでの経験の中で一番痛かったと断言できる。

「まあいい、貴様程度の馬鹿ならこちらも楽だ」

「……………あの」

「まだ何かぬかすつもりか？　もしや貴様、その程度の馬鹿さ加減で私の手を煩わせるつもりでいるのか？　生憎と身内の極大の馬鹿

がいてな、貴様程度に煩わしさなど感じるものか」

「は……はあ……」

そんな感じで、わけのわからぬ間に私は教官の教え子にされてしまった。とはいえ、その時は何がかわからぬままに事態が進行していて、正直言つてあのときどんな気持ちだったか、未だに思い出せない。

ただ、私を教え子にしようとする教官を諫める軍高官たちを、その怜悯な声で論破してくれた光景だけは、今も鮮明に胸の内にある。

「ふん、どうにもああいふ手合いは虫唾が走るな」

そうして、私は遺伝子操作体の失敗作から、あの織斑千冬の子という立場になった。批判・やつかみは腐るほどに出てきたが、それを教官は一顧だにせず、私が教え子だという立場を崩さなかった。

「さて、これからは私がしごいてやるからな。覚悟しておけ」

その時になつてようやく私は、教官に、拾い上げて頂いたのだと実感した。失敗作となつて廃棄処分決定を聞くことに怯える日々から、厳しくはあれど、一流のIS操縦者になるため邁進する日々。未来に怯えることなく、未来に希望を持てるようになった日々の始まり。

失敗作如きが、などという嘲りもあった。けれども教官の薫陶を受け、結果を残していけばそれも自然と収まった。そうなると最早私の立場はゆるぎないものとなつた。専用機も支給され、多分にプロパガンダの意味もあるだろうが、少佐の地位にまで上り詰め、ドイツ国内における精鋭IS部隊の部隊長に任ぜられた。

幸福、幸せ、そうとしか言いようがないこの結果。自分自身が持

て余しそうになるほどのこの結果は、全て教官が与えてくれた物だった。

最早、ラウラ・ボーデヴィツヒにとって、織斑千冬が存在はその心の中心に根付くものとなっていた。

そんな教官との日々も、長くは続かなかった。もとより教官は、あくまで特別扱いとしてドイツ軍に招聘された身だ。私がある程度の成長を見せればその役目も終わる。

教官がドイツから去り、日本のIS学園で教鞭をとる。部下からそう聞かされた私は、常の自制心など吹き飛んで教官に詰め寄った。

「教官！！ 日本に帰られるというのは本当ですかっ！！」

それが筋の通った現実だとしても、それでも私は、その現実をやすやすとは受け入れられなかった。心の奥底で、もしかしたら教官はまだドイツに残ってくれるかもしれないという、砂糖菓子のように甘い妄想を抱いていた。

「まあ、まだまだ完璧とは言えんがな、それなりになった……お前は」

そう言っつて、無造作に私の頭を撫でてくれた教官の手は、暖かかったが、どこか冷たかった。まるでもうそこまで来ている別れの様に。

「それに、これ以上家を放っておくわけにもいかんからな。お前以上にかかる奴もいることだし」

苦笑する教官。口調では面倒だと言っているが、その裏にあったのは違っていたように思う。その誰かへと向ける感情は、きっと教官にとってすごく大切なもので、だからそのためにも、教官は日本へと帰らなければいけないのだろう。

それは、私には向けられていない。

教官は、私と“それ”を天秤にかけた。

それは、私より

しかし私は、教官の教え子なのだ。別れるその時まで泣き顔を晒すわけにはいかなかった。涙をこらえ、嗚咽を飲み込み、心を固める。

「ふふつ、一端の顔をするようになったじゃないか」

「……私は、教官の教え子ですから」

「そうか　これからも頑張れ」

「はいっ！！　今日までのご指導と受けた恩は、一生忘れませんっ
！！」

そうして交わした敬礼が、私と教官の、個人的な別れの儀式だった。堪え切れず滲んだ涙を、教官は見ないふりをしてくれた。その時は、それで一応、気持ちの整理がついたのだ。

転機は、それからしばらくたった後に全世界を駆け巡った一つのニュースだった。

世界で唯一、ISを起動することのできる男性が見つかったのだ。それがどこの馬の骨ともしれぬ奴ならば、私は別にどうでもよかった。

織斑一夏

よりもよってそれが、世界唯一の男性操縦者の名前だった。あの教官の弟。あの人にとっての一番。ニュース番組で映し出されるその顔写真を見るたびに、胸の奥が微かに痛んだ。

ズキリ、と日を追う事に強くなっているそれを持て余しているうちに、件の織斑一夏に対する身辺調査も行われていた。

彼のブリュンヒルデの弟という形ばかりの身辺調査ではなく、趣味・嗜好・能力の全てを含めた本格的な調査。何故彼だけが男性でありながらISを起動することができるのか、あわよくばドイツに引き込むための方法を模索するためにも、その調査は微に入り細に入り行われた。

「これが、教官のつ……」

お飾りとはいえ、ドイツ軍の特殊部隊隊長に据えられている私は相応の権限を持っているので、その調査報告書を難なく手に入れることができた。

副官のクラリッサから手渡された書類の束。その拍子に映し出された顔写真から既に、日本人でありながら髪をけばけばしい金色に染め、軽薄な表情を晒していた。

それだけでもう、この男への不信感は募っていく。そうして書類をめくっていき、この男のこれまでの来歴に目を通していった。それらに目を通したうえで、コイツへの評価を付けるならば、屑、としか言えない。日本での法に触れながらの飲酒・喫煙は当たり前。喧嘩、乱闘騒ぎを起こすのは日常茶飯事、補導回数も両手両足の指の数では収まりが効かないほどだ。

「これが……コイツが……教官の……」

こんな救いような屑が、教官の大切な存在なのか！？あの人にああまで気に掛けられながらも、それでもこんな非行を繰り返すコイツが許せなかった。

しかも、教官がドイツに来るきっかけとなったあの事件。コイツが誘拐されたせいで教官はIS世界大会＜モンド・グロツソ＞の二連覇という偉業を断念せざるを得なかった。

わかっている。それがただの言いがかりだというぐらいは。そもそも教官がドイツ軍に招聘されたのはこの事件においてドイツ軍が助力し、教官がその恩義を返すためにその誘いを受け入れたのだから、この事件こそが私と教官を繋げた一因だ。だからこそ、私がこの事に対して何かを言うのは筋違いもいいところだ。

教官に大切に思われ気に掛けられて、非行を繰り返して教官に迷惑を掛け、そして、私と教官が出会った原因。

「……………くそっ、なんなのだこの気持ち」

わからない。私はどうしたいのだろうか。それでもわかっていることはただ一つ。

この男が、織斑一夏が、教官の弟という名の寄生虫であることだけだ。これ以上この男をのさばらせておけば、また教官の未来に厄介事を引き込むかもしれない。

だから、軍上層部からIS学園へと転入するように指示されたのは、渡りに船としか言いようがなかった。この目で直接あの男を見定め、正真の屑に間違いないのなら、いかなる手段も辞さない覚悟を決めた。

「あの時は喧嘩両成敗としたがな、
これは私の落ち度、か」

そうしてIS学園に転入した初日。織斑一夏と言葉を交わし、下劣な物言いと気配に激昂し、同時にこの男はやはり教官に害悪しかもたらさないと判断した。

しかし数日たったある日の放課後、私は放送で職員室に呼び出された。呼び出されていた先で待っていたのは教官で、隣接している小さな会議室で二人きりになった途端、おもむろに教官はそう口にした。私を責めている様にも、自分自身を責めているようにも感じられる、そんな言葉を。

「ああ、あの愚弟の言い分は筋が通っている。今のお前は木偶人形だ」

その時、時間が停止した。教官はますます意味のわからない言葉を口にする。あの男の支離滅裂な言葉に同調した教官が、本当に今、現実に存在しているのか疑わしくなるほどに。

「教……官……」

「だから、これはお前への宿題だ。アイツの言葉の意味をよく考える。そして答えを出せ、誰のものでもない、ラウラ・ボーデヴィツヒとしての答えを」

それがいかなる答えでも、お前自身の答えなら私は受け入れてやる。それだけを言い残し、教官は去っていった。

もとより私と論じる気はなかったのだろうか、それだけを伝えるべきとする様な態度に、足元が喪失したかのような錯覚に陥った。地面を踏みしめている感覚がしない。

どうして、教官がそんなことをいうのですか。

私はただ、教官の為に

やはり私は、あの男より

その後自分がどういう行動をしていたのか、それは全く記憶に残っていない。

とにかく、その場から離れたかった。当ても無く学園の中をさまよい続け、歩き続けた。私は拒絶されたのだろうか、私は結局

瞬間、身を切るような冷気が襲った。

自失していた思考だからこそ、それに対しては体が思考を占拠した。生物としての生存本能が反射的に体を突き動かし、太ももに巻き付けていたナイフホルダーから愛用のナイフを引き抜く。そして

そのまま冷気の元へとナイフを突き出した。

突き出される刃。順手で握りしめたそれは、最大速度で疾走し、冷気の源、その喉元へと迫った。

「シィッ！！」

「はあっ！！」

だがその刃の腹を茶色の何かが激突し、その切っ先を逸らす。乾いた音を鳴らして空を切る刃をかくぐり、冷気の源　敵手の拳が私の顔面に迫る。私の初撃を逸らした者は木刀で、その流れのまま両手で握りしめた木刀の柄尻を私の顔面に振り下ろしてくる。

私はそのカウンターをナイフが逸らされた勢いを利用し、そのまま右前方へと進んで回避。視界の左側には無防備を晒している敵の左わき腹。そこへと左腕での肘打ちを見舞う。

相手は木刀を振り下ろした死に体で、今更木刀を引き戻しての防御は間に合わず、振り下ろしの為右足を踏み込んだ状態。回避も防御もままならないはず。

「　させるかあっ！！」

そこで敵手のとった手段は迎撃。とは言っても左足を脱力させこちらへと倒れこむ様な変速のタックルだ。威力は望むべくも無く、ただ自身の左肩を柔らかくこちらに押し当てる様な攻撃とすらいえない攻撃。

だが、そうすることによって肘打ちの威力を殺して窮地を退けてみせた。そのまま彼私の体格差　特に私の体は同年代の者と見比べても小柄だ　を利用して私を弾き飛ばし、不利な状況にあった間合いをリセットした。

人気のない校舎裏手の林の中、篠ノ之箒とラウラ・ボーデヴィツとは向かい合う。得物はそれぞれ木刀とナイフ。間合いの面では箒の優勢であり、スピードの面では箒が手にする木刀が愛用の鉄芯入りの特注品ということもあり、ラウラが有利であった。

「　　しいっ！！」

短い呼気と共にラウラが再び動く。低く這う様な疾走で剣士の弱点とも言える足元へナイフを走らせる。横薙ぎに振るわれる銀光一閃。

それに対し箒は未だ正眼に木刀を抱えたまま。いきなりの奇襲。そこから続く意味不明の戦闘。だがしかし生来の負けず嫌いの気質は「それでも負けるのだけは勘弁ならん」と闘志を過熱させ、思考を研ぎ澄まさせていた。

どうしてこうなったのかの解明は後回しにし、箒の思考はこの状況下における最善手を模索する。

導き出した手段は、右足の前方への踏み込み。何の変哲も無い、しかし現状においては遅きに失する一手。無論、そんな愚行を箒が犯すべくも無く、常の摺り足以上にその一步は大地を、その表面の砂利を爪先で抉り取る。飛び散る飛礫は丁度ラウラの顔面に飛来し、その視界を塞ぎ、勢いを削いだ。

もらった！！

ラウラの得ていたスピードという優勢は既に無くなり、対して箒は右足を踏み込み体勢は十分。踏み込みと同時に振り上げていた木刀は、今まさに振り下ろされる。

唸りを上げる剛剣が直下にいるラウラの無防備な背中へと迫る。

丸みを帯びて刃筋の滑る可能性がある頭頂部を避け、狙うはラウラの右肩。その一撃で骨を砕き、ナイフを振るわせない様にするためだ。

実に手慣れた、一夏に巻き込まれ潜り抜けてきた幾多の乱闘の経験が成せる的確な選択だ。故に骨の一、二本砕くことにも躊躇は無く、今は医療技術も進歩しているのだから骨折程度すぐ治るだろうという意思の元、その一撃は間違いなく箒の本気だった。

その箒の思惑を打ち砕いたのは、無手であるラウラの左手。初めから兵士となるべく生み出された遺伝子操作による高性能な肉体に加え、誇張なく人生すべてを修練に捧げたラウラの身体性能は、その可憐で小柄な体格に反して、まさに常人離れした物だ。

「な……にいつ!？」

故に左腕一本で自身の体を九十度方向転換する無茶も罷り通る。大地に掌打を喰らわせて、その反動による離脱を成したラウラはすぐさま跳ね起きる。まるで猫のようにしなやかに体勢を整え、箒が木刀を振り下ろした隙を突く刺突を放つ。

「……………」

「ふんっ!! 喧嘩を売るのなら囃してみせろっ!!」

自失による忘我の状態で幽鬼のように刃を振るい続けるラウラを、箒は苦々しい表情を浮かべながら迎撃し続ける。

別段箒は売られた喧嘩を買うこと自体に否は無い性質だが、それは相手の意思が明確であってこそ。こんな意思なき喧嘩を売られては、喧嘩を売られたその事実よりも、その様にこそ苛立ちを感じる。

「ああもつつ、萎えるんだよっ!!」

まるで一夏が言う様な台詞を口にしながら、箒はどうかラウラの連撃を捌いていく。

とはいえ場所が悪すぎた。二人が戦っている場所は林の中で、お世辞にも剣が振りやすい場所とは言えない。乱立する木々が剣筋を制限し、このような状況下において重要な小回りとスピードはラウラが優れている。

軍人としての修練を収めてきているだけあって、ラウラの格闘戦の技量は並外れている。特に室内での近距離格闘戦などは特殊部隊の軍人にとっては必須の物だ。それを応用しての小回りを重視したラウラの猛攻は、箒にとって厄介すぎる物となっている。

頬や四肢に次々とできる赤い筋。かすり傷とはいえず、こうまで続けばいつかは致命の一撃を喰らいかねない。しかし、こんな状況下において一か八かの特攻などもってのほか。カウンターをとられて自滅するのが落ちだ。

(…………やるしか、ないか?)

今日この時箒がここにいた目的。それを思い返し、それこそが起死回生の一手になるだろうかと思ひ、忘我故に研ぎ澄まされ続けているラウラの猛攻がその思考を後押しした。

箒は左手を木刀の柄から手放し、手近に生えていた樹木の枝先をつまむ。そのまましなせラウラが突撃を仕掛けてきたと同時にその枝先を手放した。解放された枝先は、高速で元に戻ろうとしてラウラの視界を遮るコースをとった。ラウラはそれを頭を捻り回避するも、その一瞬の停滞を突いて箒は大きく飛びのいた。

「まあちようどいい、貴様で試してやる」

そう言つて箒は木刀を眼前に掲げ、意識を研ぎ澄ませる。

いつもなら模擬戦に明け暮れる筈の放課後、箒がここにいたのはまず、一夏がいきなり真耶に教えを請いに行くと言いだしたのが切欠だった。

「まあ、戦い方が似ているみたいだし？　ちよつくら美人教師といけない個人授業でもしに行くわ」

そののたまつて去つていった一夏。宙ぶらりんになつた放課後の予定をどう潰そうかと模索した時に、ならばこそ自分も独自に修練しようと思ひ立つた。そしてその課題として選んだのが、とある古流剣術の技だった。

篠ノ之箒という少女は、自他ともに認める剣術馬鹿だ。とはいつても強くなること自体が目的ではなく、古流の技を習得することにこそ充足を感じる少々変わり者ではある。

故に時間が空けばどこかの道場に出稽古に赴いたり。両親や千冬の伝手を頼りに武芸者に師事を乞うたりしていた。

（　　宗次郎さんほどにできるとは思わんが、いや、これこそが雑念だっ！！）

そんな毎日の中で出会つた一人の剣士。この時勢にありながらも剣に生き剣の為の人生を送り、剣そのものとまで謳われた一人の剣

鬼。老齡にありながらも、その剣腕は人後に絶するほどであり、あの千冬ですら現状で引き分けがやっとという人物がいた。

しかも、箒にとつては幸運というべきだろうか、その人物は自身の流派の秘奥について他者に教えることに一切の頓着を見せず、むしろ喜び勇んでその技の数々を教えてくれた。

この時勢、剣を学ぶ者の大半がISの為の剣技しか学ばず、僕の技もこのまま消え行くのみかと思っていました。が、それでも正直の、生身の人間が扱う剣技に目を向けてくれるあなたの様な人物がいてくれたことは、素直に嬉しいと感じますよ。

剣を持った時とは似ても似つかない優男の笑顔を浮かべ、その武芸者は親身になって箒に手ほどきをしたのだった。

無論、学業の合間を縫つての事、その全てを習得するには未だ至っていない。故に箒は今日この時をそのための修練に当てることにしたのだ。

まずは彼が得意としていた技を、その階だけでも掴んで見せようと意気込んで、そのために必要な精神を研ぎ澄ませていた。

アイツはアイツで前に進んでいるのだから、私も前に進んで見せる。

なぜならば、その技に必要なのは肉体の技量ではなく、余分の一切が無い精神であるのだから。ただ只管に「斬る」という意思のみを刃に、切っ先に込める。

斬れないなどとは思わない。思つては駄目だ。なぜならこ

の一刀は必ず斬るのだから、斬れない道理などどこにもない。

状況としては、修行僧の精神統一に近いのだろう。只管に余分と余白を無くし、精神を一つの意思で染め上げて刃と成す。自己暗示、そう呼ぶのが適切なのかもしれない。

「梵天王魔王自在大自在、除其衰患令得安穩、諸余怨敵皆悉摧滅」

更に深く自己を変革し研ぎ澄まさせるための祝詞を唱え、いよいよもって身も凍るほどの　ラウラですら反射的に戦闘態勢に移行したほどの殺気を、斬気を切っ先に込める。

その気配に押され、ラウラが反射的に飛びさがる。忘我故にその反応は正しく、そしてまったくの無意味だった。

「石上神道流、首飛ばしの颯風

　　蠅声！！」

横薙ぎに振るわれる箒の木刀。ただでさえ開いていた間合いに加え、この瞬間においてはラウラが飛びさがっているが故に、完全にその切っ先は届かず空を切る。これまでラウラの猛攻を捌いていたのと同じ人物の行動だとは思えない、かけ離れた愚行の一撃。

「　　ぐあっ！？」

だがその瞬間、ラウラの首筋から赤い血飛沫が舞った。まるでそう、横薙ぎの一撃がラウラの首筋を襲ったかのように、ラウラの首筋の頸動脈が切り裂かれていた。

普通ならそのまま即死しかねないほどに深い傷だったが、ラウラが専用機持ちだったことが幸いした。自動的にISの操縦者保護機能が働き、止血を施し応急処置を行った。

石上神道流、首飛ばしの颯風

蠅声

彼の武芸者の得意とする技であり、届かぬ筈の一撃を届かせたその技の正体とは、殺気や斬気、つまりは相手を害する意思による攻撃である。

本来は剣先に凝縮した攻撃意思により、相手を疎ませ体勢を崩す技である。諸般の流派に謳われる気当たりなどに代表される物の剣技版と言えいいだろうか。

しかし、彼の人物がこの技を振るう際はそれだけに留まらず、実際に対象を「斬る」ことすら可能にしている。

別段それは何か異質な力を使っているということではない。例えば暗示を掛けて、ただの鉛筆を焼けた火箸と認識させれば、ただの鉛筆に触れただけで人間の体は火傷の症状を負う。

それと同じように、常識離れた量を凝縮した殺気と斬気で、対象の体に「斬られた」と誤認させるのだ。そうしてその幻覚の後を体に追わせ、触れずに切るという芸当を成し遂げる。

この技において重要なのは、敵手の、身体の間隙ではなく精神の間隙を突く事。心の乱れこそがこの技を仕掛ける好機なのだ。

故に今のラウラなど、この技を前にしては隙だらけというほかない。忘我し反射的に暴れる獣に等しいのだから。

「……………あ、ヤバ」

とはいえ箒に、マジで首を切り落とすつもりはなく、未だ習得に至らぬ技、致命的な隙を晒させれば恩の字ぐらいにしか考えていなかった。

そもそもラウラが箒に襲いかかったのも、この技の修練の為に研ぎ澄ませていた殺気に、ラウラが過剰反応してしまったのが原因である。完全に箒が悪いとは言えないが、この現状に至ったのは半分以上箒のせいでもあった。

首筋を鮮血で濡らし、一時的な貧血で気を失うラウラを目の前にして、途方に暮れる表情を浮かべる箒。

「……………とりあえず保健室に運ぶか」

あんまりこの技は使わないようにしようと思いながら、箒はラウラを抱えて保健室へと向かったのだった。

第十一話（後書き）

<あとがき>

首飛ばしの颶風って、今の筈にはぴったりの技だと思う。何せ筈の中身はあれだからして、いつかはあれを使うから、その時にこれを使ったらいろいろと洒落にならないよなあ、という電波を受信したのさ（爆

後シャルの名字に関しては、あれは母方の名字で、デュノア家は戸籍上引き取られていないためです。

第十二話

箒との戦闘で気を失い、ラウラは保健室にて寝かされていた。首筋には包帯が巻かれていたが、幸いにして箒の放った蠅声の特性、殺気による暗示での切断は細胞レベルで分たれており、損傷した細胞という物が無かった、つまりは細胞同士の結合が暗示によって力を無くしていたので、適切な処置を施せば翌日には回復する程度だった。

「……つたく箒の馬鹿」

そしてそんなラウラに付き添うのは箒ではなく、何故か鈴だった。勿論箒も保健室にいることはいるのだが、今は養護教諭に傷の手当てをしてもらっている。

「何が餓鬼の相手は得意だろ？ よっ」

実に不機嫌そうな鈴の愚痴が響く。箒に電話でそう言われていきなり呼びつけられたのだから、愚痴の一つも出るのは仕方がない。

「そう言われてもな、コイツの相手はお前が一番適任な気がしただけだ」

「どうしてよ箒」

「だって精神年齢でいえばお前も餓鬼だろ」

「殴るぞこら」

「……とまあ冗談はさておいて、どうにもコイツが心底餓鬼っぽく感じたからな、お前の方が上手くあしらえそうな気がしただけだ」

そう言っただけで箒は絆創膏まみれの顔に疲れた様な表情を浮かべて、

未だベッドの上で眠り続けるラウラを見つめた。

「あゝ、そっぴやこの子、あつていきなり一夏に喧嘩吹っかけたんだっけ？」

「まあな、一夏の馬鹿は自分の妄想を現実に投影している阿呆だと思っっているみたいけど」

「箒は違ふの？」

「……………なんていうか、コイツに襲いかかれた時に、餓鬼の癪癢みたいだと感じたんだ」

それがあの時箒の抱いた印象だった。我を忘れて襲いかかるその様はまるで、親に見捨てられて自暴自棄になる子供の様だと、あの時は迎撃するので手一杯だったが、今思い返してみるとそういった印象を抱いたのだ。

「餓鬼の相手なんて面倒くさくてやってられるか」

「それであたしを呼び出したってわけ？」

「その通り」

「ねえ、本気で殴つていい？」

「いいわけ無いだろ」

そう言いつつ箒はすぐさま踵を返して保健室から去っていく。鈴が静止の声を掛ける間もなく黒髪のポニーテールが廊下に消え、後に残されたのは鈴とラウラだけ。

「……………まったく、本当にどうすりゃあいいつてのよっ」

箒を引き留めようとした腕も対象が居なくなってしまうえば、所在無げに彷徨っただけで、やがて鈴の愚痴と共に力無く降ろされた。

鈴としては、又聞きではあるがラウラの転入初日における経緯を

把握しているため、だいたいはあるがラウラという少女が一夏に
対してどういう感情を抱いているのかはある程度想像している。

勿論、一夏がそういった感情を抱いている者に対し、どのような
感情を抱くかも長い付き合いだからわかり切っている。

水と油。そう形容したほうがいいかもしれない。しかも一夏の方
も相当にイラついているようだ。本当ならば、さつき箒が述べた様
な事は先に一夏が気付く筈だろう。他者に対する機微という点では
一夏は箒より上だ。

「はあ……あいつ等は厄介事ばかり起こさないと気が済まないんじ
やないかしら」

溜息をつきつつ、鈴は未だ眠りこけるラウラの寝顔を見つめる。

どうにも聞く所によると、この少女はかつて千冬の教え子であつた
らしい。

「
ううつ」

その時、閉じられていたラウラの瞼が開いた。茫洋とした瞳がこ
ちらを見据え、未だ鮮明に目覚めていないのか気の抜けた言葉が漏
れる。

「……………ここは？」

「保健室。アンタいきなり箒に襲いかかったんだって？」

「襲い、かかる？」

「はあ、それも覚えていないってわけ？」

ベッドの上で上半身を起こし、鈴の言葉を復唱するもその響きに
現実感はない。どうやらラウラはその事を覚えていないらしく。事
実を突きつけても釈然としないような表情を浮かべている。

「……私は……教官に……」

気が抜けている。鈴の瞳には今のラウラがそうとしか映らなかった。動くためのエネルギーが無くなっている。

そんなラウラの様子を見て、鈴は再び嘆息する。こんな姿を見せられては「眼覚めたから、もういいわね」と言えなかった。ものの見事に箒の良い様に踊らされている。端的に言えばほっとけない。

「何かあったの？ 錯乱して箒に襲いかかるぐらいの何かが」

「私は、間違ったことはしていないはずだ……なのに」

ラウラの口にする言葉は、今一要領を得ない断片的なものだ。これでは助言の一つも言えはしない。

「ねえ、アンタどうして一夏のことが嫌いなのか」

仕方がなく鈴は、最初から話を聞きだすことにした。とはいってもそれは鈴自身がラウラの事を理解するのではなく、ラウラが自身自身の事を思い返すためだ。

「決まっている。教官に害しか及ぼさないからだ」

そうなると箒に負けたのはよかったのかもしれない。文字通り血が抜けて頭が冷えたのだろうか、鈴がラウラの話から抱いていた印象とは真逆の、実に素直な様子でラウラは口を開いてくれた。

「教官って、千冬さん？」

「そうだ……今の私があるのは教官のおかげだからな」

「けど、千冬さんが教官だと厳しかったんじゃないの？」

「ああ、教官の拳骨はすごく痛かった」

その時の事を思い返したのか、少しだけ顔を顰めるラウラに、鈴はおかしさと親しみを感じて笑みを浮かべる。

「わかるわかる……すつごく痛いわよね、あれは」

「お前もあれを味わったことがあるのか？」

「そりゃもう何回も、腐れ縁の奴がいろいろと事件巻き起こすせいでね」

「連帯責任というわけか、当然のことだな」

「そうよね、厄介事起こした奴を止められなかったってことだもの」

「当たり前だ、何もしなかったということは、何もできなかったという事。無能の証だ」

「うわあ、それだったらあたしは無能ってこと？」

「かもしれない」

そう言ったラウラの顔には、微かな、それでも鈴が認識している中では初めての笑みが浮かんだ。

「けどねえ、あいつ等は本当に止めても止まらないからなあ」

「そうなのか………むう」

「どしたの？」

「いや………今更なことだが、お前誰だ？」

つい先ほどラウラの事を気が抜けていると評した鈴だったが、今度は鈴の体から盛大に気が抜けた。具体的にいえば座っていた安物のパイプ椅子をひっくり返して、そのまま盛大にずっこける位には。

「あ………あんたねえ………」

「す、すまんっ。………確か、ウリ・ボーだったか？」

そして更なるラウラの追撃に、どうにか立ち上がろうとしていた鈴は、再び盛大にずっこけた。

「なんじゃそりやあああつ！！ あたしはこの機動で戦士なアニメの登場キャラクターよッ！！ つーかうり坊じゃねえっ！！」

咆哮一閃。保健室に響き渡る大音量、しかもしつかりとラウラの肩を掴んだ上での至近距離からの大音量だ。思わずラウラは耳を押さえ、その暴威を何とかこらえる。

「ぐあ……み、耳が」

「いいっ？ あたしの名前は決してウリ坊じゃないからねっ！！ あたしの名前は凰鈴音！！ ファ・ン・リ・ン・イ・ンよっ！！」

「わ、わかったから耳元で叫ぶなっ！！ 鼓膜が破れるからっ！！」
「じゃあ復唱っ！！ あたしの名前はっ！！」

「凰……凰鈴音だっ！！」

ラウラの口から放たれた自分のちゃんとした名前にようやく鈴も平静を取り戻し、荒くなった呼吸を整えながら再び椅子に腰を下ろした。

「うつ、まだ耳ががんする」

「うつさい、自業自得よ」

「うつ……」

確かに名前を間違えて読んだのは悪いのだが、それでもこの仕打ちには納得いかないとラウラは鈴に視線で訴える。しかし、鈴がその程度の叱責で自分の意見を変える筈も無く、逆に「文句あるの！！」と視線で訴え返していた。

「はあ、一夏と箒の馬鹿がウリ坊ウリ坊連呼しまくるからこうなのよ」

「……織斑、一夏」

ある意味和気あいあいとしていった室内の空気が、鈴がふいに漏らした「一夏」で霧散した。ラウラの顔には急速に陰しさが宿っていく。それは未だラウラが織斑一夏という個人に反感を抱いている証だった。

「ねえ、アンター夏のことどう思ってる？」

暴れたせいで少し乱れた髪を乱暴な手櫛で整えながら、鈴はラウラに問いかけた。

「嫌いだ。認められん。あんな教官に害悪しかもたらさん奴など認められるか」

それに対するラウラの答えははっきりとしていた。未だ顔を合わせて一週間もたっていない。そうそう認識は変わらないだろう。

「私は、間違ったことはしていない。教官の為にも、アイツは認められないっ！」

ラウラ・ボーデヴィツヒという少女の思考は、どうしてもその一点に帰結する。誰がどう見たところで、ラウラが教官　織斑千冬の事を尊敬していることは間違いなく、故に素行不良の極み傍目にはそうとしか見えないのだろう　である一夏を排斥しようとする。

中学時代に鈴もよく出会った手合いの思考パターンだ。だが、そ

れでもラウラがそういった手合いと決定的に違う点があった。

そういう手合いは、自分の好きな物が自分の妄想通りで無いからこそ一夏に敵意を示した。要は餓鬼が思い通りにいかない現実に当たり散らし喚いているだけだ。

しかしラウラの思考は、どうにも違う。ほとんど同じではあるが、これではまるで子供が親に褒めてもらいたくて空回りしたかのようだ。

「ねえ、もしかしてそのことで千冬さんに怒られてもした？」

その一言が、ラウラの精神を決壊させた。一粒、また一粒と、ラウラの左目から雫が滴る。

「……教官に……今のお前は……木偶人形だ……って」

自身の口からそう漏らせば、ラウラの涙が一層流れ出た。だがしかし、鈴の脳裏には疑念がよぎった。確かに織斑千冬という人物は自身にも、そして他者にも厳しい人格をしている。それでも、こんな少女に対しここまでその心を決る様な事を言うだろうか。

「ほんとにそれだけ？」

「え？」

「本当に千冬さんはそれだけしか言わなかった？」

ならば、例え心決る一言だったとしても、ラウラ・ボーデヴィツヒという一人の少女の為にも、その言葉を言わなければいけないかったとしたら？ そう考えた方が筋は通る。

「あの時は……最初に……あの男の言葉の方が筋が通っているって言われて……それから……自分自身で考えろって言われた」

考える。その一言を聞いた時、鈴の中でパズルのピースがはまるような感覚がした。

「ああ、成程」

「何が、成程なんだ……？」

「ねえ、アンタは千冬さんのことどう思ってる？」

「それは、IS操縦者だけじゃなくて、一人の人間として尊敬できる人だ」

鈴の質問にラウラは淀みなく答える。その様子を見て、鈴は自分の考えに対し更なる確信を抱く。まるで我が事のように、誇らしげに答えるラウラ。未だ鈴はラウラと千冬の詳しいいきさつを知らないが、きつと厳しいながらも充実した時間を送っていたのだろう。

「ねえラウラ、アンタはいつ千冬さんと出会ったの？」

「……どうしてそこまで聞くんだ？」

「いいから答えなさいよ」

「……昔教官は我がドイツ軍に招かれていてな、私はその時目を掛けてもらって、親身になって鍛え上げてくれたんだ。教官と出会わなかったらきつと、私は失敗作として処分されていただろうな」

「失敗作って……また剣呑な響きね」

「それはそうだろう、私は軍の計画で生み出された遺伝子強化試験体だからな」

「……うわっちゃー」

遺伝子強化試験体。言葉の響きだけでラウラがどのような半生を送ってきたか明白だ。きつと親など、普通の家族の触れ合いなど無かったのだろう。

そんな中で現れた織斑千冬という人物は、きつと、ラウラにとっ

て家族並みの好意を抱いた人物に違いない。母親、そう言い表わしてもいいのかもしれない。

だとすれば、ラウラ・ボーデヴィツヒが織斑一夏に抱く敵意とはとどのつまり。

「ラウラ、多分ね」

「どうした、凰？」

「千冬さんはね、きつとアンタが“どうしたいか”を聞きたいんだと思う」

「……どうしたいか？」

「うん、どうしたいか。アンタがどうあるべきかじゃなくて、何をしたいのか、どうしたいのか」

「……何を、したいのか」

「ぶつちやけて言つて、アンタが抱えている中で今一番大きな欲求は何かってことよ。ああ勿論、織斑一夏を排斥すべきだ、

なんてのは筋違いもいいところよ。それはあくまでアンタの中じゃ千冬さんの為にしたい事でしょ？ 多分それは千冬さんにしてみせれば『大きなお世話だこの馬鹿者。いつから貴様は私より偉くなった』ってところでしょね。だからアンタは、誰かに迷惑を掛けるかもしれないとかそんな考えは置いといて、自分の中の一歩大きな欲求を見つけ出すべきだと思うわよ？」

きつと千冬は、ラウラの心の奥底の欲求を見抜いているのだろう。だからこそ、自分自身で考えと言ったのだ。今のラウラはその欲求に教官の為、という蓋をしてその欲求に目を向けていない。何せ今日初めて会話した鈴でさえ、ラウラの抱えている欲求。一夏への敵意の裏にある物がわかったのだ。千冬もきつとそれがわかった上で考えと言ったに違いなかった。

「……………わからない」

けれど、当のラウラにしてみればその至極簡単な問いかけはとてつもない難問だったようだ。霧の中に迷い込んだような、不安げな表情を浮かべていた。

「そつか、わかんないか」

「ああ、やりたいことなど、今まで考えたこと無い」

「だったらちようどいいんじゃない？」

「え？」

「ここつてIS学園。かなり毛色は違っけど一応学校よ？ アンタずっと軍隊で生活してたでしょ？」

「あ、ああ……」

「だったら友達と馬鹿騒ぎしたり、ときには喧嘩したりしたらいいのよ。学校つて、そういうことできる場所だからね」

「友達と……そんなもの、私にはいない」

ああ、実に予想通りの展開だな、と鈴は心中で苦笑した。話で聞いたり、国元が収集した情報だとラウラは「ドイツの冷水」と呼ばれるほどの成績優秀にして冷静酷薄ということだったが、一皮むけばただの年相応の少女と変わらなかった。

「馬っ鹿ねえ、アンタ」

「むっ、どういう意味だ」

「ここまで親身になって相談に乗ってあげた奴がいるのに、そいつは友達じゃないってわけ？」

「……………え、鳳？」

「それ禁止！！ 友達をそんな堅っ苦しい呼び方しちゃダメ、鈴でいいわよ“ラウラ”」

ようやくここにきて、ラウラは惚けた表情に理解の色を見せた。

「えっと、鈴……でいいのか？」

「勿論！！ 後ついでに言うておくけど、ウリ坊は絶対禁止だからね。どんなに仲良くなってもそれで呼んだら怒るわよ」

「わ、わかったっ」

「ならばよしっ」

そういつて鈴は滌刺とした笑顔を見せ、それに対しラウラは申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「すまないな鈴。色々世話になりっぱな

きゃんっ!？」

ラウラの言葉を断ちきつたのは、鈴の指先、正確に言えばデコピ
ンだ。ラウラの白磁の様な肌に包まれた額に赤い斑点が浮かび上
がり、ラウラの左目に涙が滲む。

「な、何をするんだ鈴!？」

「シャラップッ!! そういうときはすまないじゃないでしょ？
友達同士なら、ありがとうよ!!」

「

「どうしたの、何か文句ある？」

険しい表情を浮かべる鈴にあっけにとられるラウラだったが、そ
れでも、次第にその表情を赤く染めていく。軍隊の任務とかそん
な形式ばったものではない、人同士のつながりで起こる至極当たり
前の行為。それを恥ずかしがりながらも、どうにか口にする。

「

あ、ありがとう」

それを見て、鈴の表情には満足げな笑みが現れる。同時に、自分が一夏と箒に出会った時の事を思い出し懐かしい気持ちに浸り、そして、自分とラウラだけじゃなく、いつかラウラと一夏も仲良くなれる事を祈ったのだった。

そして保健室を抜けだした箒はというと、ここ最近の日課となっているシャルロットが眠る場所へと見舞いに行っていた。いつもの様に、カード式の学生証をドアのロックに通し、指紋認証と虹彩認証、そして千冬から伝えられた16ケタの暗証番号を入力して、本来ならば一般生徒には入室不可能な学園の機密ブロックへと足を踏み入れる。

「しかし、よくもまあそこまでいけた物だ」

同時に、先程の戦闘の顛末を思い出す。石上神道流・首飛ばしの颯風 蠅声。いかに致命傷は負わないだろうとはいえ、人体の中でも有数の急所である首に対して攻撃を仕掛けることに、何の躊躇も持たなかった自分がいた。事実、頸動脈を切り裂くほどの深手を負わせながら、それに対する罪悪感などほとんど抱かなかった。

斬首、首を刎ねる

まるでそれが、自身にとっての当然であるかのような、必然であるかのような。

馬鹿馬鹿しい。ふいによぎる鮮明な妄想を振り払い、箒はシャル

ロットの待つ部屋へと足を進める。

別に斬首という行為に対し、どのような合致を己が見せようがそんなものはどうでもいいと、箒は誰よりもまず自身に念押しした。

「 よお、また彼女のところか? 」

だからだろう、前にいる一夏に対し、その存在を一夏から声を掛けてもらうまで気付かなかった。

不覚を一夏に晒してしまった事を自覚し、箒の顔が屈辱に歪む。よりにもよってこいつにか、とその表情が鮮明に物語る。

「 …… ああそうだよ、今の私にはそれぐらいしかできんからな 」

「せめて彼女を慰められるように傍に居たいってか? 相変わらず内側の奴には甘いね、お前も 」

「悪いが、それが 」

「別にい、まるで足繁く女の所に通う男みてえだなと思ったただけだよ 」

「やかましい、じゃあ何か? 今の貴様は間男か? 」

「はっ、寝取りなんざ趣味じゃねえっての 」

「まあいい、それよりお前、ここでなにしてたんだ? 」

「いや何、保険掛けに来たんだよ 」

「保険? …………… ああ 」

すぐさま箒は、一夏の言った「保険」という言葉の意味に思い至る。何せここは地下深くで、この奥に繋がる通路はここしかない。無理やりぶち破るうにもそれはISの火力でも難しい行為だ。

つまりはそういうことなのだろう。

「ありがとう、と言ってやろうか」

「はっ、馬鹿言え、女喰いもんにしてこそそそやる奴の思い通りにいかせてたまるかよ。これはオレの為だ」

「ああそっかい」

「ああそつだよ。それと糞姉貴から伝言だ」

「伝言？」

「学園側は委員会の意向に従うが、あまり無体な命令だと勤労意欲が落ちて機材の管理が甘くなるかもな、だとよ」

「そうか、それは仕方がないな」

「だろ？」

そうして箒と一夏は、互いにニヤリと笑みを交わす。その言葉の裏側の意味をしっかりと理解したからだ。ある意味それは、箒にとって百万の援軍に等しい言葉だった。

「じゃあ、せいぜいがんばれや箒」

「ああ、お前もな、一夏」

そうして一夏は箒とすれ違い、歩き去っていく。その背に対し箒は何も言わない。礼すらも。それはきつと一夏に対する侮辱だから。恰好を付けたいのなら、存分に付けさせてやるべきだと沈黙を貫き通す。

「ほんと、一夏の奴は馬鹿だよ」

苦笑し、シャルロットが眠るユニットの近くに腰を下ろした箒は、そのまま背中を預けて瞼を閉じる。

あの黄昏が夢ならば、再びここで夢を見ればあそこに行けるかもしれないと思っただからだ。

そうして再び訪れた黄昏の浜辺。

箒の姿を見つけたシャルロットはすぐに柔らかな笑顔を浮かべ、
箒の元に駆け寄ってきた。

「また来てくれたんだ。ほうき」

「ああ、シャルロットに会いに来たよ」

「ふふっ、ありがと」

嬉しさを体中で表現して、シャルロットは箒に抱きつく。それは
人恋しさの表れで、だからこそ箒もそれをじっと受け入れる。

「えっと、迷惑じゃないかな、ほうき」

「迷惑だなんて思わないよ、シャルロットがそうしたいのならそう
すればいいさ」

そういつて、箒はシャルロットの黄褐色の髪を優しく撫でていく。
いつもの様に仏頂面であったが、それでもその手つきには慈しみが
込められていた。

「……フフッ」

「どうした？ シャルロット」

「なんだか今日のほうきは嬉しそうだな、って」

「そうか？」

「うん、何か良いことがあったの？」

「そうだな、いいことは、あったかもしれな」

「じゃあ今日は、それを聞かせてほしいな。ううん、それだけじゃ
無くてほうきの事とか、ほうきの友達の事とかいっぱい聞かせてよ」

「……しょうがないな、わかったよ」

そうして算は前と同じように、黄昏の浜辺で二人一緒に腰をおろして、とりとめも無い話に花を咲かせたのだった。

第十二話（後書き）

<あとがき>

……やっぱリルネ山の系譜は主役になれないのだろうか。現状な
んだか篤が主役ばい気がする。

そして露骨にギロチンフラグがたったけど能力はどうしようか、
原作通りに時間操作にするべきか……。

第十三話

「セシリア！！ 遊びに行くわよっ！！」

日曜日の朝。爽やかな日差しが差し込む中で優雅にまどろんでいたセシリアの平穩は、ウリ坊の突撃によって無残にも打ち砕かれた。勢いよく開け放たれたドアからは当然の様に鈴のツインテールがなびき、何がそんなに嬉しいのか実に澀刺とした笑顔を見せていた。

「……………とりあえずぶち抜きますわよ」

ルームメイトから突き刺さる視線の痛みには耐えながら、セシリアはレーザーライフルの銃口を鈴に突きつけた。天蓋付きの豪華なベッドのシートから突き出るレーザーライフル。想像するだになかなかシユールな光景である。

「セシリアって低血圧？」

「……………（無言で引き金を引こうとする）」

「O K O K、落ち着きなさいよ」

「それで？ 要件は何かしらウリ坊」

「ちゃんすら無くなった！？」

「いいではないですか。今度から私も箒やあの馬鹿の様にあなたのことウリ坊と呼び捨てにしますわ」

「よくないわよ！！」

「私はいいですわ。それで朝から何の用ですのウリ坊」

今度はレーザーライフルの銃口の代わりに、寝ぼけ眼と額の井桁

を張り付けた不機嫌そのもののセシリアの顔がひょっこりと出てきた。

「だから言ってるじゃない、遊びに行こうって」

「……何か約束してましたかしら？」

「うんにゃ、何もしてないよ？」

「風穴開けてもいいかしら？」

「駄目にきまつてるじゃない」

「あなたと箒と一夏、実に似た物同士ですわね」

「何処がよ、あたしあいつらみたいに馬鹿じゃないし」

「……………はあ、とにかく朝食をとったら連絡入れますわ」

「うん、待ってるからねえー！！」

そうしてウリ坊は去り、セシリアの精神には深い深い突撃の傷跡が残っていた。何が悲しくて休日の朝っぱらからこんなにも精神的に披露しなくてはいけないのかと頂垂れ、重さを感じる体を引きずってベッドから這い出る。

「……………本当に、騒がしい子ですこと」

とりあえず今日はウリ坊をいじくって憂さ晴らしをしようと固く決意を固め、セシリアはきつと騒がしくなるであろう今日一日を想像して苦笑を浮かべるのだった。

そうして食堂で朝食をとり、再び鈴の元へとやってきたセシリアが目にしたのは、当然のことながら元氣澆刺としている鈴と、慣れないスカートを着て気恥ずかしさに頬を赤く染めている銀髪兔、も

とい。

「ちょっと、何そんなに縮こまってんのよラウラ」

「いや、こんなにひらひらした服着せられて恥ずかしくないはず無いだろうがっ!!」

「じゃあぁしい!! 年頃の女の子が休日遊ぶのに学生服着ちゃ駄目でしょうがっ!!」

「何故だ、着慣れている学生服で充分だろうに」

「アンタねえ、それって終わり過ぎな発言よ?」

「そ、そうか?」

「あゝあ、せっかく仲良くなった友達の為に自分の服貸してあげたのに……しかも結構お気に入りなの」

「……………す、すまっ、じゃなかった、ありがとう」

「よしっ」

実に微笑ましい、普通と言っていいやり取りを鈴と交わす、ラウラ・ボーデヴィツヒという少女がそこにいた。実に普通の、何処にでもありそうな友達同士の会話だからこそ、セシリアの困惑は最高潮に高まっていた。

あれ? この子って誰?

ラウラ・ボーデヴィツヒという少女とはセシリアの中では、転入初日に初対面の男子生徒に平手打ちをかますほどに世間一般の常識から外れている少女だ。セシリアも当然一夏や筈から話を聞いてラウラの大体の状況を知ってはいるが、だからこそ目の前のこの光景にすさまじいギャップを感じていた。

俺達三人の中で一番出鱈目なのあのウリ坊だろ。

アイツは「友達百人できるかな」を実際にやりかねないほどだぞ。

そういえば以前、箒と一夏が鈴の事をそのように評していたことをセシリアは思い出していた。曰く、人たらし。曰く、一流フラグ建築士（ただし友情限定）。実際中学生のころにはモテモテだったらしい、友達としてだが。

「……………よくよく考えれば私も一日でウリ坊の事を気にいってしましたわ」

振り返ってみればセシリア自身もそのフラグ建築能力に絡め取られていた。恐るべしウリ坊、代表候補生を一日で絡め取るとは。というか現状、ウリ坊に何がしかの危害を加えようとした場合、まずはセシリアにラウラ、楯無、一夏という専用機持ちが敵に回りかねない。何気に人脈的に恐ろしいことになっている鈴であった。

「ゴホン！ 私を放っておくとはいいい度胸ですわねウリ坊」
「あゝ、ごめんごめん。……ラウラに構ってばかりで妬いた？」

頭を掻きながら一応謝って見せる鈴だったが、少し間をおけばそのような戯言を吐き出した。それも実に小憎たらしいドヤ顔で、だ。ああ、あの二人はきつとこんな気持ちを抱いたのだらうと、セシリアは右手を鈴の眼前に持って行きながらそう考えた。そしてやるべき事はただ一つ。

「きゃんっ！？ 何すんのよっ！！」

「え？ 何を言っているのかしらこのウリ坊は、そんな言葉を口に

すればこうなるのは当然でしょう」

更にセシリアは怒り顔の鈴の頬へと手を伸ばし、指でつまんでこねくり回す。無に無二と音を立てそうなぐらいに形の変わる鈴の顔とその柔らかな感触に、実にご満悦というふうな表情を浮かべるセシリア。

「ほひよふおふふえるふゃー!!」

「ああもつ可愛いわねウリ坊は」

傍目から見ても心底いやがっているのがわかる鈴と、心底楽しそうに頬をこねくり回し続けるセシリア。しかし、それは対人関係の経験が希薄なラウラにとっては、わけのわからない光景にしか映らなかったらしい。

「わからん……この二人は仲がいい、のか？」

ラウラにとって、少なくとも鈴は好意に値する人物だ。言葉を交わしたのはついこの間の保健室が初めての事だが、それでもああまで親身に語りかけてくれたのは嬉しいとは感じられた。

これまでのラウラの対人関係は、その全てが戦闘能力に関わるものだった。まずそもそもが、自分自身が強さのみを求められて生み出され、強くなるために訓練だけの人生を過ごし、強くなるために自らの瞳に手を加えられ、強くなることができなかったから失敗作の烙印を押され、敬愛する織斑千冬によって強くなれた。

故に、一切強さと関わりの無い対人関係　友達　は鈴が初めてだった。いくら同じ年だとはいえ、これまでの経験の中に友達付き合い合いの一切が無いラウラにとっては、こういった状況にすらどう

反応すべきかわからない。他の誰かであれば笑って受け流す程度の出来事にも、その少ない経験からどうするべきかを必死に考えてきた。

セシリアは笑っているけど、鈴は、嫌がっているのかな？

友達が嫌がっているのなら、えっと、止めるべきなんだろう。

そういう間柄ができたことを大事にしろ、と鈴の後に保健室に見舞いに来た千冬は言った。

今のお前に足りないもので、今のお前に必要なものだ。そういった物は軍人云々以前に、人として必要なものだ。お前の様な者を生み出した奴らはそこがわかっていない。兵器は機能を100%発揮することはできても、そこから先へは到達できん。“強くなれる”のは人間だけだからな。

ラウラ自身としては鈴とどう接するべきか、未だに定まっていな。暗中模索という言葉がぴったりだろう。だからこそ、大事にしろと言われたことに従って、拙くともしっかりと自分の意思を口にした。

「
そ、そこまでにしておけ」

おずおずと、暗がりに怯えながら進むような面持ちで、ラウラは未だに鈴の顔をいじり続けているセシリアに告げる。

「はい？」

「……………だって、鈴が嫌がっている」

そう告げた途端、セシリアと鈴が固まった。頬を抓り抓られながら惚けた表情を見せて二人は静止し、ラウラはそれを見て、まさか自分は間違ったことを言ったのだろつかと不安げな表情を見せる。

直後、セシリアの指先が鈴の頬から離れ、ようやく言語の自由を取り戻した鈴は、今度は自分で自分の頬を抓り、これが現実かを確かめた。

「痛い……夢じゃない」

「ねえウリ坊、あなた本当に何もしてませんか？　ついこの間とは別人ですよ」

「もしかしたら箒に首斬られて性格変わったのかも」

「……………一体何をどうしたらそういうことに繋がるんですの？」

依存と言える程に敬愛している人物から自分を否定されて錯乱状態に陥って、箒（剣術馬鹿）の剣気に当てられて戦闘を仕掛けてその結果頸動脈を切り裂かれた、とは少々どころかなり説明しづらかった。

「まあ、以前よりはいい感じなのでしょうけど」

「うん、そう思うわ……………というかすごく嬉しい」

「何故にマジ泣き！？　ウリ坊どうしたのっ！！」

そしてそのぱっちりとした瞳から大粒の涙を流し始める鈴。何せこれまでの人生において、鈴の立ち位置はずっとからかわれる側だった。弄られ役が板に付いていたと言っている。

勿論それは愛情の裏返し。子供がいつい行為を持つ相手に素直に慣れないそれと同じ。全員がツン状態だったわけだ。何せその筆

頭が一夏と筈。どちらも素直とはかけ離れた捻くれ者である。

そこに現れたラウラは、鈴の人生においてデレ状態で接した初めての人物。そりゃあもう、感極まって泣くのも当たり前だった。

「り、鈴っ！？ どうしたんだ、何か気に障る事でもいったのか？」

勿論そんな心境をラウラに察しろというのは無理な話である。自分のせいで泣かしたのかと勘違いし、困惑の表情を浮かべながら鈴に詰め寄る。

「違うの。これ嬉し涙だから気にしないで というかアンタ可愛すぎる」

詰め寄ってくれたのならば好都合、と言わんばかりに鈴の両腕がしつかりとラウラの体を抱きしめる。……余計にラウラの困惑は深くなるばかりだが。

「え……鈴！？」

「ああもう、アンタ本当にいい子よね、 嫁にしたい」

「……………はい？」

「いい加減に現実に戻還しなさいなウリ坊」

「ふぎゃんっ！？」

歡喜で茹だりまくっている鈴の頭に振り下ろされるセシリアの手刀。結構な音を響かして奇行に走り続ける鈴を強制停止させ、密着している二人を引きはがす。

名残惜しそうですらある表情を浮かべながらも鈴はラウラから離れ、ラウラもまた、安堵しているのか名残惜しいのか判別がつかない微妙な表情を浮かべていた。

なんかそうなるとセシリアがまるで悪者の様であり、意味不明の

罪悪感を感じながらセシリアは本題を切り出した。

「それで？　今日はいったいどうするつもりですの」

「うーん、そうだよねえ。とりあえずショッピングモールでラウラの私服買いましょっか」

「ボーデヴィツヒさんの？」

セシリアがそう口にした後、横合いからか細い声が聞こえてきた。

「……………ラ、ラウラで、いい」

いやもうほんとにこの子はいつたい誰なんだと、セシリアは声を大にして言いたくなった。頬を赤く染めてそんな微笑ましい言葉を口にするラウラが、どうしても自分の知るラウラ・ボーデヴィツヒと同一人物だと思えない。いくら何がしかのショックな出来事があったとはいえ、その変貌ぶりたるやそっくりな別人と言った方が納得できる。

最早初めましてと言って改めて自己紹介をした方がいいんじゃないかと、セシリアの思考が混乱する中、鈴が改めて今日の目的を説明する。

「だってさ、ラウラって私服全然持ってないのよ？　女の子としてそれは駄目でしょ」

「全然？」

「そう、全然。だって自室のクローゼット見てみたら制服とトレーニングウェアしかなかったもん。同室の子に聞いてみてもラウラがそういう女の子の身だしなみに頓着した様子は一切ないってさ」

「…………駄目、なのか？」

「駄目にきまっているでしょう。ラウラさん」

ラウラの、自分がどれほど終わっているか今一理解していない物言いに、セシリアもこれは早急になんとかするべきだと認識した。

同時に、鈴が何故一夏を誘っていないかを理解した。流石にこのようなときに男である一夏は誘いづらかったのだろう。こういうのは女の子同士で楽しくやるべきだ。

しかし、そうなるとエリーと箒を誘っていないかが気になった。セシリアのその思考が顔に出ていたのか、鈴が先にそのことを口にした。

「まあ、一夏は男だし。エリーは生徒会の仕事が忙しいし。

箒はそもそもこういう場には向いていないし」

「向いてない？」

「箒はね、ラウラ以上に終わってる。オシャレを全く気にしてないってことは無いけど、徹底的にカッコいい系の服しか買わないもん」

「まあ、確かに可愛く着飾った箒は想像しづらいですね」

「でしょ？ アイツ中学の時はそのせいで後輩の女の子に妙に人気があっただしね」

「それに比べてラウラさんは、可愛い恰好が似合いそうですものね」

そういつてセシリアは今のラウラの服装に目をやった。至って普通のミニスカートとシャツの組み合わせだが、それでも素材がいいのだろう。中々の物になっている。

だからこそ、ちゃんと自分に似合う服を吟味して着こなせば、それなり以上の仕上がりになるのは想像に難くない。

「そ、そうなのか？ あまり可愛いとかそういうことはわからないんだが」

「何言ってるのよラウラ。アンタが可愛くないのならどこの誰が可愛いってことになるのよ」

実に単純な褒め言葉にも実感の湧かない表情を見せるラウラ。これまでの人生において自分に向けられる評価が全て戦闘能力に起因していた彼女にとって、そのような褒め言葉にどう反応していいかわからない。分不相応だと思うべきなのか、そう言われたことに對して胸を張ればいいのか判断がつかない。

「とりあえず出かけましょうか。ラウラさんには何よりもそういうことが必要でしょう」

これはいけない、とセシリアも鈴と同様の結論に達した。ラウラに必要なのは何よりも日常だと、自分に向けられたありふれた称賛にも困惑する少女を見て痛感する。

「そうね、いつまでもここでだべっていてもしょうがないし、いこつかラウラ」

「ああ、その……よろしく頼む二人とも」

「ふふつ、わかりましたわ。大船に乗ったつもりでいてくれて構いませんわよ？」

「そうよね“女の子”としてはあたしたちが先輩みたいなもんだしね」

そうして出発する女の子三人組。人種や素性はともかく、それは実に平凡な女の子の日常だった。

「女の子というのは、実に大変なんだな」

時刻は既に正午近く、あれからラウラは店に付いた途端鈴とセシ

リアの二人がかりで試着させられ続け、等身大の着せ替え人形と化していた。

しかもラウラにとっては不幸と言ふべきか、三人ともが代表候補生という高給取りであつたため、このようなときに一番ネックとなる金銭面が全く気に掛ける必要がなかった。

故に次から次へと、あれやこれやの服を持つてきては試着の繰り返し。ドイツ軍の精鋭でもあるラウラにとって体力面では問題ない行為ではあつたが、精神力はすでに枯渇寸前であつた

「そう？ 序の口でしょ」

「そうですね、楽しくありませんでしたか？」

大量の衣類が入った紙袋を手を持ち、疲れた様な表情でそう呟いたラウラに対し、同じように大量の紙袋を持ちながらも澁刺とした笑顔を見せる鈴とセシリア。女の子としての各の差が如実に表れていた。

「着る物を選ぶだけで、こんなに苦労があるとは思ひもしなかった」
「仕方無いんじゃない？ ラウラがこういうことしたのって初めてでしょ？」

「ああ、初めてだ。着飾るなんて行為はな」

「全て、とは言いませんが、世の中の女の子は殆ど皆そういうことをしていますわ。何事も初めては労力を伴いますもの」

「そうそう、それにラウラだって気に入った服とかあつたでしょ？」

セシリアと鈴の脳裏に再生されるのは、努めて無表情であろうとするのだが、気に入った格好に御満悦なのがばれれのラウラの姿だ。口の端が僅かに緩んでつり上がっているのがポイントである。

「……うん、自分があんな風になれるなんて思わなかった」

可能性が大きく広がった。高が着るもの一つだが、それでもラウラにとっては何もかもが初めての体験で、カッコいい服に満足したり、たくさんのフリルが付いた可愛い服に恥ずかしさを感じながらも悪くは無いかもと感じたりと、高々数時間の間に人生初の出来事が山の様にあつたのだ。

今日は鈴とセシリアの勧めるままに着ていったラウラだったが、心の片隅で「次はどんなものが来るんだろう」と、実に真つ当な高揚感を抱き、初めて趣味の片鱗と言えるものを心の中に生み出していた。

「ふふ〜ん、楽しかったの？」

「えっ！！ あの……うん、楽しかった」

それを思い返して微かに綻んだラウラの表情は、実に綺麗な物だった。花が咲く様な、と言い表わせるほどに。

その緩みが原因だったのかもしれない。

「あれ？ 今のって」

「ラウラさんのお腹の」

ラウラの下腹部から鳴った可愛らしい音。時刻は昼近くでもうそろそろ昼食にはもってこいの時間である。つまりはラウラのお腹の虫が鳴ったのだ。

「……………うう」

軍での訓練の時は限界まで訓練して、腹の虫を盛大にならしながら軍のレーションを食べていたラウラだったが、今日のこれには何

故だがとてつもない気恥ずかしさを感じていた。

どうしてか、これはいけないと感じて、自覚できる程に熱を持った顔を隠す様に俯いた。それでも耳朶まで赤くなったのには気づいていないラウラだった。

「よっし、それじゃあお昼にしましょうか」

「そうですね、ラウラさんがもう限界の様ですし」

「ふ、ふんっ……私はまだいけるぞ」

手本の様な虚勢を張るラウラの為に、鈴とセシリアは昼ご飯をとる場所を探すことにしたのだった。

「
っーわけでお客さん連れてきてあげたわよ!!」

そうして三人がやってきたのは一軒の食堂。しっかりと年季の入った建物のそこは、近隣の住民にはなじみの食堂であり、その名を「五反田食堂」と言った。

「何がっーわけで、だ。相変わらずデメエは騒がしいな」

真っ先に出迎えたのは、いかにもぶっきらぼうといった表情を浮かべるロングの髪を赤く染めた青年だった。客商売としては不適切というほかない態度であったが、それに対し鈴は一切気分を害した様子を見せない。

「アンタも相変わらずね、弾」

「お前もな、ウリ坊……とりあえず業火野菜炒めでいいのか？」

「うん、三つお願いね」

そういつて勝手知ったると言わんばかりに給水機から水を汲み、カウンターに腰を下ろす鈴。セシリアとラウラも鈴のそんな様子に少々気圧されながらも鈴の横に腰を下ろした。

「ちょっとウリ坊、何勝手に頼んでますの」

「……別に私は構わないが」

「大丈夫だって、頼んだのはここの看板メニューだし」

勝手に注文を頼んだ鈴に対し不機嫌さをあらわにするセシリアだったが、それを宥めたのは厨房に注文を伝え終わった先ほどの青年

五反田弾 だった。

「すまないな、コイツときたら昔から先走る性質だよ」

「え、えっと……」

「ここの見習の五反田弾だ。このウリ坊とは中学からの付き合いだな」

変わらずぶつきらぼうと言える表情と口調だが、その雰囲気は落ち着いたもので浮ついた感じが無かった。しっかり者のチンピラ、という表現が適切かもしれない。

「まあ、ウリ坊が頼んだ奴は爺さん自信の逸品だから、期待してくれ」

「はあ、そこまでおっしゃるのなら」

「全く、いつも落ち着けと言ってるだろうが」

そういうと同時、手に持つお盆で鈴の頭をこつく弾。しっかりと痛くないよう加減しているあたり、弾の人の良さが現れている行為

だった

「うつさいわね、そんなの自分が一番解ってますよ」だった

「だったら直せ。そういうノリはいつまでも通らねえぞ。」

で？ この二人はお前の新しい友達か？」

「そうよ、セシリアとラウラ。クラスは違うけどね」

「初めまして、セシリア・オルコットと申します。イギリスの代表候補生ですわ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツの代表候補生を務めている」

「また結構な肩書の友達だな。そういや一夏から聞いたが、お前も代表候補生なんだってなウリ坊」

「何よ、似合つてないとも言いたいわけ？」

「ちげえよ、すごいなって言いたいだけだ。たった一年でそこまでいったんだからそう思うのは当然だろうが」

「う……ありがとう」

「まあ、見てのとおり素直じゃない奴だが、根はいい奴だから仲良くしてやってくれ」

「うがっっ！！ アンタはあたしの兄貴か、母親かっ！！」

「だったらすぐに吠えるその癖を治すんだな」

そう言いながら弾は厨房から出来上がったばかりの業火野菜炒め定食を三人の前に配膳する。初めから勝負にならないほどの落ち着きの差である。

「ふふっ、ではいただきます」

「ああ、私もいただきます」

ここに来る前とは違って、今度は鈴が微笑ましい視線に晒されていた。そしてセシリアと鈴は出来たてでおいしそうな香りを漂わせる野菜炒めに箸を伸ばす。学園の食堂で日本食にもある程度慣れて

いるセシリアはともかく、ラウラの方は少々おっかなびつくりという感じで、箸でつまんだ野菜を口に含む。

「はむ……むぐ……はむ……」

しかし、ラウラがどういった感想を抱いているかは、黙々と口元と食器の間を往復させる箸の動きが、実に雄弁に物語っている。

「肩書きの割には、えらく可愛らしいお嬢さんだな、おい」

「ISにだけ打ち込んできたからね、ある意味箱入り娘なわけよ」

「じゃあオルコットさんはどうなんだ？」

「一夏に付き合って平然と酒飲むぐらいには不良娘よ？」

「“付き合わされて”、ですので間違いないように」

「ああ成程、あの馬鹿は相変わらずってことか……ということは箒も元気でやってそうだな」

「まあね、箒も相変わらずよ」

「何にせよ、ドンパチをやらなきゃいけない学校だ。気を付けろよ」

そういうと弾は厨房の奥に引っ込んだ。その背中を鈴とセシリア少しだけ呆然としながら見つめている。

「……… なんとというか、泰然とした方ですわね」

「けどあいつ、中学一年の頃まではすごい悪餓鬼だったのよ。飲酒喫煙万引き喧嘩何でもござれのね」

「そうなんですか？ とてもそうには見えませんが」

「ちょうどそのころにあいつのお爺ちゃんが体調崩したことがあってね、それがきっかけになったの。これじゃ駄目だ、いい加減に目え覚まさないとな、って」

それまでは犬猿の仲だった一夏も、弾が心を入れ替えてからは好

意を見せていた。曰く真面目になったから、とは一夏の弁だ。

当然いきなり真面目になった不良仲間からしてみれば、一人だけ真面目ぶっているように思えた弾は目障りな存在だったのだが、それを一夏と筭が率先して排除していくうちに、次第に弾も打ちつけるようになっていったのだ。

「それからここの仕事を手伝うようになったのよ」

「へえ、人に歴史あり、ということですか」

「むぐ？ どうしたんだ二人とも」

鈴が語る弾の来歴に感心するセシリア。そして、そんな状況に目もくれず業火野菜炒めを堪能しているラウラだった。

「何人のこつぱずかしい事をぺらぺらと、ちよつとはその口を閉じておけ」

そして苦虫を噛み潰したような表情で厨房の奥から戻ってくる弾。その手には小皿が一つ握られており、そこからほのかに甘い香りが漂ってくる。

「何それ？」

「……少しずつ厨房に立たせてもらうようになってな。」

「ラウラだっけか、おいしそくに食ってくれて礼だ。未熟者の作った奴だが、爺さんのお墨付きだ」

「あ、ありがとう……これはなんていう料理なんだ？」

「大学芋って奴だ。油で揚げたさつま芋に糖蜜絡めたおやつだよ」

「はむ……むぐ、甘くてほくほくでおいしいな」

「そうか、そいつは良かった。お代わりがいるならもう少しだけあるぞ？」

「ほんとか？」

「おう、ちょっと待ってろ、すぐに持ってきてやる」

実に堂に入った兄貴分を披露する弾。ラウラもラウラで初めて食べる甘味に御満悦のようだった。

「……………本当にそこまでの悪餓鬼だったんですの？」

「この国には男子三日会わざれば刮目して見よ、って諺があるのよ」

それにしても、変わり過ぎだろうと思いつつ、セシリアは話に花を咲かせ過ぎて少しだけ冷めた業火野菜炒めを口に頬張るのであった。

第十三話（後書き）

<あとがき>

この話におけるそれぞれのキャラクターのツンデレ度は以下の通り。
箒……誰にでも対しツン百%。ただしシャルだけデレ百%。

一夏……気に入った奴に対しては基本的にデレ百%、ただし捻くれているためにデレと受け取られない可能性大。そして箒に対してはツン百パーセント。

鈴……基本的にデレ百%。ただし周りがツンとしか思えないために、引きずられてツンになる。故にラウラのデレに大ダメージを負った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569z/>

Dies irae x I S

2012年1月12日22時45分発行